

43p94

忠 孝



孝 忠

張世山 人 中 五 世 經 師



# 傳愛

櫻洲山人筆



## 世界三聖論序

近來歐洲の學者中耶穌教の信者なるもの  
漸く少く却て東洋の宗教を研究するもの  
者乃益々多し殊に佛教を専ら研究せしむる  
者少くはせしをシヨウペンハワー氏乃如きは其を  
論議に誤謬を犯さるるは近世の一大  
家と云ふ氏を耶穌教に賦して佛教に  
當り歐洲の中心を於て始ると云ふ渥敷の說を



唱道をうとバルトミン氏紹きを起ると不覺  
哲學者創唱ふに願ふ佛教の旨意は言  
ふ所は孝、悌、一、五、解、脫、乃、説、の、如、き、は、  
今、く、印、度、招、學、を、う、と、脱、化、し、来、り、り、  
也、あり、と、此、の、如、き、あり、と、東、洋、の、教、義、と、西  
洋、思、想、乃、一、大、要、素、也、を、ま、り、然、る、に、我  
邦、の、學、者、は、彼、國、の、宣、教、師、を、附、如、雷、曰、と  
其、膚、淺、き、も、後、教、を、自、ほ、し、と、東、洋、を、ま、り

招學の宗教等と皆格と陳腐となり、  
毫元顧及する者あり、文盲の然し  
し、前、に、雖、も、心、實、を、憐、む、ま、り、の、あり、と、  
時、の、當、り、と、中、西、半、郎、君、深、く、此、を、感  
する所あり、東洋の宗教を研嚴し  
併せ、基督教の旨意も、佛、教、の、旨、意、も、  
佛、教、の、旨、意、も、佛、教、の、旨、意、も、佛、教、の、旨、意、も、  
余、未、だ、全、篇、を、通、覽、せ、り、と、雖、も、必、ず、



大い見りて居るべきものありて、君頃之書を  
 寄せりし所に出余り、需む因り偶感する  
 所を巻端に記し、以て之を送る。君果  
 之を首肯し、以て之を、

明治廿六年丙午十月十九日

文學博士 村上哲次郎 識

世界三聖論自序

宗教ヲ觀察スルノ點亦一ナラス、教理上ヨリ觀察スルモノト

歴史上ヨリ觀察スルモノトハ同ラズ、哲學上ヨリ觀察スル

モノト道德上ヨリ觀察スルモノトハ同ラズ、又教理上若ク

ハ哲學上ヨリ觀察スルモノト我大日本ノ國體上ヨリ觀察

スルモノトハ同ラズ、然ラバ是レ同一ノ耶穌教ナルモ其觀

察ノ點異ナルニ從ツテ批評ノ結局モ亦異ナラザルヲ得ズ

予ハ元來數年ノ間、心ヲ潛メ念ヲ凝ラシ、極メテ虚心平氣ニ

シテ耶穌教ノ經典ヲ學ビタルノ一人ナリ、故ニ其教祖耶穌

ガ品性ノ欽慕スベク、訓誨ノ敬愛スベキハ夙ニ之ヲ熟知セ

リ、夙ニ之ヲ熟知セルノミナラズ、今日ト雖仰ヒテ耶穌ノ像

ニ對シ、俯シテ耶穌ノ書ヲ讀ム毎ニ、未ダ嘗テ悚然トシテ敬



意ヲ起サズンバアラズ然レドモ耶蘇教根本的ハ教理ニ至  
リテハ遂ニ予ヲシテ首肯セシムル能ハズ予ハ耶蘇教ノ偏  
隘的ナル教理ヨリモ寧ロ佛教ノ宏大的ナル教理ヲ以テ滿  
足スルモノナリ是レ予ガ嚮キニ宗教革命論ヲ著ハシタル  
所以ナリ又耶蘇教今日ノ教理ト習慣トハ我大日本寰宇無  
比的ハ國體ト衝突シテ相容ルモハニ非ルヲ確信ス是レ  
予ガ近日目下ノ一大問題タル教育宗教衝突ハ問題ニ關シ  
テ一篇ノ愚見ヲ世ニ公ニセント欲スル所以ナリ  
然レドモ教理上ノ觀察ヨリシテハ耶蘇教根本的ノ教理ニ  
首肯セザルニモ係ラズ又我ガ國體上ノ觀察ヨリシテハ其  
國家ト衝突スルモノアルヲ認メタルニモ係ラズ耶蘇其人  
ノ品性及ビ其訓誨ノ裡ニ含蓄スル一種ノ趣味ニ至リテハ

感服スルコト頗ル尠ラズ是レ予ガ本篇ヲ題シテ世界三聖  
論ト稱シタル所以ナリ語ニ曰ク君子ハ人ノ善ヲ沒セズト  
予ハ耶蘇教ノ缺點ハ力ヲ極メテ排撃スルニ躊躇セザルモ  
耶蘇教ノ善美亦寧ロ沒スベケンヤ昔者宋ノ朱熹ハ通鑑綱  
目ヲ著ハシ魏ノ曹操ガ篡奪ノ罪ヲ表出シテ其奸ヲ筆誅シタ  
リ是レ朱熹ガ其道ヲ護シ大義ヲ明ニスルノ心ニ出デタル  
モノナリ然レドモ朱熹ハ彼レ阿瞞カ錦袍銀冠百萬ノ玃貅ヲ  
率ヒ赤壁ノ大江ニ臨ミ槩ヲ横ヘテ詩ヲ賦シタルノ雄風ヲ  
愛シ其詩ヲ吟シ又其書風ノ遒勁ナルヲ喜ビテ之ヲ臨摹シ  
タリト云フ予ニシテ耶蘇ノ品性ヲ欽慕シ其訓誨ヲ敬愛ス  
ルモノハ抑又朱熹ガ曹操ノ詩ヲ吟シ其書ヲ學ブノ類タラ  
ズンバアラズ



世人聖賢ヲ信ズルモノハ多ク、聖賢ヲ識ルモノハ少シ、佛教徒ガ釋迦ニ就テ信ズル所、耶蘇教徒ガ耶蘇教ニ就テ信ズル所、ハ或ハ極メテ熱篤ナルベシ、然レドモ彼等ハ其信ズル程亦識ルモノニアラズ、蓋シ信ズルハ崇拜ヨリ生ジ、識ルハ批評ヨリ生ズ、故ニ人ニシテ父母ノ傳組ヲ著ハスモノアラバ其傳組ハ信ズベキモノニ非ズ、何トナレバ天下父母ニ接スルノ最モ親密ナルモノハ其子ニ若クハナシト、雖子ノ父母ニ於ケル全心總ベテ是レ愛情ノ爲メニ支配セラレテ其他ヲ知ラザルモノナリ、如此心事ヲ有スルモノ、筆ニ成リタル者、焉ンゾ其批評的ノ眼光アルヲ望ムベケン耶、予ハ三聖ノ一人ニ對シテハ或ハ是ニ近キノ感情ヲ懷クモノアルヲ免レズ、故ニ予本篇ヲ著ハシ三聖ヲ論ズルニ方リ

テハ務メテ自ラ局外傍觀ノ地ニ置キ、冷淡即チ公平ノ心ヲ持シタルモノナリ、然ラザレハ以テ三聖ヲ比較シ不偏ナル批評ヲ試ルニ足ラザルナリ、耶蘇教及ビ佛教ノ世界ニ於ケル至大ナル感化ハ人皆之ヲ知ル、獨リ儒教ノ感化ニ至リテハ世或ハ其實價ヨリモ安ク之ヲ買収セントス、是レ儒教ノ歴史ヲ知ラザルモノナリ、儒教ノ歴史ハ即チ支那國民ノ歴史ナリ、古往今來支那國民ヲ感化スルノ勢力アルモノハ獨リ儒教アルノミ、其他佛教ノ如キ耶蘇教ノ如キ外邦ヨリ支那ニ輸入スルモノハ多少支那ヲ感化スルト同時ニ、亦却テ支那ノ爲メニ變化セラル、ヲ免レズ、儒教感化ノ勢力亦以テ觀ルベキナリ、儒教ハ果シテ一個ノ宗教ナル乎、儒教ヲ以テ佛教及ビ耶蘇



教ト同視シテ宗教トス、論者或ハ予ガ宗教ノ定義何如ント  
 質問セラル、ナラン、然レドモ予ハ之ニ答ヘテ予ガ宗教ノ  
 定義ハ宇宙ノ大本、未來ノ世界精神ノ存在ニ就ヒテ或ル教  
 説ヲ與フルモノ即チ是レ宗教ナリト言ハントス、而シテ儒  
 教ハ未來ノ世界ニ關シテハ何等ノ教説ヲ與ヘザルモ、其稱  
 シテ天ト云ヒ、道ト云ヒ、靈ト云ヒ、心ト云フニ至リテハ亦多  
 少宗教ノ元素ヲ含蓄セズンバアラズ、故ニ佛教及ビ耶蘇教  
 ヲ以テ世外教トシ、儒教ヲ以テ世内教トスルガ如キハ頗ル  
 其當ヲ得タリト雖、儒教ハ亦決シテ一個ノ宗教ニアラズト  
 言フ可ラザルナリ、  
 今日ノ如ク宗教問題ノ熱心ニ討究セラル、ノ時代ハアラ  
 ズ、佛教ハ外教ノ刺撃ニ遭フテ長眠ノ中ヨリ漸ク復活シ、儒

教ハ將サニ我邦道德上ノ舞臺ヨリ其地位ヲ辭退セントシ、  
 耶蘇教ハ佛教ノ反對ニ遭フテ一蹶シ、哲學ノ反對ニ遭フテ  
 再蹶シ、國家主義ノ反對ニ遭フテ三蹶シ、愈々困難ノ地位ニ  
 陥ルニ至レリ、然レドモ天地ハ大數ヲ以テ之ヲ見レハ百年  
 ハ、誠ニ一瞬ニ過ギズ、宇宙永遠ハ真理ハ豈ニ一時代ノ能ク  
 勝敗ヲ決スル所ナランヤ、故ニ宗教ハ勝敗ハ唯ダ真理非眞  
 理ハ如何ヲ視テ之ニ訴フルハ外アラザル耳、

而シテ人間ニ永遠ノ命運ト目的トヲ示メスモノハ豈ニ宗  
 教ニアラズヤ、精神ノ安心立命ヲ示メスモノハ豈ニ宗教ニア  
 ラズヤ、世界文化ノ一大有力ナル元素タルモノハ豈ニ宗教  
 ニアラズヤ、然ラバ宗教ノ事ハ一般世人ガ討究スベキ十分  
 ナル價值アルモノニシテ、豈ニ獨リ之ガ討究ヲ以テ僧侶ニ



委託スベキモノナランヤ、  
 世人耶蘇教ヲ討究スルハ佛教ニ害アルモノ、如クニ思惟  
 シ、又佛教ヲ討究スルハ耶蘇教ニ害アルモノ、如クニ思惟  
 スルモノハ、是レ謬想ノ甚キモノナリト謂ハザル可ラズ、吾  
 輩ハ佛教ヲ以テ主トスルモノナリト雖、儒教及ビ耶蘇教ヲ討  
 究シテ愈々佛教ノ眞理ニ發明スル所アリ、蓋シ比較ハ今代  
 學術ノ一大基礎ナリ、故ニ史學アレバ斯ニ比較史學アリ、法  
 學アレハ斯ニ比較法學アリ、文學アレハ斯ニ比較文學アリ、  
 語學アレハ斯ニ比較語學アリ、比較ハ彙類ヲ生シ彙類ハ概  
 括ヲ生シ彙類ト概括トハ許多ノ理法ト眞理トヲ發明ス、而  
 シテ宗教ニ至リテ、豈ニ獨リ比較宗教ノ學ナシトセンヤ、是  
 レ予ガ世界三聖論ヲ著ハスヤ、亦比較宗教ノ學ヲ以テ根

據トスル所以ナリ、



# 世界三聖論

## 目次

### 第一章 緒論

- ◎ 佛教儒教及び基督教を以て世界の三大宗教に擇みたる理由◎ 比較宗教學◎ 儒教及び基督教を研窮して益々佛教の眞理なるを信ず
- ◎ 本論の計畫◎ 比較の目的

### 第二章 教祖

- ◎ 釋迦孔子耶蘇三大教祖の生れたる時代及び其境遇◎ 釋迦と耶蘇とは改革者にして孔子は恢復者なり◎ 三大教祖の感慨◎ 三大教祖の訓誨◎ 彼等が勇氣平和溫柔謙遜謹慎及び仁愛の諸徳◎ 品性の勢力◎ 彼等の生活◎ 彼等が自ら書を著さゞりし理由◎ 著書の弊◎ 三大教祖の繼續者◎ 論語聖書及び佛教の簡短なる批評◎ 三大教祖が當時の注意を惹きたる事情

### 第三章 教理

○目次



◎人類の二大思想◎唯物説有心説及び唯心説◎基督教の奥義◎佛教の極理◎佛耶二教の比較◎宗教信仰の時代◎佛教と基督教の極めて類似するの點◎世外教と世内教◎儒教の教理◎基督教の教理◎佛教の教理◎三大宗教の彙類◎三大宗教發達の歲月◎三大宗教の三大觀念及び其比較◎多神教一神教凡神教の關係◎佛教が我邦に勢力を得たりしこと極容易にして基督教の勢力を得るは極めて困難なる所以◎儒教は多神教なり◎教理上の釋迦◎教理上の耶穌◎超性的の歴史と自然的の歴史◎統一派ユニタリアン◎教理發達の二大時代◎儒教未來の世界を説かず◎基督教の靈魂不滅説◎佛教の生死流轉説◎無常と因果◎本章の約説

### 第四章 教會

◎三大宗教感化の勢力及び其性質◎儒教感化の勢力を觀るべき二大時期◎佛教擴張の三大線路◎基督教の新舊教派◎種々の點より三大宗教の比較◎佛教と基督教とは世界主義にして儒教は國家主義なり◎佛耶兩教が國家的精神を養成する原因◎基督教は白色人種が優勝勢力の源因にあらず◎佛教に關する種々批評の辨明◎基督教國と云ふ一大觀念の起源◎儒教教會の組織◎基督教教會の組織◎佛教教會の組織◎宗教思想發達の三大時代◎佛耶兩教が勢力を得る内因外因◎宗教感化の前途◎本章の約結

### 第五章 結論

◎伊藤伯の比喩◎品性と教理◎教理と教會◎品性に包まれざる教理◎英雄崇拜説◎元の世祖の言◎吾人は宗教を研窮するの機會を得たり◎著者宗教界に於けるの經歷

## ○目次畢



中西牛郎著

世界三聖論

第一章

緒論

佛敎儒敎  
及び基督  
敎を以て  
世界の三  
大宗敎に  
撰びたる  
理由

吾人は將に世界の三大宗敎なる名稱を佛敎、儒敎及び基督敎に與へんとす。是れ自ら至當なる理由の存するありて然るなり。蓋し時代の新舊に就ひて之を言ふときは、婆羅門敎は佛敎よりも古く、猶太敎は基督敎よりも古しとす。然れども婆羅門、猶太の二敎は國民的宗敎にして世界的宗敎にあらず。故に婆羅門敎は唯だ印度國內にのみ行はれ、猶太敎は唯だ猶太國內にのみ行はれて、他の國民を感化するの勢力なし。是れらの敎理とする所、各其國民の歴史と離る可らざるの關係を有し、之と興廢存亡を共にするを以てその傳播獨り一國に限りて徧く世界に行はれず。故に斯る宗敎は時代の上よりして論ずるときは、其最も古きにも係らず、世界宗敎の名稱を與ふ可らざるなり。



若し又た信徒の數に就て之を言ふときは、アテヒヤの豫言者馬哈獸によりて建設せられたる回教の如きは、嘗て歐洲に進入し、四方を風靡し、今日猶ほ歐亞各國に傳播し、其信徒の數佛教、基督教よりも少きも儒教よりは却て多かるべし、然れども吾人之を以て世界三大宗教の一に置かざるものは、抑も又た其故あることにして、回教と基督教とは教理上、儀式上多少の差異あるにもせよ、本と是れ同胞より出でたる兄弟姉妹の關係あるものなり、若し基督教を以て兄とし、姉とするときは、回教を以て弟とし、妹とせざるを得ず、且つ教祖の人物を以て之を論ずるに、馬哈獸も亦た是れ人類史上の一大偉人たるを失はずと雖も、その道德の高尙なると思想の深奥なるに至りては、基督教の教祖耶穌にすら劣ること數等なるを免れず、況んや敢て釋迦孔子と倫倫を同ふするを望まんや、是れ吾人が回教信徒の多きことは其儒教の上に出るにも係らず、之を加へて世界の四大宗教とせざる所以なり、抑も佛教、儒教及び基督教の三大宗教は各々特異なる歴史を有せり、各々特異なる感化を有せり、各特異なる性質を有せり、殊にその教理の加きに至り

### 比較宗教學

ては互に相反對するの點も亦た少らざるを見る、而して歷史上より眼光を垂れて之を觀るときは、三教各々人類文化の進歩に向つて最大功勳を奏したり、又た哲學上より之を判するときは、佛教と基督教とは眞諦主義なり、而して儒教のみ獨り俗諦主義なり、儒教と基督教とは一神主義若くは多神主義なり、而して佛教は乃ち凡神主義なり、儒教は自然と國家とを以て其極とするも、佛教と基督教とは自然の上に超然たり、又た國家の上に超然たり、故に三教の同き所以、亦たその異なる所以を明察するものは、以て世界各種の宗教を盡すに足れり、是れ吾人が佛教、儒教、基督教を撰擇して世界の最大宗教となして之を比較せんと欲する所以なり、  
今や宗教も亦た一の科學となれり、是れ科學の理論を以て宗教を説明すべしとの意義にあらざして、寧ろ科學研窮の方法を宗教の事實に應用して、一種の科學を構成すべしとの意義なり、蓋し其方法たるや、世界各國に現れたるあらゆる諸宗教の事實を集めて之を比較し、先づ其裡に就てるの同きものと同らざるものとを別ち、その同きものを分析して、徧く各宗教に渉る普



通の元素を求め、宗教の眞理は一に歸着する所あるを示して以て宗教の根抵と性質とを明かにす、是れ此學の目的とする所なり、又たその同らざるものを分析して、各宗教の由りて起る起源と境遇とを示して宗教の歴史は國民の歴史に關係あるを明にす、是れ亦た此學の目的とする所なり、故に此學を稱して比較宗教學と云ふ、今や吾人が本論を著はす蓋し亦た此學に於て發明せられたるの眞理を以て基本とし、之に加ふるに自己多年此世界の三大宗教に就て研窮する所を以てし、聊か自己の發明する所を世に質して以て此學に補ふ所あらんと欲す、是れ本論を著はす微意の存する所也、

宗教を論ずるには、教祖の品性と教理とを以て之が主眼とす、教徒の品性は直ちに以て教理の眞理非眞理を定るの標準とするに足らずと雖も、その教理を證明するに於ては最も勢力あるものなり、吾人は耶蘇の行ふ所を以て其説く所を證明するものあるを見るも、未だ耶蘇の説く所を以て其行ふ所を證明するものあるを聞かず、吾人は孔子の行ふ所を以て其説く所を證明するものあるを見るも、未だ孔子の説く所を以て其行ふ所を證明するものあるを聞かず、吾人は釋迦の行ふ所を以て其説く所を説明するものあるを見るも、未だ釋迦の行ふ所を以て其説く所を證明するものあるを聞かず、是れ宗教の眞理非眞理を判斷すべきものは素より教理にありとするも、信徒をして信仰を起さしむるの勢力は却て教祖の人物と品性とに存するを觀るに足れり、故に徒らに宗教の教理のみを知りて教祖の品性を知らざるものは、是れ未だ宗教の全体を了解したるものなりとせざるなり、是れ吾人か第一に教祖の人物を論じ、第二に教理を論じ、第三に教會を論ずるの順序を定めたる所以なり、

佛教、儒教、基督教の三大宗教はその性質の互に同らざるにも係らず、その教理に於て反對するの點少らざるにも係らず、唯だ一の一致するの點あるを見る、夫れ何んぞや、曰く釋迦、孔子、耶蘇の三大偉人が各々其教を建設するや、敢て政治の權威に依頼するが如きことをせず、又た敢て社會習慣の勢力を利有するが如きことをせず、三人共に當代の風潮に逆ふて八面攻撃の中に一身を陥れ、獨り彼等自身の情慾と闘ひ、誘惑と闘ひ、魔鬼と闘ふたるのみな



らず、亦た其時の習慣と闘ひ、其時の輿論と闘ひ、其時の権力と闘ひ、真理の輝光と品性の勢力とを以て縦合意を當時に得ざりしも勝を永遠不朽に制することを得たることは是れなり、此點よりして觀るときは、釋迦、孔子、耶穌の三大偉人、生其時を同合せず、地其邦を同ふせず、教其説を同ふせずと雖も、彼等は千載の知己を以て互に相許さんのみ、而して今や此三大宗教は我日本に榮り、各々旗幟を一方に樹立して、以て優勝劣敗の競争を試みんとす、苟も今日に方りて真理を講じ、國家を思ふの志を抱くもの、此三大宗教の互に相關係し、互に相一致し、互に相反對する所以を知らずして可ならんや、抑も三教の間に居りて罵詈攻撃す、壯は則ち壯なり、然れども真理を明にする所以に非ず、三教の外に立ちて該羅綜合す、快は則ち快なり、然れども真理を明にする所以に非ず、唯だ心を虛ふし氣を平にして三教を比較し、真理を搜索するの熱心あるもの、始めて以て三教の真理を知るに足れり、亦た以て三教の優劣を知るに足れり、

### 儒教及び

吾人は佛教信徒なり、故に吾人は佛教を以て三大宗教中の最も真理なるも

基督教を  
研窮して  
益々佛教  
の真理な  
るを信す

のとし、又た釋迦を以て三大偉人中の至大なるものとし、然れども佛教を信するが爲めに、儒教、基督教の裡に含蓄する真理の光を掩ふものにあらず、又釋迦を拜崇するが爲めに、孔子、耶穌の卓絶なる品性を否むものにあらず、否儒教、基督教を研究して佛教を確信すること益々篤きと加ふ、是れ三大宗教の間に存する一致の點を發見する所あればなり、夫れ吾人に一の友ありて吾人に語るに或事を以てす、吾人其事の條理を考へ、又た其人物に徴して疑ふ所なきときは其言ふ所を信せざるを得ず、而して其後數人の友ありて吾人に語るに同一の事を以てするときは、吾人益々其言を信せざるを得ず、比較宗敎學の裨益を吾人に與へたるや斯の如し、吾人の意豈に他あらんや、亦た唯だ自己の研窮によりて得たる所の裨益を以て之を他に與ふるの微衷に外ならざるのみ、

### 本論の計

若し本論の旨趣を略説すれば、第一章敎祖に於ては釋迦、孔子、耶穌の現出したる時代と境遇とを叙して、その敎の由りて起る所を説き、進みて三大偉人の品性を論じ、三大宗教感化の異なる所を説明するを以て目的とす、第二章



教理に於ては三教々理の最大主義を明にし、各教の内に發生したる種々各派の異説の如きは之を避けて、三教本來の純然たる眞面目を明にするにあり、例へば佛教の中分れて大小二乗となり、其後又た各派に分れ、儒教に漢宋の二派あり、宋儒亦た米陸の同異あり、基督教に新舊兩派あり、新教の各派亦た數十百派に下らず、是等各派の源流を窮めて沿革を明にするは利益あることなるべしと雖ども、是れ此の小冊子の收て任する所にあらず、本論は唯だ務めて教祖の經典を主として教理を此中に求め、以て三教本來の眞面目を明かにするを以て自ら期すれば、その目的亦た頗る教理沿革史と異なるものあり、第三教合の章に於ては三教の人類社會に及ぼしたる感化の影響及び勢力を叙するを以て目的とす、故に此三章下に於て三大宗教の一斑を窺ふことを得るも亦た難きにあらず、而して本論の特色として他に異なる所は、比較にあり、され眞理は比較によりて見はる、凡て比較の結果は同一の點を得るか、將た不同の點を得るか、類似の點を得るか、將た不似の點を得るかに外ならず、その同き者は何の故に同きかを知るものは、是れ一の眞理

比較の目的

を見るものなり、その同らざる者は何の故に同らざるかを知るものは、是れ亦た他の眞理を見るものなり、然らば三大宗教を比較して得る所の眞理は亦た決して鮮らざるべし、抑も釋迦、孔子、耶穌の三大偉人は地の相距ること千有餘里、世の相後れたること數百千年、その邦國を同ふせず、その時代を同ふせず、その教育を同ふせず、亦た其個人に屬するの特質を同ふせず、則ち其人物、其言行に於て同じからざる所あるも亦た素より言を俟たず、その品性に於て壯大と美麗との互ひに相反對するや、之を山岳に比すれば、アルプスとローマラヤとの如きものもあらん、之を植物に比すれば、老松と野花との如きものもあらん、之を建築に比すれば、ゴシック風と、コロンシアン風との如きものもあらん、今や吾人自ら掃らすして此三大偉人を比較して之を論せんとす、是れ豈に宇宙の一大奇觀にあらずや、而して此邦國を異にし、此時代を異にし、此教育を異にし、此境遇を異にし、此特質を異にする三大偉人の誦ふる所をば微細に詮じ來れば、往々相符合するものあり、是れ豈に天地の至理至言にあらずや、吾人乞ふ進んで讀者と之を評論せん、



第一章 教祖

十

釋迦孔子  
耶蘇三大  
教祖の生  
れたる時  
代及び其  
境遇

大國偉人を出だすの語、豈に敢て吾人を欺かんや、釋迦を出したる印度、孔子を出したる支那、共に皆な地球上の大國なるべしと雖も、獨り耶蘇を出したる猶太に至りては、地中海に濱するの一小邦たるに過ぎず、何を以て之を大國と稱するや、蓋し土地の面積、人口の多寡を以て之を言ふときは、猶太は素より小邦なるのみならず、耶蘇の降誕せし頃には羅馬帝國の爲めに併呑せられ、黄金の器に攫られて、その雄翼の下に雌伏したる一弱種族たるに過ぎず、此點よりして言ふときは、猶太は大邦に非ざるなり、然れども、彼れは上帝の選民として、他邦に誇れり、彼れは至大なる歴史を有するを以て世界に誇れり、彼れは至大なる希望を以て自ら期せり、蓋し此時に方りて文學、技術の淵藪たりし希臘の如きも、既に同く羅馬の郡縣となり、商業航海の中心たりしカルセーアの如きも、亦た同く羅馬の郡縣となりしも、その希望と活氣とは全く既に消

へ果てたり、獨り猶太に至りては止を得ずして羅馬の強盛なる權威の下に服屈しつゝあるも、其國民は擧つて舊約の豫言を信じ、一旦救世主其種族の中より出で、國民を外邦の羈轡より脱して、猶太の榮光を世界を震動する程の堂々たる大國を建設せんことを熱望して止まざるなり、是れ豈に精神至大なる國民に非ずや、且つ世界各國中猶太の如く宗教上の教育と經驗とを受けたるの國民はあらず、猶太は宗教を以て其邦を建て、宗教を以て其國を護したるの國民と謂ふべし、然らば人類史上の一大宗教家耶蘇其人にして此邦に降誕す、蓋し亦た偶然に非ざるなり、耶蘇既に斯の如き數千年間準備あるの邦に生れたり、而して當時耶蘇を圍繞したるの境遇も、亦た逆境的に耶蘇の品性を刺戟鍛鍊せしこと少らず、即ち耶蘇の時に方りて其國民の道德は腐敗し、其宗教は儀式と偽善とに流れ、最も大人癡傑の純潔にして剛鐵なる手腕を假りて之が一大改革を要するの時機たり、而して耶蘇の既に救世事業の舞臺に上るや、「パリサイ」「サドカイ」の二派あり、甲は摩西の法律を死守して形式に流るゝの頑固黨にして、乙は



浮世の快樂と名譽とに汲々たる宗教を器械視する冷笑者流あり、此二派聯合して基督の一大勁敵となりしなり、耶蘇にして苟も一點の批難すべきものあれば、忽ち起ちて之を攻撃せんとす、斯る兩派の間に立ちて精神的の大改革を斷行せんとす、千難萬艱交々脚底に横りて以てその進路を遮るに至る、亦た怪むに足らざる也、而して耶蘇兩派の人に對し、彼れ攻撃すれば我れ詰辯し、眞理の輝光燦然として其間に見はれたり、然るに耶蘇に先つこと千年以前、釋迦の印度に降臨するも、蓋し亦た之れと境遇を同ふするものあり、

印度は宗教國なり、哲學國なり、感情的の信仰を以て之を言ふときは、印度猶太の兩國民は相伯仲すと雖も、宗教的の深奥なる思想に至りては、印度國民は猶太國の比に非ず、故に印度國民が釋迦の爲めに準備をなしたるが如し、而して耶蘇の時代に「パリサイ」「サドカイ」の二派ありし如く、釋迦の時代に亦た九十五種の外道ありしなり、唯だ二大偉人が之に對する方法に至りては、各々其撰を異にせり、耶蘇は往々舊約を引びて其反對黨を屈服せしめ

蝮蛇偽善者、少信者と云ふが如きの口調を以て彼等の良心を攻めて改悔せしむと雖も、釋迦は一たびも韋陀の經典を引ひて九十五種の外道に對したることなく、且つ毎に精嚴なる論法を以て彼等の良心よりも寧ろ其理法に訴へたり、是れ耶蘇は舊約を信するも、釋迦は韋陀を信せず、基督教は感情を主とし、佛教は道理を主とするを以てなり、  
龍樹嘗て釋迦の事を論じたる中に言へることあり、曰く或人釋迦が韋陀を讀まざるを以て一切智者にあらずとす、蓋し釋迦嘗て韋陀を讀まざるに非るべし、恐らくは其四韋陀の經典を信せざるを以て之を引證するの必要なかりしならん、故に釋迦は韋陀の經典を引ひて婆羅門教の徒を反詰するが如きことをなさず、唯婆羅門教の末流に係る九十五種の外道が哲理の根據とする所を研窮して其非眞理たる所以を明にし、破邪顯正の論鋒を揮ふたり、之に反して、耶蘇は我が來るは律法若くは豫言を破壊するが爲めにあらずして之を成就せんが爲めなりと云へり、此律法若くは豫言と稱するものは乃ち舊約の全体を指すものにして、耶蘇が當時士子學者即ち猶太教徒



と異なる所は唯だ舊約に就ひて見解を異にするに過ぎざるのみ、故に耶蘇は希臘の哲學、羅馬の法律及び其他當時の學術を修めたるを聞かずと雖も、舊約に至りては夙に之を研窮せしと見へ、口に其文を記誦し、心に其義を融會し、之を引用すること縱横自在にして、苟も一たび耶蘇の引用を經たるものは句々皆な活きんとするが如し、之に類するものは恐らくは千古唯だ一の孟軻あるのみ、孟軻の書を引き詩を引く、其文字に拘泥せずして精神を看取す、耶蘇の舊約を引くと彷彿たるものあり、

故に釋迦と耶蘇とは一大改革者として當時に現はれたり、釋迦は婆羅門教に對して佛教を説き、種姓主義に反對して平等主義を主張したり、尤も釋迦の主張したる平等主義は、佛國革命の健兒ミラボー、ロベスピエーヤの平等主義の如く、初めより政治上に於けるの人權平等を意味したるものにあらず、然れども婆羅門教が種姓四族の中、獨り「ブラミン」族を除きて他の三族は僂侶となりて經を誦し、教を宣ぶること能はずと云へる千百年間の一大鐵制に反對して、四族均しく來りて我佛法を聞くことを得べし、四族均しく來り

て我が弟子となることを得べしと揚言して、精神上より人類價値の平等なることを主張したり、故に釋迦の平等主義は本と是れ精神上的の平等主義なるも、佛教の勢力をして全く婆羅門を壓倒して之に代らしむるに至りては、其勢終に此宗教上政治上に關係ある種姓制度を顛覆するに至るべきは是れ理の親易きものなり、然れども惜ひかな釋在世の時には、東は恒河より西は印度河に抵り、北は雪嶺の氷雪脛々たる麓より南は印度洋の激浪の岸脚を洗ふの錫倫島に抵る迄、佛の遊履する所歡迎せられざるはなく、殆ど印度全國を擧げて之に風靡するの勢ありしも、佛一たび滅度せしより、未だ數十年ならずして、婆羅門教は非常なる反動の大勢を鼓勇し來り、前日に比すれば更に一層の猖獗を極むるに至れり、此時に方りて佛教徒は境外に驅逐せらるゝものあり、劍戟に殺さるゝものあり、水火に投せらるゝものあり、その慘狀は基督教が羅馬帝國の初代に於て被りしものと同じものあらん、唯だ釋迦滅後二百餘年の頃に、パタリプトラ國に阿輪伽王なるもの現れ、一朝感ずる所ありて佛教に歸し、大に佛教の道德を實行して其邦の平和と隆



昌とを致し、又た使を四隣に遣はして佛教を勧めたり、故に阿輪伽王の佛教に於けるの功勳は、羅馬帝コンスタンチンか基督教に於けるの功勳と異なることなし、然れども阿輪伽王の大業も終に永くその後嗣に継承せらるゝ能はずして、婆羅門教に獨り猖獗の機會を與へたり、

釋迦と耶  
蘇とは改  
革者にし  
て孔子は  
恢復者なり

左れば釋迦と耶蘇とはるの目的を同ふせざるに係らず、當時の一大改革者として現はれたるには相違なきなり、獨り魯の孔子に至りては、之を稱して改革者と云はんよりは寧ろ恢復者と云ふの適當なるに如かさるなり、孔子は堯舜を祖述し、文武を憲章し、周祖の創業者と立法者とを兼ねたる周公の如きは其平生最も欽慕する所にして、夏の曆を用ひ、殷の輅に乗り、周の冕を服し、所謂三代の其制美法を折衷して治化泰平の基を開くものは、孔子の窮に抱負せし所なり、蓋し孔子の時に當りて周室愈々衰微振はず、徒らに虛名を擁するのみにして海内を號令するの實權を失し、齊、楚、晉、秦の如き封建諸侯の強大なるものは、隱然一隅に割據して雄を争ひ、夫の齊の桓公、晉の文公の如きは既に富源を開き、兵甲を練り、賢相を擧用し、諸侯を糾合して一時覇

業を開き、天下の諸侯を率ひて周室を尊びしも、大勢の傾く所爰々乎として既に漸ふ支亦可からざるに至らんとす、此勢を馴致して此に至らしめたるは何物なるやと問ふに、文武によりて布れたる教化既に衰頽し、周公によりて建設せられたる制度既に廢弛し、禮樂實用を失して虛文となり、上下の名分破れて社會の綱紀紊亂したるに職由せずんばあらず、然れども周室幸に猶は一縷の命脉を存して、天命人心未だ全く革新するに至らず、故に孔子は其身僅かに魯國の一大夫たるに過ぎざりしも、此の既に傾かんとするの大勢を救ふて王道を振ひ興さんと欲したり、故に曰く如有用我者、吾其爲東周乎、と是れ吾人が孔子を稱して改革者と云はんよりも、寧ろ恢復者と云ふの適當なるに如かずと斷言する所以なり、

然らば孔子は如何なる手段によりて此一大恢復の目的を達せんとしたるや、是れ實に吾人の一考に値ひするものなり、抑も孔子は禮樂兵刑を以て治道の要具となせしと雖ども、禮樂兵刑は唯だ是れ政治の機關のみ、政治の精神にはあらざるなり、權量を謹み、法度を密にし、廢官を修め、滅國を興し、絶世



を繼ぎ、逸民を擧るは綱紀を振ふ所以なりと雖ども、是れ亦た政治の本領に  
 あらざるなり、然らば孔子が以て政治の本としたるものは何んぞやと問ふ  
 に、道徳、經驗、力行の三個にして、孔子は其身に行ふ所のものを以て之を家國  
 に及ぼし、其家國に及ぼしたる所のものを以て之を天下に及ぼし、一身の徳  
 を以て自ら天下國家の中心となるにあり、此點よりして觀るときは、孔子の  
 目的は天下國家にありと雖ども、その本は則ち自治主義にありと謂はざる  
 を得ず、故に孔子は政治を論ずるに於て、理論を主とせずして、實驗を主とし、  
 他治を主とせずして自治を主とす、顧ふに後世彼のマツキヤベリーが政術  
 を用ひて目的を達したるの日は、即ち其自ら其心を欺ひて道徳を破りたる  
 の日にして、是れ全く孔子の反對に出でたるものなり、蓋し孔子の道は多端  
 なりと雖ども之を約すれば、仁の一字に歸す、而して仁の徳たるや、恰も太陽  
 の輝光八表を照らし、一たび其輝光に觸るゝものは物として顔色を生せざ  
 るものなきが如し、孔子は唯だ仁徳を修めて之を其身に施し、之を其家に施  
 し、之を其國に施し、之を天下に施して其功を奏せざるはなきなり、孔子既に

斯道を得るの抱負する所を實施して以て恢復の目的を達せんが爲めに、先  
 づ其生れし邦即ち魯國に仕へたるも容れられずして海内に歴遊し、七十二  
 國の封建君主に説きたるも遂に用ひられざりしは遺憾なりと謂つべし、而  
 して孔子が其道を行ふに熱心なる、三千人の門人を教育し、中に就て顔淵、閔  
 子騫、冉伯牛、仲弓の徳行に於ける、宰我、子貢の言語に於ける、冉有、季路の政事  
 に於ける、子游、子夏の文學に於ける、其徳既に成り、其材既に熟し、孔子をして  
 一日其志を得せしめたらんには、是等の徒その耳目となり、その手足となり、  
 又其盛大業を繼續せしこと疑ふ可らざるなり、  
 之を要するに、釋迦と耶蘇とは改革者たりし也、孔子は恢復者たりし也、而し  
 て釋迦と耶蘇とは宗教的、道徳的手段を取り、孔子は政治的、道徳的手段を取  
 り、

### 三大教祖 の感慨

抑も釋迦、耶蘇、孔子は大人豪傑の至大なるものにして、彼等は唯だにその境  
 遇に感化せられざるのみならず、自ら奮つて人類歴史上の一新時代を開き、  
 人類社會の進歩に一新元素を加へたる者也、而してその初感慨を起したる



所は蓋し同らま、孔子は社會の衰頽を觀て感慨を起せり、耶蘇は人類の墮落を觀て感慨を起せり、釋迦は人生の無常を觀て感慨を起せり、孔子嘗て曰く「斯民也三代之所以直道而行也、故に孔子は耶蘇の如く人類の罪惡を攻めて真心を洗ふを以てその目的とせず、唯だ其時の爲政家をして王道の本旨に反らしめ、道德と禮樂とを以て風を移し俗を易へ、治化太平の基を開かしめんとするに外ならず、乞ふ試に彼が言ふ所を聞け、曰く民は之に由らしむべし、之を知らしむ可らず、曰く先づ民をして富ましめよ、然る後ちに之を教へん、曰く百姓過ちあらば予れ一人に在らん、此獸よりして觀るときは、孔子の眸裡に映じたるものは國家たり、孔子は先づ社會に治者、被治者の二大階級あるを認めたり、孔子は治教上治者を以て自動的地位に置き、被治者を以て他動的の地位に置き而して、自ら治者を教育するの大任に當りしなり、故に唯だにその服裝のみを觀て、更に深く精神を察せざるときは、孔子も管仲も異なる所なきなり、蓋し孔子は魯國に生れ魯國は即ち周公の國なるを以て、孔子は夙にその禮樂制度を觀て周公を欽慕し、更に溯りて三代の盛を追

想し、その腦裡に於て完全圓滿なる理想的國家を描き、更に顧みて教化衰頽し秩序紊亂したる現時の社會を目撃して感慨に堪へざりしものあらん、孔子一代の事業は全く茲の感慨に胚胎したりと謂つべし、耶蘇の感慨に至りては孔子よりも一層大なりとす、耶蘇の降誕せし頃に於て、その郷里ナザレの村落は惡風汚俗の淵藪として四方より賤蔑せられ、更に此ナザレの小村を圍繞する猶太全國に至りては、國民一般に偽善と虚儀とに流れ、表面は猶ほ宗教國民の美服を裝ふが如しと雖ども、人心内部の腐敗に至りては夫のエレミヤ、イサイヤの豫言者等が往昔號泣せし其時よりも更に一層甚しとす、更に又た此猶太の小邦を圍繞する當時の天下、即ち羅馬帝國の光景を觀れば、奢侈は既に光榮の中に孕れ、不徳は既に勢威の裡に眠る、人生の目的は快樂にあり、權力の在る所以て正義を蹂躪すべきと云ふが如き思想は、既に此時よりして毒劑の肺腑に入るが如く、漸く羅馬帝國に充滿したり、此時に於て一人あり、太陽の如くに光る眼、雪の如くに淨き心を以て世界を觀察す、豈に亦た人類の墮落に感慨を起さざらんや、而して此の



感慨は豈に耶蘇をして大聲疾呼福音を宣べしめたる所以にあらずとせんや、然り而して釋迦の感慨に至りては耶蘇よりも更に一層深しとせざる可らず、何となれば古往今來、人間として此世に生れ來りし者、釋迦の如く快樂と榮耀とによりて圍繞せられたるものはあらざるべし、蓋し釋迦が悉達太子として迦毘羅城、淨飯大王の宮殿に降臨せし時に於ては、印度は數多の王國に分れて統一せずと雖も、淨飯大王の王國は一大王國にして、兵馬に強く、金銀に富み、内外無事に安んじて國民方さに太平の世を謳歌し、その國家既に盛運に達したりと謂つべし、此時に方りて悉多太子、淨飯大王の皇嗣として宮殿の裡に生れ、父王の寵、皇妃の愛、國民の尊敬、富貴の快樂、權力の光榮は殆ど一身に集りて復た人世に充滿する苦痛、患難、憂愁の何物たるを知らず、その深宮は光榮と快樂とによりて鎖され、所謂銀殿の舞袖、秋雨を携へて冷かに、珠樓の歌喉、春光に響きて暖かなる、豈に以て快樂の光景を寫すに足らんや、而して生老病死の四大現象、一たび太子の眼に映するや、忽ち人生の無常に感慨を起し、王位、財寶、妻子、宮殿を抛棄し、眞理の爲めに一身を以て犠

牲に供したり、

故に夫れ人生の無常を觀て感慨を起すものは、人類の墮落を觀て感慨を起すものよりも其感慨更に大なりとす、人類の墮落を觀て感慨を起すものは、社會の衰頽を觀て感慨を起すものよりも其感慨更に大なりとす、而して皆各々感慨する所あるに至りては則ち一也、

然らば釋迦孔子耶蘇三人の品性は孰れか最も偉大なりとするや、是れ容易の問題に非るなり、

三大教祖  
の訓誨

抑も三大偉人の品性を論せんと欲せば、先づ彼等は何如程當時の教育を受けたるや、何如程その智力を開發したるやを知るも、亦た緊要なりとす、而して之を知るには彼等の言論を精査し、比較するの外あらざるなり、吾人が先づ耶蘇の説教に就ひて激賞する所は、その斬新精透にして真心に訴へ、人情を穿つこと、恰も寶刀を揮つて敵を斫るが如く、光采赫奕として其鋒當る可らず、而し斯る裡にも自ら春風和氣を含み、藹然たる仁愛の意自ら流露するの點にあり、次に吾人が孔子の訓誨に就ひて心折する所は、懇々切々として



慈父の傍に座するが如く、又た嚴師の前に立つが如く、温諭親切にして悦ぶべく、判断精確にして畏るべく、一言一辭悉く謙遜剴切賢明を以て充滿され、覺へず其説に心酔せらるゝこと、恰も酔酒を飲みて微醺するが如き心地せらるゝの點にあり、又た吾人が釋迦の説法に就ひて感服する所のものは、恰も宇宙の秘庫を開て無量の寶を示すが如く、又た人を導ひて帝王の宮殿に登らしむるが如く、その廣大、その尊敬得て喩ふべからず、而して智慧と慈悲と自らその裡に溢るゝの點にある也。

然り而して説教の裡に許多の譬喩を引き、身近なる比喩を擧げて深奥なる意義を説明するに至りては、吾人釋迦と耶蘇との間に於て親密なる類似の點あるを見る特に尤も福音と法華經、遺教經、及び四十二章經との間に於ては親密なる類似の點あるを見る、例へば福音に於ける放蕩兒の譬喩と法華經に於ける窮子の譬喩と、婚宴の譬喩と牛車の譬喩と、世末の恐怖なる光景と、火宅の荒涼なる光景との如きは轉た吾人をして何の故に斯く迄類似するやと怪ましむるものあり、之を要するに、釋迦と耶蘇とは好んで比喩を用

ひてその教義を説明したり、唯其異なる所は佛經は譬喩を用ふる頗る形式に過ぎ、一件の義理を説明するにも、數個の譬喩を連用し、その性質に至りても社會的、人情的の譬喩よりは、寧ろ自然的、事物的の譬喩を用ふることも多しとす、之に反して、福音は自然的、事物的の譬喩よりも寧ろ社會的、人情的の譬喩を用ひ、且つ多くは觀念を説明するの譬喩にあらすして、事件を證明するの譬喩なり、是れ蓋し印度猶太本來思想の然らしむる所ならんか、抑も又佛の説法は彙類的、抽象的、構成的趣味を以て充滿し、その教理を説明するにも、先づ論理の線路を布き、之を踏みて着々その歩を進むるも、耶蘇の説教に至りては、蕙地美花を撒き散らすが如く、何の秩序もなく、何の趣構もなく、自然心裡に湧き出でたる活水を以て之を聴衆の心に注射せり、是等の事實を以て之を考ふるときは、釋迦と耶蘇とは全くその思想を異にし、釋迦の精神は十全に開發したる思想なるも、耶蘇は唯だ一點真心の光明に導れて發言したるものゝ如くに斷定せらるゝ也、若し夫れ孔子の訓誨に至りては一言一語悉く深思實驗の餘に發したるものにして、その時勢を論じ、人物を評する



や、亦た皆な精確適實ならざるはなし、然れども孔子が己所不欲、勿施之于人、と云ひ、耶蘇が己所欲、施之于人、と云ふが如きは、互ひに期せずして相符合す、故に一言にして實際道德の至理を含むものを求むれば、吾人は之を佛經に得るよりも、之を孔子と耶蘇とに得るもの却て多しとす、

彼等が勇  
氣平和温  
柔謙遜謹  
慎及び仁  
愛の諸徳

故に三大偉人が智の能力、即ち觀察と判斷との能力に至りては、或は直覺に發し、或は經驗に源き、共に皆な強大にして明瞭なりしには相違なかる可しと雖ども、獨り思辨推理の能力に於ては、釋迦に於て尤もその著明なるを見る、而して孔子と耶蘇とは頗る之に譲らざるを得ず、然らば轉じて他の性情を比較せん、凡そ一言に言へば、三大偉人は萬徳圓備なる人物なるべし、然れども深く分拆して之を論ずるときは、三大偉人に於て最も著明なるものは勇徳なりとす、抑も人間勇氣の徳を發揮するの源因は、種々異様なるものはあらず、血氣に發するの勇氣あり、傲慢に發するの勇氣あり、絶望に發するの勇氣あり、智識に發するの勇氣あり、又自信に發するの勇氣あり、血氣と傲慢とに發するの勇氣の如きは、自己の腕力智力若くは權力を恃むによりて

生ずるの勇氣なるが故に、一旦此等の力を失するときはその平生の勇氣は忽ち落膽沮喪して憐むべきの境に陥り、要するに所謂匹夫の勇たるを免れず、絶望に生ずるの勇氣に至りては、勇往猛進、前後顧慮する所なきを以てその狂激なる或は當るべからずと雖ども、既に判斷と目的とを失するを以て其實貴ぶに足らず、智識に發するの勇氣に至りては、懼るべきに懼れ、懼るべからざるに懼れず、利害得失瞭然として、心裡に明なるを以て、甚だ貴ぶべきものあり、然れども人間にして、苟も全智にあらず、苟も利害の念を脱する能はず、又た苟も情欲の爲めに掩はるゝを免るゝ能はずんば、智者と雖ども亦た惑ひなきこと能はず、智者にして一たび惑ふときは、其心緒紛亂して自ら制する能はざる、更に常人よりも甚しとす、斯に於てかろの勇氣忽ち一變して怯懦となる、故に智識に發するの勇氣も亦た未だ至大至剛の勇氣にあらざるなり、

獨り自信に發するの勇氣に至りては、真正の勇氣にして、刀鋸鼎鑊以て之を奪ふ能はず、名譽快樂以て之を動かす能はず、天下萬物を以てするも之に加



ある能はず、三大偉人の勇氣は豈に此種の勇氣にあらずや、彼れ孔子嘗て匡人の爲めに圍まれしも、泰然として毫も畏れず、曰く天の未だ斯文を喪ざるや、匡人其れ手を奈何せんと、宋の司馬桓魋又た嘗て孔子を害せんとせし時に方りても、孔子は天徳を予に生せり、桓魋其れ手を奈何せんと言ふて毫も懼るゝ所なかりしなり、是れ豈に孔子は確乎として自信する所あるにあらずや、而して此確乎たる自信は豈に孔子勇氣の由りて發する所にあらずや、耶蘇はろの一たび福音を宣べてより以來、猶太の祭司等が罪惡と偽善とを排撃して餘力を遺さず、政治上の主權者が猜疑を被るも、毫も以て心に臆せず、天下の風潮に逆ひ、一世の攻撃を受るも、敢て避易せずして、以て傳道の天職を全ふせんと欲す、此時に方りて測る可らざる禍難の一旦、ろの頭上に墮ち來らんことは豫め自期する所なりしなり、而して終に十字架上に釘せられて悲惨なる最期を遂げたり、此勇氣は果して那邊より生じたるや、試に彼が言ふ所を聞け曰く、肉体を殺して靈魂を殺すこと能はざるものを怖るゝ勿れど、蓋し其自信に篤きこと斯の如し

眼あるもの誰か亦た釋迦の勇氣を見ずと言ふか、彼が眞理を得んが爲めに王位、財寶、妻子を棄てたるの勇氣は果して何如ぞや、彼が世界のあらゆる試誘に遭ふてろの精神を變せざるの勇氣は果して何如ぞや、彼が婆羅門教の一大鐵制に反對して一大改革を斷行したるの勇氣は果して何如ぞや、然らば釋迦は孔子耶蘇の如く兵火劍戟を以て其身に逼られたるを聞かずと雖、そも、ろの勇氣に至りては彼等よりも一層剛大なりと謂はざるを得ず、之を要するに、三大偉人は即ち天下古今の眞勇なり、大勇なりと評せざるを得ず、平和、溫柔、謙遜の諸徳は又勇徳に次で緊要なるものにして、耶蘇と孔子とに於ては最も著く表見せりとす、孔子の溫良、恭謙、讓は到る處に當時諸侯の禮遇を得たるが如く、耶蘇が心貧きものは福なり、溫柔なるものは福なり、自ら高くするものは將さに却て卑くされんとす、先づ爾の兄弟と和解せよ、鳩の如くに柔和なれ、蛇の如くに狡智なれと教へたるが如き、又た孔子が陽貨の問を避けるが如き、耶蘇が該撒の物は該撒に還すべしと言ふて人をして両端に陥らしむるの奸策を破りたるが如き、是れ皆な平和、溫柔、謙遜、謹慎の最



も著く表見したるものにあらざるはなきなり、然らば吾人は亦何如にして釋迦に於て是等の諸徳を見ることが得べきや、有名なる亞細亞の光の著者アーノルド氏は曰く、吾人が釋尊の人物に就ひて知るべき歴史上の材料は頗る不完全なるにも係らず吾人は、明に彼が人類史上唯だ一人を除きては、最も高尚なる最も溫柔なる最も神聖なる最も仁慈なる人物なることを觀たりと、實に然り、誠に當時の事情を推想して之を考ふるときは、釋迦が何如程是等の諸徳を備へたるかを知らず、夫れ釋迦は一大改革者として當時に現はれし也、而して當時釋迦を圍繞したるの天下は盡く釋迦の敵にあらざるべし、何となれば釋迦は精嚴なる論法を以て婆羅門教九十五種の外道をば徹塵に打ち碎きて自家の教を弘めたり、又た婆羅門教の一大鐵制に反對して之を破りたり、然らば當時釋迦の敵は全國に滿ち種々なる抵抗を試み、又た種々なる策略と機會とを以て釋迦を陥れ若くば之を害せんと試みたるは蓋し事實として疑ふべからざるものあらん、而るに釋迦は從容として其教を宣へつゝ、印度全國を歴遊し到る處に平和の種子を播き、千

百人の弟子隊をなして其後に從ふたるも彼等は皆な敝衣粗服市街を歩して行く、食を乞ひ、取て寸兵尺鉄を携ふるにあらず、取て自己の生れたる國王の權威と光榮とを假るにあらず、而して勁銳なる主義を懷き、大膽なる議論を吐き、思想上に於ては恰も巨象の群蟻を蹂躪するが如きの勢を以て全國に滿ちたる反對教派を排撃したるも、彼等を激して騷動を起さしめたることなく、又た彼等の凌辱をも招きたることなく、愆然として平和の間に異教の徒を化し、其教を布き遂に八十歳の高齡を保ちて最も靜穩に入寂することを得たり、是れ蓋し最も圓滿に溫柔謙遜謹慎の諸徳を全ふしたるものに非ずんば能はず、試に看よ彼が提婆達多に對したるの行爲は何等の溫柔を示したる乎、彼れが王位を辭して乞食となりしは何等の謙遜と耐忍とを示したる乎、彼が長爪梵志に對したるの問答の如きは何等の謹慎を示したる乎、是れ三大偉人が其徳を同ふし、而して釋迦の徳は又た卓然として孔子耶蘇の表に秀でたる所以なり、然れども是等諸徳の上に踰へて三大偉人の品性に彰著なるものは仁愛な



り、夫れ仁愛は徒に彼等品性の中心たるのみならず、亦た彼等教理の中心とする所なり、孔子は仁を以て其教の中心とし、耶蘇は愛を以て其教の中心とし、釋迦は慈悲を以て其教の中心とす、中心とは何ぞや、之を以て其他一切の諸徳を總括して之が大本とするものなり、而して仁と云ひ愛と云ひ慈悲と云ひ、其教理の同らざるが爲めに多少意義を異にするを免れずと雖も、最大精神に至りては取て異なることなし、彼等は既に之を以て教理の中心とする位なれば、此仁愛にして彼等品性の最大なる表彰なるも亦た取て怪むに足らず、耶蘇が福音の教を傳へて十字架上に釘せらるゝに至りたるも孔子が栖々逸々席捲るを得ず、黒突踏きを得ずして七十餘國を周流したるも、釋迦が衆生濟度の爲めに法を説きたるも、是れ自個の名をなし、聖をなさんが爲めにあらずして、其實同胞人類を愛するの一點に外ならず、然らば彼等が全身は素より仁愛を以て満たされたるものなり、若し此仁愛の徳を缺くときは、其他の諸徳には何如に富みたりとも、是れ皆な利欲を達せんが爲めに能力機關たるに過ぎざる也、而して此仁愛の徳に至りては三大偉人萬

### 品性の勢 力

言萬行の泉源たるが故に、其言行の一端を捉へて是れ即ち仁愛の發現なりと謂ふことを得ず、故に吾人は仁愛の徳に就いては三大偉人を比較すること能はず、又た之を比較することを欲せざるなり、三大偉人の品性にして吾人の眼に觸るゝの重要なものは斯の如し、吾人が三大偉人の品性を比較したるの結果たる斯の如し、蓋し三大偉人の特質と職務に就いて判論するとき、釋迦は哲學家なり、耶蘇は敬神家なり、孔子は政事家なり、而して彼等が後世億兆の人心を支配して千古不滅の感化を遺したること斯の如し、是れ果して那邊より得たるの勢力なるや、是れ素より、彼等の説きたる教法の裡に、宇宙人性の一大眞理を含蓄したるに相違なきなり、然れども彼等をして是等の品性を有せざらしめたらんには、獨り其教のみにて斯る勢力を有せりとも思はれず、然らば天下に品性の勢力より強大なる勢力はなかるべし、而して三大偉人が有したる品性は各々特色あるにも係らず、その大躰に於て類似せること斯の如し、是れ、豈に端的自ら眞正の人間たること能はざれば、人間を感化する勢力なき明證に非らずや、世



の佛敎徒及び基督敎徒の偏信に陥りて僻見を抱くもの、動もすれば釋迦及び耶蘇の勢力を以て奇跡神通の勢力に歸せんとするの傾向なきにあらずと雖も、試に是等の品性を釋迦、耶蘇より奪ひ去り、彼等をして獨り其奇跡其神道を行はしめたりと假定せよ、是れ豈に妖魔の流にあらずして何んぞや、况んや彼れ孔子の如きは嘗て怪力亂神さへ語りしことなしと言へば、其奇跡神通を行はざりしは勿論の事なり、然れども釋迦、耶蘇と共に後世億兆の人心を支配して千古不滅の感化を遺したるもの何んぞや、然らば三大偉人が品性の勢力は歴史上に事實上に於て争ふべからざる唯一の勢力なること知るべき也。

吾人既に三大偉人の品性を比較す、謂ふ進みて其他の事に論及せん、教理上の議論は姑く之を擱き、單に歴史上より觀察するときは、孔子、耶蘇とは共に野合私通の子なり、而して共に卑賤の家に生れたり、故に彼等は毫も名望と云ひ門閥と云ふが如き社會的の勢力に資したるものにあらず、是れ夫の木匠の子にあらずやと人を驚かしめたるものは、豈に耶蘇にあらずや、孰れか

### 活 彼等の生

郷人の子を禮を知れりと言ふやと云ふて人に賤しめられたるものは、豈に孔子にあらずや、然らば孔子と云ひ、耶蘇と云ひ、自ら作爲したる勢力の外には毫も他の勢力を假らざりしものなり、而して二人共に一生富貴の境にあらずしものにあらずなり、然れども孔子は嘗て魯國に仕へて大夫たりしを以て游資には窮せず、又或時は國老の家に寄食し、或時は諸侯の優遇を受けしこと無きにあらず、又た耶蘇の如きは素より一錢の貯蓄あるにあらずれば、人家に招かれて教を説き、又た患者を療し、之が爲めに多少の謝金を得て僅に糊口の資に充つるを得たることは争ふ可らざるの事實なりとす、獨り釋迦に至りては帝國の家に降誕したるを以て富貴自然にして衣食に窮せず、然れども彼れ一たび家を捨て、山に入り道を學びし後は、一箇の鐵鉢を携へて食を他人に仰ぎたり、是等の點よりして觀るときは、世界の歴史に於て人類進歩の一新時代を開き、一新元素を添へたる三大偉人が肉体的の生活は何んぞ夫れ寒酸なりしや、若し孔子をして當時に於て少く其志を枉げしめたらんには、彼れ管仲が如く一代を壓倒し、列國を睥睨するの權勢を



博せしこと疑ふ可らず、若し耶蘇をして猶太國民の希望に授け、彼等に擁せられて事を擧げしめんには、羅馬帝國を打滅して一大帝國の金冠を戴くことを得たること疑ふ可らず、若し釋迦をして出山の後再び王位に即きて政權を握らしめたらんには、彼其政治的の權力を以て宗教的の布教を援けたること疑ふ可らず、而して三大偉人は皆な當時人心の熱望に反對して之を爲さざりしは何んぞや、是れ豈に方便の爲めに目的を枉ぐることを欲せざりしものに非らずや、蓋し是れにあらざれば後世億兆の人心を支配して千古不滅の感化を垂るゝこと能はざる也。

吾人が別に怪む所のものは三大偉人共に自ら筆を執りて書を著はさざりしこと、是れなり、最も此中にありて孔子は春秋を修め、詩書を刪りしことありと傳ふるも、是れ唯だ既存せし典籍に就て取捨せしに過ぎざれば著作とは稱し難し、易傳こそは孔子の述べし所なりと傳ふるも、是も亦た種々の異説ありて偽作なりと云ふもの亦た少らず、孰れを眞なり孰れを偽なりと容易に判断すべからず、唯だ論語二十篇は孔子の言行を記して其眞を傳ふ

彼等か自ら書を著さざりし理由

るもの此書に若くはなしと雖ども、是れ亦た門人游夏の徒勞に其見し所其聞きし所を筆録して之を後世に傳へたるものに過ぎず、而して大學、中庸の如きも亦た曾子、子思の徒孔子に聞きし所のものを以て之を録したるに過ぎずされば孔子一篇の著作なしと稱するも可なり。

釋迦と耶蘇とに至りては皆て一篇の著作なきことは明白の事にして、今日に傳ふる一切の佛説は、釋迦の死後に於て迦葉、阿難等を首として數十百人の高足弟子其師に聞きし説を結集したるものに過ぎざるなり、然れども此の結集は一回にして止まず、其後又た更に第二回の結集ありしと云へり、而して釋迦終に自ら筆を執りて書き著せしことはあらざるなり、近日獨逸の學者オルデンヘルヒの如きものは或は謂ふ釋迦の時代に至る迄書を筆すること未だ世に行はれざりしならんとは是れ歴史に通せざるの僻見のみ、若し釋迦の時代に至る迄著書の業未だ全く發明せられずとせば夫の婆羅門教の經典韋陀は何によりて釋迦の時代に傳はりしや、釋迦の猶は王宮にあるや彼れは各種の師に就ひて數十部の典籍を研究したり、是等の書は何如



して傳はりしや、然らば釋迦が自ら書を著さざりしとは事實なれども、印度に於て釋迦の時代に至る迄著書の業未だ發明せられずと言ふが如きは、尤も臆説の甚きものにして毫も信を措くに足らず、然らば耶蘇は何如にと言ふに耶蘇一代の言行を記して最も確實なる四福音書の如きは、その徒弟馬太、馬加路、約翰の四人が各々其見し所其聞きし所のものを筆録したるものにして、耶蘇の自ら筆したる文章とては殆ど一句をも見出だすこと能はざるなり、

是によりて之を觀れば、三大偉人は唯だ言教ありて筆教なし、是れ蓋し偶然の事なるか、將た三人共に期せずして深意の存するありて然かせしものなるか、亦是一個の問題なり、

蓋し三大偉人は其道を言によりて傳へんよりは、人によりて傳へんことを希望したる者なり、故に選ぶ所の人毎に苟も機會あれば之を誨へ、其靈を啓き其徳を化するを以て目的とし、力の及ばん限り手の届かん限り一世の人を感化して以て人類の進路を一轉せんと欲す、而して其言論に發する所の

### 著書の弊

ものは必ず是を其行爲に示めして以て人を感化せんと欲す、故に之を約言すれば三大偉人の教は事業にして言辞にあらざるなり、縱令我が行爲は世に顯はれざるも、獨り我が言論世に行はるれば自ら以て足れりとし、若くば我が言論にして今日に容れられざれば寧ろ知己を千載の下に俟たんと云ふが如きは、豈に三大偉人の心事ならんや、然らば三大偉人が書を著はざりしは果して深意の存せることにして、後人妄りに文章を以て不朽の盛事なりとし、三大偉人の自筆に係る片言隻辞の世に存せざるを難惜するものありと雖ども、是れ蓋し三大偉人の心事を知るもの、言に非るなり、抑も文學の盛著書の業は人類文化の進歩を援けて偉大なる勳績あるものなりと雖ども、或點よりして觀るときは、著書の如く著者をして自得安逸の境に陥らしむるものはあらず、又た著書の如く著者に過當の信を措かしむるものはあらず、何となれば、著書は唯だ人物の思想を表彰するものにして、その行爲を表彰するものあらず、故に天下著書の如く名聲を博し易きものはあらず、故に少く斬新炫異なる思想を抱き又た之を表明するに足るべき



華麗なる文辭を有するものは、争ふて著書の業に托して以て不朽の名譽を求めざるはなし、而して後人亦た著者人物の何如を詳にせず、妄りに其書を讀んで其人を尊崇す、是に於て手實行愈々疏にして文辭愈美なり、是れ著書の一弊なり、又著者既に其文辭によりて其思想を天下後世に傳ふべしと自ら信ずるときは、更に進みて之を行事に施すことを欲せず、務めて事局を避け閑散の地を占めて自ら誇大にし、自得安逸之に従ふ、是れ豈に徳の廢れるものにあらすや、是れ亦著書の一弊なり、然らば三大偉人が書を著はさゞりしは偶然なりとせん歟、將た別に深意ありて然かりしものなりとせん歟、心を潛めて之を默考すれば、亦た以て此問題を解釋するに足らん、

### 三大偉祖 の繼續者

故に三大偉人は自ら筆を執りて書を著はさゞりしと雖も、その弟子各々其師に就ひてその見る所の聞く所を筆録して萬世不朽の經典をなす、釋迦の一切經孔子の論語、耶蘇の四福音是れなり、而して怪むべし三大偉人が教理を發揮して之を光大にしたるものは皆な三大偉人が生前の弟子にあらずして死後の徒弟なりしを、誠に看よ保羅の耶蘇に於ける、孟軻の孔子に

於ける、龍樹の釋迦に於ける、各皆其師に亞ひて一教の泰斗と仰がれたるものなり、而して保羅は耶蘇と其時を同ふしたるも、耶蘇の世にありし時には其最も猛烈なる敵黨の一人にして耶蘇を殺さんと企てたるもの也、然れども耶蘇の死後に至り、忽ち翻然感悟する所ありて耶蘇の教に歸し、彼が學識は福音の奧義を解釋して基督教の眞理を闡明し、彼が熱心は福音を異邦に傳へて遂に其教に殉死したり、孟子は業を孔子の孫子思の門人に受けたりと言へば、孔子の時を去ること既に百年の久きを經過したり、然れども孔子に私淑して之を欽慕するの篤き、孔子の微言奧旨に通じてその盛大なる道徳に感化せられ、自ら奮つて其教を明にし其道を行ふに至りては或は却て七十子の上に出でしものあり、而して龍樹に至りては釋迦滅度七百年の後、に生れ、内は聖教を明にし、外は異教を挫き印度佛教の中興者となりて八宗の祖師と仰るゝに至れり、而して此三氏は皆な其師に親炙したるものに非ず、三大偉人感化の勢力亦だ以て觀るべき也、

然らば吾人が釋迦、孔子、耶蘇三大偉人の品性と教理とを知ることを得るも



及び佛教  
の簡短な  
る批評

のは論語、四福音及び佛教に外ならざるなり、故に吾人は此三書に就ひて聊か一言せざるを得ず、抑も論語の編述は何人の手に成りしやの問題に就ひては古來學者の説一定せず、或は子游、子夏の手に成れりと云ひ、或は曾皙、琴張の手に成れりと云ひ、或は曾子の門人の編する所なりと云ふ、而して子の游夏の手に成れりと云ふの説は尤も多數を占めたるが如し、之を要するに論語は全篇を通じて語氣、文法、その同一に出でたるを觀るときは、一人の手に出でたること疑ふべからず、而して篇を二十章に分つと雖も、年月に従つて之を次第するものにあらず、又た論理的の彙類に従ふたるものにあらず、學而と題すと雖も、獨り學問の事のみにも限らず、爲政と題すと雖も、必ずしも獨り政道の事のみに限らず、唯だ郷黨の一篇に至りては獨り專ら孔子の容貌、言語、飲食、衣服、坐作、進退の雜事を記し、その詳細にして委曲なること影書を觀るが如く、之に依りて千城の下吾人は孔子の風采を望み、孔子の言語を聆き、宛然として之と一堂の上に相對するが如きの感想あり、孔子の門人その師を欽慕して一舉一動之に注意すること斯の如し、その師を尊

崇するの熱篤なる、亦た以て察すべきなり、然れども此一篇を除きて其他は一定の秩序に従ふたるものにあらず、編者の目的、又た安くにあるや、茫乎として知る可らず、獨り之を始むるに學習の一語を以てし、之を結ぶに知命の一語を以てするに至りては、大に是れ深意の存するなしと謂ふ可らず、而して文章の躰を評すれば、簡潔にして整肅、明快にして壯麗、意味深長にして盡くすべからず、誠に千古の至文と稱すべき哉、

耶蘇の四福音に至りては、是れ同時の人が同一の事を記録するものなりと雖も、其間自ら異同なきこと能はず、然れども其異同は叙事の躰裁に關するの異同にして、事實の上に存するの異同あらず、故に四福音は其義互に相待つて發明すと雖も、毫も撞着の點あるを見ず、盡し馬太、馬加、路加、約翰の四人は共に皆福音を信じて耶蘇に仕へ、同一の信仰を懷きたるものなりと雖も、その思想と天才とに至りては各々同じからず、故に耶蘇の言行を記するに至りても亦た同じからず、若し四福音の異點を論ずれば、馬太は蒐集し、馬加は、摸寫し、路加は、觀察し、約翰は、撰擇す、又た馬太は物語的にして馬加



は記録的なり、路加は歴史的にして約翰は戯曲的なり、然れども四傳を總括して之を論ずるときは、四人共に極めて單純極めて平易なる文字を以て其見るが儘聞くが儘を叙述して最も信憑すべきものなりとす、唯第四福音約翰傳の首章に至りては、高妙深遠にして解し難きの冒頭を掲げ來りて、以て三位一體の說教を開き起す、是れ即ち純然たる哲學思想にして耶蘇神學の淵源とする所なり、抑も約翰なるものは其耶蘇に就ひて福音を信せし以前に於ては、果して何如なる教育を受けしや、又果して何如なる哲學を窮めしや、未だ知るべからずと雖も、斯一句は明々白々として夫の亞歷山府の大哲學者フヒーローの說に類するものあるを奈何せん、故に四福音中よりして斯の一句を除き去るときは、其他は皆な極めて單純極めて平易、古來傳紀の最も信すべきものとなれり、

孔子と釋迦との言行は斯の如く質實簡潔なる門人弟子の筆録によりて後世に傳はれりと雖も、獨り佛經に至りては大に之と其趣を異にするものあり、蓋し一切の佛經は悉く迦葉、阿難等が釋迦の說きし所のものを結集し

たる者なりと雖も、其舛誤に至りては千篇萬篇盡く一定の形式に従ひ、先づ上段には此經を説きし時の光景、及び重なる聽衆の名字を掲げ、若くは此經を説くの緣起を叙す、次に中段に至れば進みて本論に入りて一篇の正意を叙す、而して終に達して下段に至れば、此經を領受せし人名若くは此經を附囑せられたるもの、人名を掲ぐるを以て其例とす、而して開卷の初めには必ず如是我聞の四語を掲ぐ、是れ蓋し迦葉、阿難等々の師に聞きたる有りの儘を筆録して毫も私意妄作を其間に雜へずとの意義なるべし、故に後世學者佛敎を解釋するには、必ず一篇の全文を分拆して序文、正文、流通文の三大段落となしてその經の性質を品鑑せざるはなし、而して此分拆法は孰れの經篇にも應用することを得べし、何となれば千篇萬篇その形式を同ふすればなり、

故に吾人苟も心を潜めて之を考ふるときは、論語、四福音及び佛經は皆弟子のに筆録に係ると雖も、前の二者は其弟子が各々自家の識見を以て其師の言行を録したるものにして、毫も一定の形式に従ふたるものにあらず、獨り



佛經に至りては一定の形式に従ふて之を記録し、釋迦の一言一行を記録したるものにあらずして寧ろ其一場の演説を記録したるものなり、故に序論あり、結論あり、首尾整然として論理完結す、然れども其中に於て見るべきの釋迦は莊嚴なる威儀と光榮とを以て壇上に現れたるの釋迦にして、一個人と共に談話し、共に散步し、共に旅行し、共に晩餐するの釋迦にあらず、故に吾人は孔子と耶蘇とに於ては其舞臺に立ちたるの態度を見ることを得る如く、亦た其樂屋にあるの風采をも見ることを得るも、釋迦に於ては唯其舞臺に立ちたるの釋迦を見ることを得るのみにして、樂屋にあるの釋迦を見ることを得ざるなり、蓋し印度文學の趣味として物を叙し、事を記するに好みて、想像を辨へて實質を尙はず、而して佛經と雖ども亦終に此趣味を脱すること能はず、是れ吾人が佛教の爲めに頗る惜む所なり、然れども佛經は一方に於て此缺點あるを免れずと雖ども、他の一方に於て教理を叙するに至りては、その組織整然として觀るべく、決して夫の論語及び四福音が零々雑々たる教祖の言行を集めて思想の連続なく秩序なきものと同じの論に非ず、

三大教祖  
が時當の  
注意を惹  
きたる事  
情

是れ三世の異なる所以なり、將さに本章を終へんとするに臨みて、吾人は更に一事を添へて之を補ふ所あらんとす、抑も三大偉人は山林の間に隠れて心を養ひ道を修めたるの隠君子にあらず、彼等は皆世界の舞臺に登りてその絶技を演じたる者なり、故に彼等は世界に立ちて人民の耳目を集め、一世の注意を惹くの燒點となること肝要なり、否、彼等は人民の耳目を集め、一世の注意を惹かざる可らざるの地位に立てり、然り而して其人民の耳目を集め、一世の注意を惹くの手段と機會とは同らざるなり、蓋し猶太國民は最初より耶蘇が行ふたる奇跡を見ろの權威ある説教を聞て或は是れ彼等の祖先及び彼等が迎望したる基督にあらざる乎と疑念を生せしめて、その彼等が耶蘇に對するの願望は甚だ殷んなりしなり、是を以て耶蘇の名稱は響くが如く全國の内に轟き渡りたり、是れぞ耶蘇が僅々たる數年の間に一世の注意を惹きたる所以にして、抑も彼が最後の禍難を招き其死を免れざりし所以んも亦た茲にあり、孔子に至りては初めより一世の耳目を集る程の驚くべき奇異の事はなざり



しと雖も、其大夫に任せられたるの後僅に三日にして少正卯を朝に誅し、又た魯公に従つて齊公と夾谷に會し、凜然たる正義を執りて齊公を寒心せしめたるが如きことは、既に隠然として列國に其名を轟したること疑ふ可らず、而して其學徒を集めて之を教育するや前後其門に出入するもの三千人の多きに達せりと言へば、其名列國に聞へたることは愈々疑ふべからず、而して獨り釋迦に至りては彼が印度大國の太子にして王位を棄て、山林に入りたるの一事、遍く既に一世を震動したり、

以上吾人が釋迦孔子耶蘇の三大偉人に就ひて較論したる所は皆歴史上の事實に基きたるものにして、教理と想像とに基きたるものにあらず、故に佛敎に私する所なく、儒敎に熱する所なく、又基督教に偏する所なしと雖も、或は均く三敎信徒の感情を損せんも未だ知るべからず、何となれば其贊すべきは之を贊し、否とすべきは之を否として一敎一宗の爲めに辯護者とならざればなり、然れども吾人が較論したる所にして苟も一點の眞理ありとせば、吾人は此一點の眞理の爲めに三敎信徒の歡心を失ふも敢て懼るゝ所

にあらず、之を要するに、佛耶教理の説く所に従へば、釋迦は佛性を具すると同時に亦た人性を具し、耶蘇は神性を具すると同時に亦た人性を具す、吾人が三敎の敎祖として、人類無冠の帝王として、世界の三大偉人として之を較論したるものは人性的の釋迦にして、佛敎的の釋迦にあらず、人性的の耶蘇にして、神性的の耶蘇にあらず、故に苟も彼等三敎の信徒にして斯意を了せば、彼等と雖も必ず深く吾人を尤めざるを知るなり

### 第三章 教理

世の宗教を論ずるもの動もすれば、佛敎を以て、婆羅門敎より發達したるものとし、基督教を以て、猶太敎より發達したるものとするも、此の發達と言ふ語には、深く注意せざる可らず、歴史上より之を研窮するときは、釋迦と雖も決して、印度國民の思想を脱する能はず、耶蘇と雖も亦決して、猶太國民の感化を免るゝ能はず、否或る點よりして觀るときは、彼等は各其國民の至大至高なる代表者と云ふも可なり、然れども、婆羅門敎と佛敎との間には、大



なる差別あるが如く、猶太教と基督教との間にも、亦大なる差別あり。此差別は唯だ精細に二教の性質を研究するものにおいて、自ら明瞭なりとす。獨り儒教に至りては、儒教以前に支那一定の宗教なきを以て之を觀れば、堯舜禹湯文武周公を経て孔子に至り、漸次時代を逐ふて發達したるものなりと云ふも、亦不可なきなり。

吾人は既に佛教と基督教とは眞諦主義なり、唯だ儒教のみ俗諦主義なりと言へり、されば乞ふ先づ佛耶兩教より較論を試みん。

### 人類の二大思想

抑も人類には二大思想あり、一は外界を以て主位に置き、人間を以て廣大なる世界の一部分とし、一は心界を以て主位に置き、世界の心識の現象とする是れなり。若し甲の思想にして、此廣大なる世界を以て、唯物質勢力の集合とし、世界の内に起るあらゆる動靜起滅離合變化の現象は、盡く物質的の法則に従ふて、別に心意的の目的あるものにあらずと見立つるときは、之を稱して唯物説と云ふ。若し又た世界の内に起るあらゆる現象は、皆な心意的の目的に従ふて、働くものなりと見立つるときは、之を稱して有神説と云ふ。故に唯

物説も有神説も、外界を以て主位に置き、人間を以て副位に置くの一點に至りては、則ち同一の見なりと謂はざるを得ざるなり。

是れに反して、宇宙は彼れが如くろれ大なりと雖も、吾人感覺の外にある能はず、萬有は彼が如くろれ衆なりと雖も、亦た吾人感覺の外にある能はず、視聽なければ何を以てか世界の色を見ん、聽覺なければ何を以てか世界の味を味はん、嗅覺なければ何を以てか世界の香を嗅がん、觸覺なければ何を以てか世界の物に觸れん、而して此等の外界に對するの感覺は、又た心識の外に存在する能はず、何となれば吾人の心識にして是等の感覺の實在を認るときは、外界吾人の前に現はるゝも、吾人の心識にして、是等感覺の實在を認めざるときは、外界吾人の前に現れざるなり。故に宇宙は大なりと雖も、吾人心識の外にある能はず、萬有は衆なりと雖も、亦た吾人心識の外にある能はず、斯の如く説を立つる者、之を稱して唯心説と云ふ。

人類思想の歴史に於て、有神説の最も精を極めたるものを基督教とし、唯心説の最も理を盡したるものを佛教なりとす。故に基督教は外界を以て主任

### 唯物説有 心説及び 唯心説



に置き、佛教は内界を以て主任に置く、此れ二大教理の抑も大本よりして異なる所以なり

故に基督教立説の起點は、*cosmological*、即ち宇宙的にして、佛教立説の起點は *microcosmic*、即ち心理的なり、試に之を兩教の經典に徴せよ、基督教の經典即ち舊約創世記に據れば、太初の時上帝先づ天地、日月、星辰、水陸、植物、動物を創造して、然る後ちに人類を造りて之に靈氣を賦すと云へり、是れ即ち外界を以て主位に置くものなり、之に反して佛教の經典即ち阿含經般若經等孰れの經に據るも、先づ外界の虛妄を破潰し、心識を以て理論を始めたり、是れ即ち心界を以て主位に置くものなり、抑も此二大思想は何如にして生じたるや、將た孰れが眞理なるやは姑く之を別個問題として、唯物説は既に釋迦以前にありて、印度に發達し、有神説は既に耶蘇以前にありて猶太に發達したることば、之を歴史に徴して、彰々疑ふべからざるなり、若し此點を捉へて以て佛教は婆羅門教より發達し、基督教は猶太教より發達したりと云はば、吾人も亦た敢て之を非とせざるなり

然れども耶蘇は有神説に加ふるに、人類の墮落未來の審判天國の光榮を以てし、釋迦は唯心説に加ふるに、世界の無常衆生の流轉涅槃の寂靜を以てせり、是れ基督教の猶太教より分れ、佛教の婆羅門教より分れたる所以なり、抑も有神説に加ふるに人類の墮落を以てする時は、其勢素より未來の審判を免るゝこと能はず、而して之を免れしめて天國に登らしむるものは耶蘇の福音なり、又唯神説に加ふるに世界の無常を以てするときは、其勢素より三界の流轉を免るゝこと能はず、而して之を免れしめて涅槃に入らしむるものは釋迦の説法なり、然らば人類は何故に流轉するや、之を研窮せざれば以て佛、耶、兩教の眞理を知ること能はざるなり

基督教の  
奥義

基督教は曰く、上帝が造りたる人間は本來純善なり、然れども人類の始祖亞當夏娃一九び上帝の命を犯したるが爲めに、其罪子孫に感染して遂に人間の墮落を見るに至れりと、佛教は曰く、眞如海中本と波瀾なし無明一九び眞性に迷ふてより、三界の流轉を見るに至れりと、然らば吾人が先づ着眼すべきものは此犯と迷とにあり、犯したるものは何物なるや、犯されたる神意と



は何如なるものなるや、又た迷ふたるものは何物なるや、未だ迷はざるの前は何物なりしや、是れ吾人が研究せざる可らざるの問題なりとす、蓋し基督教の説く所によれば、此全宇宙は唯だ上帝が其全智全能の力を以て攝理する所にして、上帝の意は須臾の間も事々物々の上に行はれざるはなし、故に萬物上帝の意に従ふときは、宇宙萬有の諸機關諸勢力は恰も一大樂器の相調和して美音を發するが如く、和氣祥々としてその光榮を彰はさるるなし、然るに宇宙萬有は大別して二類となす、一は萬物にして一は人類なり、萬物は上帝より靈性を與へられず、意志を與へられざるが爲めに、唯だ重力の如き凝聚力の如き親和力の如き物質的の勢力、即ち必然的の理法に盲從して運動するを以て、毫も上帝の意に悖ることなきなり、之に反して、人類は上帝より靈性と自由の意思とを賦與せられたるを以て、その行爲は盡く自己の意思に由らざるはなし、若し此自己の意志にして上帝の天意と一致せんか、人類の墮落は決して起らず、而して人類は全く上帝より賦與せられたるの光榮と權能とを以て萬物を支配して之が帝國たることを得ん、然るに一た

び上帝の意に逆ふて罪を犯したるを以て、疾病の如き、死亡の如き、禍害の爲めに犯され、却て物質の爲めに支配せらるゝを免れず、然らば耶蘇が救主となりて此世界に來りたるは此の人類が既に墮落したるの地位を回復せんが爲めなり、而して最初人間が上帝の意に逆ふて罪を犯したるものは其心にあり、故に耶蘇は一方に於ては天國の光榮を示めし、一方に於ては地獄の恐怖を示して此の良心を警醒せんことを務めたり、然るに人類の罪疾既に沈痼して容易に癒すべからざるを以て、天然治療に放任す可らずとし、別に服藥一劑を用ひたり、此藥劑を名けて聖靈の感化と云ふ、故に聖靈の感化は獨り基督教信仰の有する所にして、他教の有する所にあらず、又聖靈の感化は一種の生命ある働きにして、抽象的思想にあらざる也

故に基督教の教理は上帝創造、罪惡、代贖、聖靈、神子、審判、天國、地獄より成立したるものにして、その教理の全体を總括して之を論ずるときは、宇宙萬有を以て一大機關と看做し、上帝を以て此一大機關を運轉するの中心とし、機關各部分凡ての働をして最大中心たる上帝の意と一致せしむるを以て目的



とす故に聖靈の感化を被りて人性本來の純善に復し、上帝の招きに應じて天國に入るものと雖も、亦決して上帝と一体同位なるべしと言ふにあらざ、唯だ上帝の意と一致して、最初上帝より賦與せられたる光榮と權能とを回復するに過ぎざるのみ、

### 佛敎の極理

然らば佛敎に於て稱する所の無明迷妄とは果して何物なるや、無を執して有とし、虛を執して實とし、苦を執して樂とするもの、之を妄想顛倒の見と云ふ、而して此妄想顛倒の見を生せしむるの源因之を無明と云ふ、然らば無明は何よりして生ずるや、無明は一の現象なり、故に之を發現するの本體本質なかる可らず、然り而して無明を發現するの本體本質は有識なりとするや、將た無識なりとするや、若し有識なりとするときは是れ既に能識所識の差別あるものにして、亦た能境所境の對立あるときは固より物我の見あるを免れず、而して無明は即ち物我の見にあらずして何んぞや、物ありと執する之を法我と云ふ、我ありと執する之を人我と云ふ、故に法執、我執は即ち物我の見なり、故に無明は有識より生ずると云ふ者は猶ほ水は水より生じ、火は火

より生ずると言ふが如く、唯だ是れ同一の説を繰り返へすものにして、源因と結果の關係を解釋したるものにあらざるなり、然らば無明は無識より發現したりとせんか、凡る無識と名くるものに二種あり、一は皆無の境にして本來一物なきもの一は唯だ物質ありて心識なきもの、是れなり、抑も内界と外界とは本ど是れ人法二我を執する無明より生ずると云へば無明に先ちて無意識の存在すべき理はなし、然らば無明は皆無の境より發現すとせんか、皆無は有を生ぜざる也、是に由りて之を觀れば、無明は非有非空亦亦空の眞如海中より發現したるものなりと推論せざる可らず、されば無明の妄執は有ならざるものを執して有とし、我ならざるものを執して我となし、實ならざるものを執して實となし、人法二我の見一たび生じて一分は心識となり、一分は山河大地となり、心識は其業報の果に牽かれ、此世界より彼の世界に生死流轉して窮極あることなし、然らば無明は先づ心識を生ずと雖も、その本體は即ち非心非物なりと謂はざるを得ず、而して物心二界一つとして常住なるものなく、その遷流の疾速なること浪流、焰火亦た以て譬ふるに



足らざる也此に於て乎釋迦始めて苦集滅道の四大真理を説き、以爲らく苦は集より生ず、集を滅するは道にあり、既に道を以て苦を滅すれば即ち涅槃に入ることを得ると故に佛教の教理は眞如、無明、無我、涅槃、四諦、十二因縁より成立したるものにして、其教理の全軀を總括して之を論ずるときは、唯だ一眞如界を以て實相とし、宇宙萬有を以て迷妄に生ずるの假相となし、此假相を破して涅槃に歸するに外ならず、而して涅槃は即ち平等法界なり、故に夫れ基督教は人類始祖の罪惡を以て人類墮落の源因として、犯罪以前の狀態に歸らしめんと欲し、佛教は勿然念起したる無明を以て有情流轉の源因として、無明以前の狀態に歸らしめんと欲す、是れ佛耶根本的教理の由りて判るゝ所也、

### 佛耶二教の比較

願ふに基督教の思想も亦美ならざるにあらず、蓋し吾人若し人間に比擬して此全宇宙を觀るときは、上は天軀の運行より下は地上の萬物に至る迄、大は地球の全軀より小は動植物の微に至る迄、互に聯絡して共同の目的を有せざるはなく、此全宇宙は殆ど功妙にして美麗なる一大機關なり、然らば吾

人の肉體は吾人の精神によりて左右せらるゝが如く、此全宇宙も亦た最大有心者によりて攝理せらるゝと考定するも、亦道理に近からずや然れども更に深く之を熟考するに、此全宇宙は吾人心識の外にあること能はず、而して此全宇宙を攝理するの上帝ありと假定するも、亦た皆な吾人思想の理法より生ずるものに外なる能はず、然らば此の如く絶對、無限、無始、無終なる上帝の存在をも假定する心識の本體は、果して何如なるものなる乎、然らば上帝を以て吾人の心識内に立つるが眞理なるか、將た吾人の心識外に立つるが眞理なるか、若し上帝を吾人の心識外に立つるときは、上帝は吾人の心識内にあらず、上帝既に吾人の心識内にあらざるときは、是れ上帝は全宇宙に遍滿すと云ふべからず、何となれば吾人の心識は全宇宙の最大重要な部分を占むるものなればなり、然らば上帝を以て吾人の心識外にありとするに同時に吾人の心識内にもありとするが眞理なるか、將た獨り上帝を以て心識外にのみありとするが眞理なるか、是れ實に最大問題なり、而して佛教の所謂眞如は即ち上帝を以て吾人心識の内外に立てたるものなり



唯だ既に上帝を以て吾人心識の内外にありとするときは、上帝は一個の意志を有するものとなす可らず、是れ佛教が眞如を以て絶対、無限、無始、無終の理体なりとするも、人性に比擬して一個の意志ありとするを許さざる所以なり、然れども看るべし基督教は吾人一個の意志を滅して眞如の理体に歸せしめんとするに至りては、その教理は大に相同じからざるも、その目的は亦た頗る相近きものあるを、是れ蓋し兩教が宗教として同じきの點なり、佛耶二教の差別既に斯の如し、その教理の異なる所は人心の感化に亦た至大なる差別を顯はすものあり、基督教は吾人の心識外に於て全智全能なる個體の上帝を立つるを以て、その信仰は純然たる客觀的の信仰にして、その信仰の明瞭なること言を俟たず、而して耶穌は又た人類の墮落を以てその教理の中心とするを以て、恰も是れ太陽の光線をば玻璃鏡に集めて物を燒くか如く、基督教は上帝の至大なる勢力を以て人間の眞心に集むるものなり、されば基督教が人間道徳上に於けるの勢力は亦た一種無比の勢力なりと云はざる可らず、之に反して佛教の所謂眞如は非有非空、亦有亦空の理体

にして物心二界の上に立つものなるを以て、基督教の上帝の如く吾人の心識外にありて吾人の心識に對するものにあらず、即ち悟るも是れ眞如の力、迷ふも是れ眞如の力と云へるは佛教の理を得たる者なり、之に加ふるに、釋迦は耶穌の如く獨り人類の墮落を救ふを以て其教としたる者にあらず、乃ち釋迦は世の無常を觀じ一切有情の生死流轉するを悲みて之を救はんが爲めに法輪を轉じたるを以て、釋迦の濟度中にあるものは獨り人類にのみに限らず、人類より劣等なる畜生界も亦た釋迦の濟度する所なり、人類より優等なる天人界も亦た釋迦の濟度する所なり、故に釋迦の教は獨り吾人々類の特有たる眞心と罪惡とに向ふたるものにあらずしてあらゆる生きとし生ける一切衆生の迷源に向ふたるものなり、之を一言すれば、佛教は基督教の如く人間の罪を攻めずしてその迷妄を破せり、而して凡そ一切衆生最初一念の無明によりて生死流轉するものは皆な迷へるなり、獨り人間界のみ迷へるにあらずして畜生界も亦た迷へり、天人界も亦た迷へり、之を要するに、基督教は獨り人類にのみ限るの宗教なり、佛教は普く一切衆



宗教信仰  
の時代

生に通ずるの宗教なり、その教の廣狹既に此の如くなれば、その結果も亦た大に異ならざるを得ず、然れども世界人類の進歩は種々の時代を經過するものにして、時代異なれば思想も亦た異ならざるを得ず、思想異なれば信仰も亦た異ならざるを得ず、故に基督教の如きは思想進歩の或時代に於ては非常の勢力を有したるものにして、その人類の良心を開發し、道德の活氣を鼓舞するの勢力に至りては決して佛教の企及する所にあらず、蓋し夫の羅馬帝國の衰世の如きは方さに此時代に相當したるものにして、此時に當り歐亞の列國々民各々羅馬の爲めに征服せられて金鷲の旗下に集り、列國々民が崇奉したりし偶像の如きは羅馬の博覽會場に陳列せられて漸く信仰の勢力を失し、文學に於ても、法律に於ても、道德に於ても、世界と云ふ觀念は髣髴として人心に浮び出だしたり、而して羅馬帝國道德の光景は何如、んと言ふに社會の腐敗、人心の放亂、斯時より甚しきはなし、斯る時代に於て基督教が勢力を占めたるは素より自然の勢なりと謂はざるを得ず、然れども今や學術の輝光に援けら

れて人類の思想更に一層宏大となり、特に夫の進化説一たび顯はれ、人間の良心も亦た自然に發達すべきものにして人間は決して墮落したる者にあらず、又た人類と他の動物との間には親密ある關係あるものにして其源を同ふするものなりとの眞理を唱ふるの今日に方りては、普く一切有情に通ずるの佛教が基督教に代りて勢力を占むるの時代も、亦た漸く到達したりと云はざるを得ず、

佛教と基督教の極  
りて類似  
するの點

佛教と基督教との差別斯の如くなれば、是れ兩教は教理に於て根本的の相違あるもの也、然れども兩教の漸く發達したる結果を觀るときは、形貌上頗る相類似するの點なきにあらず、然れども是れ唯だ形貌上の類似のみ、精神上の一致にあらざるなり、乞ふ進みて之を明にせん、基督教の最も進歩したる教理に於ては、上帝が此宇宙を創造するや、決して工匠が家屋を建築し器具を造作するが如くならずして、猶ほ農夫が種子を播くが如く、之に自然の勢力を賦與して開發せしめたりと言へり、此説に従ふときは、上帝全能の力は全宇宙の外より働かず、乃ち全宇宙の内に働くも



のにして、上帝の体は宇宙に遍在し、宇宙進化の目的は即ち上帝の意志なりと云はざるを得ず、果して此教理の如くなれば、有神説も亦た進化説と調和することを得て、頗る佛教眞如開發の説に近づきたるが如し、然れども畢竟するに、基督教は何如程進化説と調和したりとも、上帝より一個の精神一個の意志を奪ひ去ること能はず、故に上帝の意は宇宙に遍満すと言ふも、上帝と宇宙萬有の間とは劃然たる界限ありて全く別物なり、而して佛教の所謂眞如は然らず、眞如即萬法、萬法即ち眞如にして、其間僅かに体象表裡の差別あるに過ぎざる也。

抑も又た佛教が印度より支那及び我邦に東漸するに及んで、各種の教派發達し、中に就ひて現時我邦に行はるゝ淨土宗及び眞宗の如きは、彌陀即ち譯すれば無量光若くは無量壽と稱する佛を立て、西方十萬億土の淨土に在しますと、し此彌陀の誓願に歸依し、その慈悲光明を仰ぎて西方淨土に往生せんと欲するに至りては、基督教の上帝と甚だ類似する所あるが如し、蓋し彌陀既に一切衆生を濟度するの誓願を立てたりと言へば、是れ上帝の如

く一個の精神あり、一個の意志あるものなり、而かも唯心説を以てその根本とするの佛教に於て、外界に佛体を立て淨土を立つるが如きは、豈に尤も基督教に類せざらんや、然れども少く其理を考ふるときは、是れ亦た形貌上の類似にして、精神上の類似にあらざるなり。

蓋し彌陀に法性法身あり、方便法身あり、法性法身とは即ち眞如の理体にして、所謂心佛及衆生是三無差別なり、唯だ衆生を濟度せんが爲めに誓願を立てたるものは、即ち方便法身にして、眞如の悟界を占領するものは、素より彌陀一佛に限らずと雖も、彌陀は一切衆生に先だち最も夙く正覺を開きて佛陀とありしを以て、後來佛陀となりて正覺を開くもの亦た盡く彌陀誓願の力に由らざるはなしと立説するもの、蓋し淨土眞宗の正意ならん、而してその名號を無量光若くは無量壽と稱し、その住する所は西方十億萬土にありと言ふと雖も、亦た邊際あることなしと言へば、是れ亦た衆生を導かんが爲めに其方を指し其名を設けたるものに外ならず、故に彌陀は實存すと雖も、一たび彌陀に歸依して正覺を開けば、即ち我れも彌陀も一體となり



淨土は實存すと雖ども一たび淨土に往生して華藏を開けば即ち心界の外に淨土あるを見ず、故に佛教の彌陀と淨土とは、形貌上に於ては基督教の上帝と天國とに類似するものありと雖ども、精神上に於ては決して相一致するものにあらざるなり、

根本的教理に於て佛教と基督教とは此の如く差別あるにも係らず、或點に於ては亦た一致する所あり、吾人は此一致の點を稱して眞諦主義なりと言はんとす、眞諦主義とは世外教の意義にして佛教、基督教共に皆な人間を導ひて此世界を出でしめ天國若くは涅槃に入らしむるを目的とするの宗教たるに外ならず、是れ吾人が世内の道德を修め、世内の幸福を求むるを以て目的とするの俗諦主義に反對して眞諦主義の名稱を與へたる所以なり、蓋し眞俗二諦なる語は本と淨土眞宗の慣用する所にして、彼れ宗派は宗教の眞理に達するの分際を指して眞諦と稱し、世間の道德を修むるの分際を指して俗諦と稱したるも、今や吾人は此語を假りて之を世外教、世内教の意義に用ひたり、

### 世外教と 世内教

### 儒教の教 理

均く是れ眞諦主義に於けるの佛耶兩教を以て之を較論することは難からずと雖ども、俗諦主義の儒教を以て眞諦主義の佛耶兩教に較論せんとするは其實甚だ難しとす、然れども獨り儒教のみを除きて、之を論せざるときは本論全体の整均を失するを以て、聊か試みに之を論せん、

儒教は唯だ人性と社會とを以て其教を立つ、故に未來の世界を説かず、亦た上帝の性質を説かずと雖ども、その所謂人性の包含する所は極めて廣大にして、天の命する之を性と謂ひ、性に率ふ之を道と謂ひ、道を修むる之を教と謂ふ、蓋し性とは仁、義、禮、智、信、道とは父子君臣、夫婦、兄弟、朋友にして、教とは詩書禮樂なり、禮樂以て徳性を涵養し、詩書以て義理を講明するときは、人性は恰も明鏡の如く、其物欲の垢を去りて天性の明に復せざるはなし、故に詩書禮樂の教を講ずるは、即ち父子、君臣、夫婦、兄弟、朋友の道を修めんが爲めなり、父子、君臣、夫婦、兄弟、朋友の道を修むるは、即ち自然の天性即ち明德に復せんが爲めなり、自然の天性即ち明德に復せんが爲めなり、自然の天性即ち明德にして純粹清淨垢汗なきときは、亦た自ら天命に合し、天地と其徳を同ふす



るに至るべし、然らば命とは何如なる意義を有するや、孔子以前の時代において天を説くこと極めて多しと雖も、孔子以後の時代にありては天を説くこと極めて少し、凡そ尙書、雅頌に於て説く所の天は或は怒り、或は怒み、或は欣び、髡髡として基督教の上帝に似たり、論語の中にも罪を天に得るときは禱る所なしと云ひ、孟子の中にも之を天に薦めて惟れ天之恩を享くと云ふを以て之を觀れば、天とは素より蒼々たる形天を指すものにあらざり、又た抽象的の道理を指すものにあらざること、亦た以て證すべきなり、然れどもその性質に就ひては終に一定の解釋なかりしなり、是れ儒教が俗諦主義たる所以なり、儒教は以爲らく人類は唯だ人類自然の徳を明にして當然の義務を行ふときは是れ天之に福し、是れ人之を愛し、復た宗教に事とする所なきなりと、然らば人性は何如なるものなる乎、是れ儒教が力を盡くして研究する所の問題なり、孟子は人性を以て善なりとし、荀子は人性を以て惡なりとす、孔子は唯性相近習相遠の一語あり、斯に於て後世儒者孔子の言に折衷し、孟荀二家を調和するの諸説紛然として世に見はれ、揚雄の如きは善惡混

合の説を唱へ、韓愈の如きは性有三品の説を唱ふるに至れり、然るに宋儒に至りて始めて人性に本然の性氣質の性の二種あることを唱へて、以て此一大疑問を解釋したり、蓋し本然の性は理に本くものにして、氣質の性は氣に本くものなり、理と氣と相合して天地萬物を化成す、唯だ人性の理に本くものは人々純善なりと雖も、その氣に本くものに至りては剛柔強弱明暗の差異なきこと能はず、是れ智愚善惡の由りて來る所以なり、然らば教の要は氣質の性を矯めて本然の性を全ふするに外ならずと、是れ宋儒の唱ふる所にして、儒教が一種の哲學を構成したるは全く茲に存するなり、抑も又た此理氣の説によりて人類と宇宙との關係をも説明すべきものあり、蓋し以爲らく人類は萬物の靈なりと雖も、人性は物理と其の源を同おするもの也、何となれば大極陰陽を生じ、陰陽變化して物理人性をなす、即ち萬物に於ては水、火、木、金、土の五行となり、人性に於ては仁、義、禮、智、信の五性となる、唯だ人類のみ天地の全を受けて五行の精を鍾めたるが故に、智覺あり、感能ありて靈活なる妙用を顯はすことを得たり、されども陰陽は唯だ五



行の中に寓し五行の外に陰陽あるにあらず、大極は亦た唯だ陰陽の中に寓し陰陽の外に大極あるにあらず、而して世界萬物皆な理氣の運行する所なり、然れども理は氣を離れず、氣は亦た理を離れざるなりと、故に理氣の説は宇宙と人性との關係を説明し、又た人性の何物たるを説明するに足れりと雖ども、畢竟するに天即ち理なりと言ふの説に陥るを免れざるのみ

されば陰陽理氣の説は宋儒が易傳によりて發明したる一種の哲學に相違なしと雖ども、果して教祖孔子の意に合ふや否やは、吾人の知らざる所なり之を要するに儒教本來の精神は人性以上に存せずして人性以下に存す、特にその君臣父子夫婦の關係を説くが如きは儒教の尤も他に異なる所なり、蓋し儒教君臣の關係を説くには政治上の意義を以てせずして道德上の意義を以てす、故に孔子の書には忠君の語ありて愛國の語なし、唯だ孟軻に至りて始めて社稷を重しとし君を輕しとすと云ふ國家主義を唱へ、又た湯武放伐の事を贊美し、獨夫の紂を誅するを聞く未だ君を誅するものを聞かずと云ふが如き極端なる革命主義を唱へ出だしたり、然り而して孟軻の語

は頗る過激にして稍々温厚の意を失するが如しと雖ども亦た決して孔子の意に反對するものにあらず、何となれば君なるものは億兆の君師たるべき大任ある天吏にして、人民たるものは無限に之に服従すべきの義務ありとするものは、是れ支那國民固有の思想なり、然れども唯だ夫れ天吏なるが故に亦た天命に逆ふ可らず、若し天命に逆ふときは是れ自ら君位を抛棄するものなり、若し一たび君位を抛棄するときは更に一個の人民と異なることなし、故に之を誅戮するも可なりとは、是れ亦た之に附帶するの思想なり、而して此一大思想をば最も明瞭に言ひ顯はしたる者を孟軻なりとす、故に歴代支那は一方に於ては無限なる君主獨裁屢々行はれ、暴虐の政の極頂に達することあると同時に、他の一方に於ては革命の旗を靡かして、チャーレスに敵するのクローンウェル毎に顯れて顛覆を企つること、却つて民權を重んじ自由を崇ぶと自稱する歐洲各國よりも更に甚しとす、是れ豈に儒教の説に本くものにあらざるを得んや、次に父子の關係を説くに至りても、亦た一種他に異なるものなり、即ち孝順を以て人類の一大義務とし、父母の世



に在るときは精神を盡くして之に仕へ、父母既に死するときは三年の喪を盡くし、其靈に祭し、其墓に祀し死者に事ふること猶ほ生者に事ふるが如くせり、是れ支那祖先教の由りて起る所以にして、祖先教は即ち儒教の緊要なる大元素となれり、次に夫婦の關係を説くに至りても、亦た一種他に異なるものあり、幼時より男女の別を立つること極めて嚴にして、稍長するときは親戚と雖も同座せしめず、而して女に三従の道あり、家にありては父に従ひ、嫁しては夫に従ひ、老ひては子に従はざる可らずと教ふ、故に女子は男子に對しては毫も自由ある處のにあらす、亦た男子を離れては毫も權利あるものにあらす、然れども女子をして良妻賢母たらしめんが爲めには、最も女子の教育に意を注ぎたり、畢竟するに此君臣、父子、夫婦の關係は支那國民が世界に立ち一種特色の在る所にして、儒教は實に此特色の上にその基礎を築きたりと謂ふべき也。

然らば儒教はるの全軀の上よりして觀察を下し、有神説なりとせんか將た唯心説なりとせんかと問ふものあれば、吾人は勿論之に答へて有神説なり

と斷言することを懼らざるなり、然れども既に上帝の性質に就ひて一定の解釋を與へず、又た未來の世界を説かざるを以て之を觀れば、教理上に於て佛耶兩教と比較せんと欲するも得べからず、若し強て之を比較せんと欲すれば、唯だ儒教の道德と基督教の道德と頗る相類似するの點にあり、然れども儒教の道德と基督教の道德とはその行爲の誘因を異にす、故に儒教の道德と基督教の道德とが形貌上の類似に止りて、精神上の類似にあらざること猶ほ佛敎の道德と基督教の教理とが形貌上の類似に止りて、精神上の類似にあらざるが如し、

吾人が佛敎、儒教及び基督教の大軀に就て比較したるの結果は斯の如し、是れより進みて、三敎の教理を最も明瞭に、最も簡約に分論して、その裡に含蓄するの眞理を明にせん、

抑も基督教の教理は種々多端なりと雖も、之を約説すれば三位一體の説に外ならず、何となれば三位一體とは上帝、神子、聖靈是れなり、上帝は其性全智、全善、全能にして全宇宙の創造者なり、又其攝理者なり、上帝人類を創造し

基督教の  
教理



て、之に賦與するに自由の意志と善惡とを識別するの真心を以てす、然るに人類上帝の意に逆ふて罪惡に陥る、罪惡は即ち人類墮落の始めなり、故に上帝正義の徳一方に於ては、之を義罰して其道徳法を破らざらんことを欲したるも、他の一方に於ては上帝慈愛の徳其罪を救はんことを欲し、遂にその獨子耶蘇を人類の間に降生せしめ、彼を以て世界人類の罪に代りてその犠牲に供せしめたり、而して上帝が耶蘇を降生することは既に太初より豫定せし所にして、之が準備として猶太國民を選びて宗教上の教育と訓練とを受けしめ、其祖先アブラハム以來、上帝は此國民と交通を絶たずして彼等の祭司若くは豫言者に聖靈の感化を與へたり、故に耶蘇が將來に於て猶太國民の中に降臨することは、既に舊約の豫言者によりて豫言せらるゝ所なり、然るに果たせるかな、耶蘇は羅馬帝アウガスタスの宇に當りて猶太のベツレヒムの地に於て、童貞馬利亞の腹に生れ、其齡三十歳に及ぶ頃迄は世に知られざりしが三十歳にして始めて福音を傳へてパレスチナの各地を歴遊し、或は病者を癒し、或は死者を起し、或は激波を翻め、或は水上を歩し、或は其

形を變化し、或は一箇の蒸餅を以て五千人に分つが如きの奇跡を行ふて自ら神子たるを示めせしも、國人の爲めに信せられず却て其憤怒を招き神を冒瀆するの願案を以て十字架上に釘せられ、既でに葬られて第三日に墓中より復活して昇天したり、故に世界人類何人にて、耶蘇が代贖の爲めに死したることを聞て之を信じ、その罪を改悔して基督の愛と恩寵とに憑頼するものは、其罪を赦されて天國に入り上帝を見ることを得べし、是れ基督教の全躰は三位一體の説を以て説明することを得べしと云ふ所以なり、故に上帝、創造、人類、罪惡、拯救、代贖、神子、聖靈、奇跡、豫言、天國等は基督教理の眼目にして、所謂神學なるものは是等の眼目を分拆してその意義を解き、その關係を明にすることを務むと雖も、基督敎なるものは世界創造以來數千年間の出來事にして、新舊兩約の歴史に就き次第を追ふて之を研究するにあらざればその教理を解すべからず、基督教は宇宙及び人性の眞理に就き一種の思想と哲學とを形成したるものにあらず、人類は何故に墮落したる乎、耶蘇は何故に降生したる乎、耶蘇は何を以て救主たることを證明せらるゝ乎



人類の罪は何によりて代贖せらるゝ乎凡そ是等の問題は歴史的に研究するにあらざれば殆どその教理を解す可らず何となれば基督教の教理は抽象的思想によりて辯成せられたるものにあらずして歴史的の事實によりて辯成せられたる者なれば也。

吾人は斯の如きの理由なるを以て基督教を稱して歴史的宗教と云ふ歴史的宗教とは歴史上の出来事によりて顯はれたる宗教なりと云ふの意義なり

### 佛教の教理

佛教根本の教理は蓋し四諦と十二因縁とにあり四諦とは苦、集、滅、道の四大真理にして無常無我の真理は自らその裡に存するものなり何となれば苦諦とは内界、外界共に苦痛を以て充滿するゝの真相を觀るものにして、その苦や分ちて三種とす先づ顧みて察するに吾人の身體と精神とは時々刻々苦痛の爲めに惱さいるを免れず之を稱して苦々と云ふ然れども吾人の身體と精神とに感受するものは必ずしも苦痛のみにあらずして亦た多少の快樂ありとするも奈何せん此の快樂は時期一たび到れば皆な悉く壊滅に

歸するを免れず故に其樂は却て苦の因となる之を稱して壞苦と云ふ又た其快樂を生ずるの事々物々は必ずしも眼前に於て壊滅に歸せずとするも生住、異滅の四相に移されて遷流無常なるを免かれず之を稱して行苦と云ふ試に眼を開ひて此世界を觀よ此心身を觀よ果して三苦を離るゝもの安くにあるや然らば又た此苦果を樂起するの源因なきこと能はず然り而して此苦果を樂起するの源因は何物なるやと問へば蓋し無明にあり無明煩惱を生ず煩惱業果を生ず業果流轉を生ず故に樂苦を滅せざれば一切の苦痛を離れ一切の生死を離れたる涅槃の境に入ること能はず而して此樂苦を斷滅する方法は唯だ道諦即ち正見、正勸、正念、正定、正思、正語、正業、正命の八正道を實行して我執と邪見とを破せざる可らず然らざれば無明と煩惱とを解脱すること能はざるなり然り而して吾人が無明の因よりして生死流轉するの變化と順序とを説くものは即ち十二因縁にして所謂無明、行、識、名、色、六處、觸、受、取、有、生、老、死是れなり故に十二因縁は其實四諦中の樂諦を詳説したるものに外ならざるなり。



されば佛教の根本教理は唯四諦と十二因縁とにある也、而して吾人四諦の理を觀じ、吾人の身體精神を組織する色心二法を分拆して之を求むるに唯だ五蘊(色、受、想、行、識)の假りに和合するあるのみにして是れ即ち我なりと執すべきものなし、然るに元來我執は無明より生ずるものなるを以て、我執既に除くときは無明も亦拂ふことを得べしと、是れ蓋し佛教小乗の説く所なり、然れども釋迦の始めて小乗を説くや、其意主として有常の見を破して無我の眞理を顯はすにあるを以て、唯だ宇宙萬有の假相を論じて未だこの實體を論ずるに至らざりしなり、故に其説を聞くものは唯だ無我の眞理を見ることを得るも、所謂五蘊分拆すれば七十五法の假相皆な個々別々の實體ありとするを免れず、此に於て進みて權大乘を説き、此身心と世界とを組織する色心諸法は皆阿頼耶識より開發し、この識變の理によりて内外二界を現するものなりと始めて唯心の説を見はしたり、然れども權大乘に於ては此阿頼耶識なるものは唯だ眞如を以てこの實體とすと説きたる迄にして、未だ眞象不異の眞理を説かざりしなり、此に於て進みて實大乘を説き、忽然

たる一念の妄想は眞如海中より無明の波を起してあらゆる宇宙萬有を發現したり、故に萬法を生ずるものは眞如に外ならずと、始めて眞象不異の眞理を説きたり、是れを起信論の所説とす、然れども起信論の所説は猶ほ眞如と萬法との關係をば忽然念起と云ふが如き或る事情的に説明したるものにして、この説を窮るときは本來平等の眞如忽ち一變して差別の萬法たりと云ふの論理に陥るを免れず、

蓋し起信論は水波の喩を以て此の眞如と萬法との關係を説明したり、然れども此水波の喩は此關係の眞理を説明するに足らざるものあり、何となれば波の水面に生ずるは獨り水の物の生ずる所にあらず、風起りて之を動搖すればなり、今や眞如を以て水に喩へ、波を以て萬法に喩へ、無明の風之が縁となると言ふべしと雖も、抑も知らず此無明の風は安くよりして起りたるや、若し眞如の外より起りたりと云はば、是れ萬法の實體若くは源因たるものは眞如の外に彼れ阿頼耶識の如く猶ほ他に一物なかる可らず、若し又た無明の風も眞如の外より起らずとせば、何が故に平等の眞如は一變し



て差別の萬法となるや、若し又本來眞如自體のろの裡に風(無明)と波(萬法)とを具せしと云は、是れ眞如も亦た因縁あるものにして常住不變の者に非ず、既に常住不變の者にあらず、安んず是れを以て平等の躰なりとすることを得んや、故に起信論派が躰象不異の眞理を説きたるものは唯識の權大乘に比すれば更に一步を進めたりと雖ども、ろの關係を説くに至りては唯識の躰象分別論よりも更に一層の窮難を免れざるものあり、此に於て乎天台華嚴の妙説出で、始めて此難を排くに至れり、蓋し天台の説く所によれば眞如と萬法とは本來表裡の關係あるものにして、平等の象は即ち差別、差別の躰は即ち平等、故に平等の外に差別を見ず、差別の外に平等を見ず、躰象既に即一なれば、一滴の水も眞如にあらず、ざるはなく、一點の塵も亦た眞如にあらず、ざるはなし、是れ十界交具、一念三千の説ある所以たり、故に天台の説く所之を稱して理事無礙の法門と云ふ、又た華嚴の説く所は更に一步を進めて、躰象不離理事無礙の上に事々無礙を説くにあり、その説に以爲らく、象既に即一にして無礙なるときは、種々の現象亦た互に融即にして無礙ならざる

可らずと、是れ蓋し芥子須彌を容れ、巨象一毛に隠るゝの比喩ある所以なり、故に華嚴の説く所之を稱して事々無礙の法門と云ふなり、然らば佛教の教理は天台華嚴に至りて既に發達の絶頂に達したりやと言ふに決して然らざるなり、此理事無礙、事々無礙の法門の上に、六日如來を立て、秘密加持を以て即身成佛を唱ふるの眞言宗あり、阿彌陀佛を立て、本願他力を以て即得往生を教ふるの淨土宗あり、畢竟するに、躰象不離、象々不離の眞理を基礎として建立したるの教理に外ならず、而して是等の教理を一貫して唯一の佛教とするものは轉迷開悟、拔苦與樂の八字是れのみ、吾人は斯の如きの理由なるを以て佛教を稱して理想的宗教と云ふ、理想的宗教とは歴史上の出來事に本きたるものにあらず、唯だ思想によりて開發したるの眞理なりと云ふの意義なるのみ、是れ佛教が基督教の反對に立つ所以なり、

儒教は前に論ずるが如く、宋儒に至りて理氣の説一たび起り、一種の哲學を組織したりと雖ども、孔子の主義とする所は述而不作、信而好古の一點にあ



り、而して孔子の教は社會を以て目的とすと雖も、亦た自己の新主義を立て、社會を改造するが如きことを主張せざる而已ならず、臣は君を以て其綱とする支那固有の社會を以て人類自然の本姓に適したるものとし、禮樂の如き封建の如き井田の如き三代帝王の建設したる所のは時勢と共に變通して之を行ひ、取捨して之を用ひて以て明德新民の目的を達するにありされば、儒教は基督教の如く歴史上の出來事に基きたる者に非ず、又佛教の如く理想に基きたる者にもあらずして、全く支那古來歴代の帝王が制作したる制度に基きたるものなり、唯だ此制度を死視墨守するものにあらず、乃ちその制度に就ひて其意義を研究し、活用して、明德新民の目的を達するものは、是れを儒教の精神とて謂ふべけれ、此點よりして觀るときは、儒教は歴史的宗教にもあらず、又理想的宗教にもあらず、唯之を稱して制度的宗教と云ふべきのみ。

### 三大宗教の梁類

斯の如く論じ來れば、基督教は歴史に基き、佛教は思想に基き、儒教は制度に基き、世界の三大宗教各其性質を同ふせざるなり、故に基督教は歴史として

之を研窮せざる可らず、佛教は思想として之を研窮せざる可らず、儒教は制度として之を研窮せざる可らず、歴史は明瞭にして人を感じ易く、制度は其意を解せざるものと雖も之に施して其人を治むべく、唯だ思想は之を了解せしむるに非らざれば、以て其人を教ふ可らず、是れ儒教と基督教との行はれ易くして佛教の行はれ難き所以なり、

然れども世界の三大宗教は斯の如くその性質を異にするにも係らず、亦た其異なる所によりて互に相一致するの點あり、是れ吾人が大に注意を加へざる可らざる者なり、吾人乞ふ此點に就て姑く之を詳論せん、

抑も基督教の教理は歴史に基き、佛教の教理は思想に基き、儒教の教理は制度に基くと雖も、蓋し基督教の教理は耶穌一人に發達し、佛教の教理は釋迦一人に發達し、儒教の教理は孔子一人に發達したる者に非ず、皆數百年間若くは數千年間の時代を經過して發達したるものなり、尤も耶穌と云ひ、釋迦と云ひ、孔子と云ひ、各皆其教の中心とする所なれば、三大宗教の教理は彼等の思想に包含せられずと云ふにはあらず、否、彼等の教説にさへ包含せら



れすと云ふにはあらざれども、その吾人に完全なる教理として全く了解せらるゝ迄には、蓋し彼が如く數百年若くは數千年の時代を經過したりと謂ふの意義なり。

吾人乞ふ今ま事實に就ひて吾人の説を證明せん、基督教は上帝が世界を創造し、人類の始祖が惡魔の爲めに誘惑せられて罪を犯せし人性破壊の時代より挪亞の大洪水に至る迄、其間既に數千年を經過したり、又たアブラハムの時代よりモイセの時代に至り、モイセの時代より舊約の終に至る迄、其間亦た數千年を經過したり、此數千年間の歴史に就ひて世界の創造、人類の墮落、モイセ律法、大闢、以賽亞、耶列米、以西結等の豫言、以色列國民の命運を研窮するにあれば、耶穌降臨の意義は毫も吾人に了解せらるゝこと能はず、而して吾人が此間に於て最も看眼すべきものは、上帝の性質、人類の進歩と共に漸次發達したること是れなり、舊約の上帝は義の上帝なり、新約の上帝は愛の上帝なり、舊約の上帝は國民的上帝也、新約の上帝は世界的上帝也、舊約の上帝はその選民たる以色列族の爲めに勝利を與へ、復讐を好み、戰伐を喜

三大宗教  
發達の歳  
月

ぶの上帝也、新約の上帝は太陽を善者不善者の上に照らし、雨を義者不義者の上に降らすの上帝也、然らば基督教は前論の如く歴史的宗教たるにもせよ、此新舊兩約に書かれたる數千年間の出來事を以て之れが材料とし、總括して之を觀るにあらざれば、その今日吾人に了解せられたるが如き教理を得べからず、而して世人或は之を察せず、唯だ耶穌の教へたる所のみにて基督教理の全体を了解すべしと思ふが如きは、是れ未だ基督教の事情に通ぜざるものなり、されば耶穌は基督教理の中心とする所なり、故に耶穌は基督教の眼なり、耶穌を除ひて耶穌以前の出來事を解釋す可らず、耶穌を除ひて耶穌以後の出來事を解釋す可らず、然れども基督教全体の教理に至りては、獨り耶穌の教ふる所を以て之を得べきにあらざり、必ず世界創造以來數千年間の出來事を總括して始めて之を了解すべき也。

歴史的宗教既に此の如し、理想的宗教の發達は如何にと云ふに、是れ亦た數千年間の悠久なる時代を經過してその發達したるを觀るなり、今日世界に現存する佛教各派の教理は、悉く釋迦の宣べたる經説を所依として立宗し



たるものなりと云へば、素より釋迦の腦裡より湧き出でたるの思想たるに相違なきも、是等の教理は印度より支那及び我邦に東漸すると共に恰も草木の生長するが如く、自然的の發達をなしたり、乃ち彼の小乗を主とする俱舍宗、若くは有空兩宗を立つる唯識宗三論宗の如きは印度に於て發達したるも、天台、華嚴に至りては支那に入りて始めて發達し、眞言、淨土の如きは我邦に來りて始めて發達したり、而して是等の宗派互に軋轢し、或は相目して異端となすにも係らず、佛教を以て一大教理となし、總括して之を觀るときは、恰も一大樹木の發達して枝葉を生じたるが如きの觀なきにあらず、而してその發達は又た實に數千年間を経過したるの發達なり、然らば理想的宗教も亦た歴史の宗教と共に悠久なる時代を経過して發達したりと云ふべきなり、唯だ其異なる所は基督教は耶蘇以前に之が發達をなし、佛教は釋迦以後に於て之が發達をなしたること、是れのみ、是れ蓋し一は歴史的宗教にして、一は理想的宗教なるが故なればなり、抑も基督教教理の中心とする所は上帝なるが如く、佛教教理の中心とする

所は眞如なりとす、故に基督教教理發達の歴史は即ち上帝と云ふ觀念發達の歴史たるに過ぎざるが如く、佛教教理發達の歴史も亦た眞如と云ふ觀念發達の歴史たるに外ならず、小乘に於ては眞如の觀念未だ明かならず、權大乘に至りては眞如の觀念始めて顯はれたるも、その眞如は活動なき、生命なき眞如なり、實大乘に至りて活動なき生命なき眞如は始めて活動あり、生命あるの眞如となり、眞言淨土の諸宗に至りては眞如愈々人的を借へて吾人の眼前に現るゝに至れり、佛教の教理進みて此に至れば、釋迦も亦た是れ肉身に顯はれたるの活眞如なるを見る、其理猶は是れ耶蘇が神子として人類の間に顯はれたると異なることなし、故に宗教の歴史は一大觀念の歴史也、國民の歴史も亦た一大觀念の歴史也、何となれば釋迦以前に於ける印度數千年間の歴史は佛教準備の歴史なり、亦た釋迦以後に於ける印度數百年間の歴史は佛教傳播の歴史なればなり、又た耶蘇以前に於ける猶太數千年間の歴史は基督教準備の歴史なり、亦た耶蘇以後に於ける猶太數百年間の歴史は基督教傳播の歴史なればなり、而して基督教の歴史は事實上より上帝



と云ふ觀念を明瞭ならしめたるに外ならず、佛敎の歴史も亦た思想上より眞如と云ふ觀念を明瞭ならしめたるに外ならず、豈に之を稱して國民の歴史も同く是れ一大觀念の歴史なりと謂はざるを得んや、

次に制度的の宗教に至りては亦た愈々吾人の斷案を確かしむるに足れるものあり、蓋し孔子は二帝三王を祖述してその制度を研窮し、其心法を傳へ集めて之を大成したるを以て、是れ亦た儒敎の發達は孔子の前後數千年間の時代を經過したるべし、而して儒敎教理の中心とする所は仁徳にあり、仁徳は蓋し人間の完全なる徳を意味す、故に孔子理想的の人物は即ち仁徳を備へたるの人物なり、されば儒敎は眞如の觀念をも明にせず、又た上帝の觀念をも明にせざるも、實に人間と云ふ一大觀念を明瞭にしたりと謂ふべし、是れ儒敎の一大功業なり、

若し世界の歴史より觀察を下し、人種を以て宗教を區別すべくんば、基督敎は「セミチツク」人種の中に生じたる最も大なる觀念なり、佛敎は「アリヤン」人種の中に生じたる最も大なる觀念也、儒敎は蒙古人種の中に生じたる最も

大なる觀念也、然れども基督敎は「セミチツク」人種の宗教とならずして「アリヤン」人種の宗教となり、佛敎は「アリヤン」人種の宗教とならずして蒙古人種の宗教となる、亦た奇なりと謂ふべし、而して三敎の一般人類に適應せらるゝ亦た以て觀るべし、唯だ吾人の心理に湧き出る問題は三敎の三大觀念は互に相撞着するや、將た相容るゝやの問題是れなり、

三大宗教の三大觀念及び其比較

基督敎は歴史に基き、儒敎は制度に基き、佛敎は思想に基き、三敎のその性質を異にするや斯の如し、此點よりして見るときは、三敎は素より相容るゝものにあらず、然れども單に人間と云ひ、上帝と云ひ、眞如と云ふ抽象的の觀念に就て之を論ずるときは、三敎或は相容るゝものなり、然らば何如にして相容るゝや、唯だろれ廣きもの能く狭きものを容るゝも、狭きものは廣きものを容るゝ能はずとは、是れ吾人思想の理法にして動かす可らざるものなり、試に人間上帝眞如の三大觀念を以て之を比較せよ、孰れを最も廣しとするや、孰れを最も狭しとするや、人間と云ふ觀念は上帝と云ふ觀念よりも狭く、上帝と云ふ觀念は又た眞如と云ふ觀念よりも狭し、故に人間と云ふ觀念は



上帝と云ふ觀念の内に容るべきも、上帝と云ふ觀念は人間と云ふ觀念の内に容るゝこと能はず、上帝と云ふ觀念は眞如と云ふ觀念の内に容るべきも、眞如と云ふ觀念は上帝と云ふ觀念の内に容ること能はず、是れ上帝と云ふ觀念は人間と云ふ觀念よりも廣く、眞如と云ふ觀念は上帝と云ふ觀念よりも廣ければなり、蓋し孔子堯の徳を賛歎して唯だ天を大なりとす、唯堯之に則ると云ひ、孟子聖人の徳を稱して美大、聖神なりと云ふ、之を要するに、人性の道德智慧を賛歎しての極に臻れば、唯だ之を上帝に比擬するに過ぎざるなり、而して上帝の智は全智なり、上帝の力は全能なり、上帝の徳は全善なり、人間の智徳何如に至大なりと雖ども、豈に能く上帝と均きことを得んや、故に上帝と云ふ觀念を以て之を人間と云ふ觀念の上に置くも、豈に人間と云ふ觀念を害せんや、然り而して上帝の全智、全能、全善なる所以の者は何に由りて生ずるや、眞如法界の理事無礙なるが爲めなり、事々無礙なるが爲めなり、若し眞如法界をして理事無礙ならしめず、事々無礙ならしめずんば、上帝決してその全智全能の力を施すこと能はざるべし、蓋し全能と云へば無

中有を生じ、有中無を生ずるの意義をも含み、全智と云へば過去なく、現在なく、未來なきの意義をも含む、斯の如きは眞如法界に遊ぶものにあらざれば、安んず之を能くせんや、是れ上帝と云ふ觀念は至大なりと雖ども、眞如と云ふ觀念の内に包含せらるゝ所以なり、

且つそれ人間と云ふ觀念を上帝と云ふ觀念の内に容れて、上帝と云ふ觀念始めて活き、上帝と云ふ觀念を眞如と云ふ觀念の内に容れて、眞如と云ふ觀念始めて活く、故に此三大觀念は單に觀念として見るときは、唯だ彼れ是れ相撞着せざるのみならず却て互に相解釋すべきものあり何となれば完全なる人性を假定せんには、先づその徳性と責任とを假定せざる可らず、而して此徳性は上帝の與ふる所なり、又た此責任は上帝に對するの義務なりとするときは、人性始めて完全に解釋せらるべし、又た完全なる神性を假定せんには、先づその全智と全能とを假定せざる可らず、而して此全智と全能とは眞如法界の兩性たる絶對と無限とに合躰するものにして、之を具することを得べし、故に上帝と云ふ觀念は眞如と云ふ觀念の内に容れて始めて解



釋せらるゝことを得べし、是れ此三大觀念は唯だ彼れ是れ相撞着せざるのみならず、却て互に解釋すべしと云ふ所以なり、然れども觀念の最も廣きものは、必ずしもその吾人實際の道德に精密劃切なる法言を與ふるものにあらざる也、故に佛教は人間社會の間に行ふべき道德を脱かざるにあらずと雖も、無上正覺の道を以て高尚なりとし、人道徳を以て身近なりとするが故に、その道德の格言と工夫を教ふるに至りては、却て基督教の劃切なるに及ばざるものあり、試に看よ、四福音に於て教へたるが如き勢力ある道德の格言は、孰れの佛經に於て發見すべきや、然れども基督教は靈界的の幸福を目的として、人界的の幸福を目的とするものにあらざるを以て、その道德の格言と工夫とは又儒教に及ばざるものあり、蓋し福音に於て己所欲施之于人と教ふる所の格言は、甚だ美ならざるにあらず、然れども論語に於て一方には己欲達先達人と教へ、他の一方には己所不欲勿施之于人と教へて、以て積極的消極的の両面を全ふしたる者に如かず、又た他人若し汝の右頬を批れば、左頬を轉じて之に向へと教へたるは劃切

多神教一  
神教凡神  
教の關係

ならざるにあらず、然れども論語に於て以直報怨、以德報徳と教へたるの仁臻り義盡きて人類社會に行はれ易きに如かず、之を要するに、佛教と基督教とは道德を以て永生若くは正覺を得るの手段とせり、故に勉強して道德を行ふの傾向なきにしもあらず、之に反して、儒教は中心誠に好みて道德を行ふべしと勸めたり、是れ所謂之を知るものは之を樂しむものに如かざるなり、然れども是れ唯だ滔々たる三教信徒の多數に就て言ふべきことにして、三教の聖人賢人に就ひて言ふべきことにあらざるなり、抑も三大宗教の三大觀念は單に觀念として之を論ずるときは、彼が如く互に相撞着せざるにも係らず、儒教と佛教とは宗教として一致することを得るも、佛教と基督教とは宗教として一致することを得ざるの點あり、記應するや否や、吾人が緒論に於て基督教及び儒教は一神主義若くは多神主義にして、佛教は乃ち凡神主義なりと斷言したるを、是れ予儒教と佛教とは宗教の點に於て一致することを得るも、佛教と基督教とは宗教の點に於て一致することを得ずと云ふ所以なり、此問題は頗る緊要の問題なれば、乞ふ進み



て之を評論せん。

蓋し凡神主義と多神主義とは其實に於て一致するものなり、何となれば、凡神主義は夫の天台華嚴の教理の如く眞如と萬法との同躰不離を説くものなり、眞如と萬法とは唯だ是れ同體不離なるを以て一滴の水も眞如にあらざるはなく、一點の塵も眞如にあらざるはなく、天地萬物を擧げて盡く是れ眞如なりと謂はざるを得ず、凡神主義とは即ち是れなり、然るに斯の如く天地萬物皆な擧げて眞如なりとするときは、日月も亦た眞如なり、河海も亦た眞如なり、草木も亦た眞如なり、動物も亦た眞如なり、人間も亦た眞如なり、一切衆生、悉有佛性、草木國土、悉皆成佛とは正さに此理を指す、而して多神主義の多神主義たる所以のものは、例へば日月の神、河海の神、草木の神、水火の神、風雨の神、人間の神と云ふが如き宇宙の自然力、若くは人類の最も卓絶したるものを神躰として之を崇拜するにあり、故に凡神主義の眞理を以て之を視るときは、多神主義は排斥すべきものにあらざ、何となれば宇宙萬有皆な盡く眞如の徳を含み眞如の力を表するものなればなり、又た多神主義を以

て凡神主義を視るときは、是れ亦た反對に立つの主義にあらざ、何となれば凡神主義は高尙なる理論を以て多神主義の眞理を解釋するものなればなり。

然れども凡神主義と多神主義とは決して相一致すること能はず、何となれば一神主義は唯だ全宇宙は獨一眞神の創造し攝理する所なれば、獨一眞神の外には何物をも崇拜することを得ずと教ふるを以て、多神主義が獨一眞神の外に宇宙の自然力若くは人類の卓絶したるものを崇拜するが如きは、最もその排斥する所なり、一神主義既に多神主義を容るゝこと能はざれば、凡神主義も亦た一神主義を容るゝこと能はず、何となれば一法界の眞理に暗きものは迷ふて衆生となり、一法界の眞理に明なるものは悟りて佛となる、故に苟くも之を悟るものあれば、理事無礙、事々無礙の一法界中よりは千萬億の上帝を現はすと云ふと雖ども更に相妨げざるなり、故に獨一眞神の外に一神なしと立つるが如きものは凡神主義に反對するの最も大なるものなり、是れ一神主義は多神主義よりは一層高尙なるにも係らず、凡神主



佛敎が我  
邦に勢力  
を得たり  
しこと極  
容易にし  
て基督敎  
の勢力を  
得るは極  
めて困難  
なる所以

義は一神主義と一致せずして、寧ろ多神主義と一致する所以なり、此理を明にするときは、以て我邦宗教の歴史を解釋するに足れるものあり、蓋し古代佛敎の始めて我邦に入るや、朝廷先づ之を崇奉し、伽藍を建て僧尼を度して遍く海内に其法を布きたるにも係らず、行基の出る迄は猶ほ未だ鞏固なる基礎を得ざりしなり、是れ蓋し一は多神敎既に久く行はれて民の信仰全く空虚ならず、一は皇室は即ち神奇なりと云ふの國史ありて存したるに職由せずんばあらず、斯る國柄に於て佛敎の澤普く民心に滲はんことは頗る難しとす、此に於て行基出で、大乘佛敎、体象不離の眞理に基きて神佛一体の義を主張し、國民の心をして始めて安らしめ、朝廷の師依をして益々固らしめたり、行基の後に空海、傳敎見はれ、行基の遺意を繼ぎて、本地垂迹の説を立て、更に一層その説を高妙にしたり、是れによりて佛敎愈々長足の進歩をなし、國史と佛敎との衝突始めて熄み、皇室は佛敎によりて愈々固く、佛敎は皇室によりて愈々盛んなるに至れり、是れ全く行基、空海、傳敎凡神主義を以て多神主義の説を容れたるにあらずんばあらざる也、然るに今や

基督敎は歐米各國の宣教師によりて我邦に輸入せられ、三府五港より各地方に至るまで、學校、病院、會堂を建設して、その敎を擴張し、日本國民をして福音の道に歸せしめんと欲するの熱心も亦た熾んなりと謂はざる可らず、而して基督敎は揚言して曰く、佛敎既に萎靡して信仰の力を失し、儒敎も亦た世の進歩に後れて國民の道徳を維持すること能はず、今の時に方りて日本國民の宗教たるべきものは獨り我基督敎あるのみと、果して此言の如くなれば、基督敎は全國到る處に歓迎せられて、儒佛二敎を蹂躪し、無人の地を行くが如くならざる可らず、而して基督敎却て全國多數の人民より反情を表せらるゝものは何の故なるや、是れ蓋し我國躰と衝突するものあれば也、それ其の我が國躰と衝突するものは何んぞや、即ち是れ一神敎が多神敎を容るゝこと能はざるの眞理より來るものなり、一神敎の獨一眞神は基督敎の經典に明言して曰く、我れの外に神ありとすべからず、我れの外に何人も拜跪すること勿れ、崇奉すること勿れと、此敎に従へば素より我數千年間の國史を抹殺せざる可らず、又た我が國民が皇室に對するの感情をして一



變せしめざる可らず、然れども此の如く國史を抹殺し、此の如く民心を一變するの日は、即ち是れ日本國家の命脈をば危亡に陥るの日にして、忠君愛國の精神に富める日本國民は容易に之に同意せざるべし、是れ基督教の我邦に行はれ難き所以にして、その本源は一神主義と多神主義との衝突にあるや、澎々として掩ふ可らざるなり、

儒教は多  
神教あり

以上論ずる所は道理と事實とによりて、凡神、一神、多神、三大主義の關係を説きたるに過ぎずと雖も、儒教の多神教たることは更に一言せざる可らず、儒教は上帝を以て最大至高の神とすと雖も、后土の神あり、山川の神あり、社稷の神あり、祖先の神あり、其他宇宙の自然力若くは人類の最も卓絶なるものを崇奉して之を神明とするに至りては、その幾千百種なるを知らず、而して所謂上帝は即ち后天の神にして、其位蓋し是等の上において其權衆神を統宰するものゝ如し、故に支那に於ては帝王のみ、唯だ上帝を禋祀することを得て、其他人民は亦た他神を祀るに過ぎず、其意蓋し謂ふ上帝の衆神の上に立つや、猶ほ帝王が庶民の上に立つが如しと、是れ孔子が罪を天に獲れ

ば禱る所なしとの語ある所以なり、抑も支那國民は夫の印度婆羅門教の如く、血脈により種姓カストの制度を立てずと雖も、亦た人類の才徳によりて貴賤尊卑の等級を設くることを好み、此等級を以て社會自然の秩序となす、人類社會既に此等級あり、鬼神界豈に獨り等級なからんや、と此に於て其宇宙の自然力若くは人類の最も卓絶なるものを崇拝して、種々の多神を立つると同時に、亦た多神の尊卑を定め等級を立て、上帝を以て最上至高の神なりとするに至れり、

然れども或は斯の如く種々の多神を立つるも、此多神の上において之を統宰する最上至高なる上帝を立てるを以て之を觀れば、是れ猶ほ國皇一人大權を握るの政体を稱して君主獨裁と政体なりと云ふが如く、最上至高の上帝ありて多神を崇拝するの宗教をば一神主義と稱す可らざるかと謂ふものあらんも知るべからずと雖も、儒教に於て崇奉する上帝は唯だ衆神を統宰する最上至高の神なりと云ふのみにして、耶穌教の獨一眞神の如く全宇宙を創造し攝理すと云はず、故に之を解説すれば、儒教の上帝は唯だ衆神



の長と云ふの意味にして、衆神の主と云ふ意味にはあらざるなり、若し衆神の上に一神の長を立つるの宗教を以て一神主義なりとするときは、世界の多神教は皆な盡く一神教と稱することを得ん、何となれば我邦の神道にも天之御中主と稱する最上至高の神あり、希臘の多神教にもゼオースと稱する最上至高の神ありて、是れ皆な衆神の司命なればなり、吾人は既に佛教儒教基督教の由りて起る所其性質を異にする所其互に關係する所其互に相反對する所を研究したれば、是れより進みて三大宗教の教祖、釋迦、孔子、耶穌に論及すべし、抑も吾人が第一教祖の章に於て釋迦、孔子、耶穌の人物及び品性を論じたるものは、唯だ是れ歴史上の事實に基きて論じたるものにして、教理上の理論に基きて論じたるものにあらざるなり、されば縱令三教の教理を信せざるものと雖ども、苟も歴史上の事實を信するものは、吾人の所論に對して括説を試みることも能はざるべし、何となれば是れ唯だ歴史上の釋迦、孔子、耶穌を論じたるものにして、教理上の釋迦、孔子、耶穌を論じたるものにあらざればなり、故に吾人は嘗て明言す、釋迦は佛性を

具すると同時に亦た人性を具し、耶穌は神性を具すると同時に人性を具すと、歴史上の釋迦、歴史上の耶穌は豈に他あらんや、亦た唯だ此人性的の一方より觀察したる釋迦と耶穌とに外ならざるのみ、故に釋迦、耶穌を以て宗教の建設者、眞理の發明者、社會の改革者、人類の一大偉人として觀るときは、其人性的の一方を觀察したるのみにて既に充分なりと雖ども、若し佛教基督教の教理をば精く研究せんと欲せば、彼等の教理上に於けるの位置を論定せざる可らず、然らざれば其教理を明瞭に了解すること能はざるものあればなり、故に吾人は是れより進みて、教理上の釋迦、教理上の耶穌を研究せんとす、

教理上の  
釋迦

一ツは、

抑も釋迦を論ずるには、歴史的、小説的、教理的の三種あることを知らざる可らず、歴史的の釋迦とは即ち第二章教祖に於て論じたるが如く、歴史の最も信すべき材料に因りてその人物、品性及び一代の生活、事業を説くものは、是れなり、小説的の釋迦とは釋迦の全軀を以て此世界に實存したる人物にあらずとし、若くは釋迦其人は嘗て此世界に實存したるにせよ、今日世界に傳は



るが如き生活、事業を爲したるの釋迦は嘗て此世界に實存したるものに非ず、是れ皆な前人一種の想像に托して其奇を傳へたるものを後人謬りて之を實事なりと妄信したりと解説するものは是れなり、而して教理的の釋迦は又た小説的と異なり、その故何となれば教理的の釋迦は元來教理の上よりして釋迦の實態、本性、能力、職分を論定したるものにして、必ずしも事實の有無を問ふものにあらず、唯だ其事實の有無を説くものはその教理の眞理なるを證明せんが爲めに過ぎざればなり、小説的の釋迦に至りては然らず、教理の眞理を問はずして唯だその事實の想像に出でたるを排斥す、故に歴史的の釋迦を主張するものは、歴史に本きて事實の許す限り釋迦の人物及び事業を事實として認定す、小説的の釋迦を主張するものは釋迦の生活若くは事業を一種の想像として認定す、教理的の釋迦を主張するものは釋迦の人物及び生活に就ては之を歴史に徴して甚だ疑はしき點あるにも係らず之を教理上の眞理として認定す、是れ三者の異なる所以なり、吾人乞ふ教理的の釋迦を論ずる前に方り、或る一種の小説的の釋迦を引ひ

て、小説的の釋迦を主張する者と教理的の釋迦を主張する者との同異を知らしめん、

小説的の釋迦を主張するの最も著明なる者は、佛國の學者セナルト氏なりとす、氏は釋迦の傳紀を著はして曰く、釋迦の傳紀は全く古代の希臘及び北歐に嘗て崇奉せられたる太陽神の形態を以て之を事實の上に想像したるものに外ならざる也、蓋し迦釋が其母摩耶夫人の腹より産れし時、光明を放つて全世界を耀したりと言ふものは、是れ太陽神の光一たび照らして魔雲忽ち散すと云ふの説を事實にしたるもの也、又た釋迦が菩提樹下に於て魔軍の誘惑と戦ふて之を降伏したりと言ふものは、是れ太陽神が天魔を降服したりと言ふの説を事實にしたるもの也、又た釋迦既に悪魔を降伏し、法輪を轉せんが爲めに大千世界に說法したりと言ふものは、是れ太陽神、炎輪を驅りて大空を馳すると言ふの説を事實にしたるもの也、又た釋迦既に老ひてその一族たる釋迦種族が鄰敵の爲めに滅亡せられたりと云ふものは、是れ夕陽既に傾きて紅雲の裡に埋没したりと言ふの説を事實にしたる者也、



又釋迦既に死して其骸骨を火するや、天上より雨を降して之を消したりと言ふものは、是れ太陽神火海に沈みて死亡せりと云ふの説を事實にしたるものなり。

右はセナルト氏が小説的に釋迦の傳紀を解し去るものにして、この是非は此に論ずべきにあらず、吾人は唯だセナルト氏の説を擧げて小説的に釋迦の傳紀を解し去るものは、此の如しと一例を示すに過ぎざるのみ。

若しこれ教理的に釋迦を解するものに至りて然らず、蓋し佛教根本の教理に於ては佛陀を分ちて法身、報身、應化身の三種なりとす、法身とは本覺の躰、即ち眞如を稱して之を云ひ、報身とは始覺の佛、即ち佛道を修して正覺を開きたるものを稱して之を云ひ、應化身とは報身が衆生を濟度せんが爲めに肉身に化して世界に降りたるものを稱して之を云ふ、故に釋迦は佛の應化身なり、然れども應化身として此の世界に降りたるものは、釋迦を以て始めとするにあらず、釋迦の前に蓋し七佛ありし也、而して一佛の攝理する世界及び其の教化を及ぼす時間は、亦た各々限りありとす、斯の如くなれば此大

千世界は佛陀の攝理によりて時間的に空間的に組織せらるゝものにして、釋迦が此世界に降誕せることは、蓋過去際に既に豫定せられたるものなりとす、故に釋迦は此世界に下生し淨飯大王の太子として迦毘羅城に降誕し、帝國の位を辭して精思苦行菩提樹下に、忽然大悟其道を成したりと云ふも、唯だ是れ衆生をして喻らしむるの方便にして、釋迦は生れながらの佛陀なりとす、即ち釋迦が自然にして、身寶、女寶、臣寶、馬寶、等を得たるものは、是れるの本來佛陀たるの表號なりと云へり。

故に歴史的の釋迦と教理的の釋迦とは大なる差別あるものなり、然れども釋迦一切の教理にして、是れは眞理なり、彼れは非眞理なりと差別を立つべからずんば、今日の佛教者たるものは、務めて此教理的の釋迦と歴史的の釋迦との間に調和を求めざる可らず、若し佛教は唯だ教理を以て立つ者なるが故に、歴史上に於ける事實の有無は更に問ふ所にあらずと云はば、歴史的の釋迦は一切抹殺するも亦可也。

教理的の釋迦既に斯の如し、教理的の耶蘇とは抑も又た何如なるものなる



や、耶蘇を論ずるにも亦た釋迦を論ずるが如く、歴史的耶蘇、小説的耶蘇、教理的耶蘇の三種あり、獨國の學者ストラウス氏の耶蘇傳は即ちセナルト氏の釋迦傳の如く、小説的に耶蘇を解したるものにして、セナルト氏の説よりは更に一層巧妙なりとす、而して佛國のルナン氏も亦た歴史的に耶蘇の傳を批評したるものにして、或は進みて小説的に耶蘇を解し去る者なきにあらず、然れども小説的耶蘇と教理的耶蘇との差別は既に前論によりて推知せらる可ければ、亦た茲に多言するの必要あるを見ざるなり、

吾人が緒論に於て一言したるが如く、第四福音約翰の首章に元始有道、道即神の一節あり、漢譯に於て道と譯するものは即ち英譯の「ウオールド」と言葉にして、希臘の原文には「ロエス」とあり、蓋し「ロエス」なる希臘語は「ロヂック」即論理と、その源を同ふするものにして、道理と言葉との二義を含めり、然らば此の約翰の首章に「ロエス」と稱したるものは、明に耶蘇を指すものにして、決して意義なき生命なき言葉にはあらざる也、是に由りて之を觀れば、耶蘇は無始以來上帝の懷にあるものにして、上帝の意を知り、上帝の意を人類に通じ

教理上の  
耶蘇

て、その光榮を彰すもの亦た耶蘇に如くはなし、故に肉身の耶蘇は羅馬帝オウガスタスの宇に猶太のベツレヒムの地に始めて降誕し、三十三歳にしてエルサレム原上に十字架の上に釘せられたりと雖ども、靈体の耶蘇に至りては上帝が天地を創造せし時、既に上帝の懷にありしなり、上帝が唯だ光りあれと言ふたる一言の下に燦然たる輝光に照らされて全宇宙俄に現出せし時、耶蘇は既に上帝の懷にありし也、されば約翰の首章に於て道は即ち神なり、是れ道は神と與にあるなりと言へるものは、耶蘇が明に神体より分れて神子となり、神子となりて上帝の意を人類に通ずるを説きたるものにあらずして何ぞや、故に基督教の教理によりて之を論ずるときは、耶蘇は肉身を現して此世界に下界すと雖ども、完全圓滿の愛徳を備へたるものにして一點の罪惡あるものにあらず、又獨り上帝の懷にありて上帝の意を知りしものは耶蘇なれば、是れ耶蘇は上帝と同く全智の主なりと云はざるを得ず、而して、耶蘇は何の故に肉身を現はして此世界に降るやと言ふに、是れ上帝の爲めには慈悲を示し、人類の爲めには其罪を贖ひ、上帝と人類とを調和せんが



爲めにして、その耶蘇を稱して神人間の調停者なりと云ふものは其意蓋し茲にありて存するなり、然らば十字上の死は耶蘇之を避くること能はざるにあらず、而してその人を避けざるものは、蓋し人類の罪惡を贖はんが爲めなり

佛教と基督との教理果して斯の如くなれば、教理的の釋迦は即ち是れ眞如の化身、教理的の耶蘇は即ち是れ上帝の分身にして、嚮きに吾人が孔子を加へ三大偉人として論じたる所の歴史的の釋迦、歴史的の耶蘇とは大に異なるものあり、

然るに此佛教基督教の二大教祖を分別して歴史的と教理的に研究してその一方に偏するの結果たる、二教に於て漸く反對の論派を生ずるに至らんとす、蓋し基督教に於て統一派ユニテリアンなる者あり、是れ専ら耶蘇の人性を見てその神性を見ざるものなり、又た佛教に於ては未だ何派と稱すべき論派を見るに至らずと雖、専ら釋迦の品性を贊歎し、却てその教理を輕忽にするの一派あり、是れ亦た佛教中にありて夫の基督教の統一派に類するもの也、

超性的の  
歴史と自  
然的の歴  
史

抑も基督教の如きは、之を佛教若くは儒教に比較して歴史的宗教と稱すべきにも係らず、その歴史は超然的の歴史、自然的の歴史の二種に分つことを得べし、超然的の歴史とは天啓及び奇跡の歴史にして、自然的の歴史とは普通人事の歴史なり、統一派の如きは學術の輝光を被り、宇宙萬有及び人間に關する出來事は一定不變の自然法に従ふて起るものにして、決して此自然法に悖るが如きことはなかるべしと確信して、遂に漸く天啓及び奇跡を非理なりとして之を拋棄するに至れり、此に於てその基督教を研究するにも自然的歴史の部分のみを取りて之を研究するに至れり、然らば統一派の眼中に映するものは、獨り人性的の耶蘇ありて神性的の耶蘇なきなり、

統一派は天啓を信せず、奇跡を信せず、又た耶蘇の代贖を信せず、唯だ耶蘇を以て人性の最高最善なるの表號とす、故に統一派は福音に就て耶蘇の盛大なる品性を想像して人類の模範となし、耶蘇の如くして始めて上帝に近くことを得べく、亦た精神的の生命を得べしとす、然れども彼等は既に人類の墮落を信せざるを以て拯救の必要を見ず、拯救の必要を見ざるを以て亦た



耶蘇の代贖を信せず、以爲らく上帝の存在は眞理なり、未來の世界は眞理なりと、然れども是れ亦た基督教の教理を假りて之を證明するにあらず、唯だ人性自然の感情と希望とを以て基本として之を援くるに學術の理論と發明とを以てするもの也、彼等又た以爲らく、人類は宇宙自然の進化によりて最高最善なる發達をなすことを得べし、然れども此の發達は物質的の發達にあらずして精神的の發達にあり、精神的の發達は耶蘇に倣ふにあざれば得べからずと、統一派は基督教の超然前に關する部分は、大抵之を信せず、唯だろの自然的、人性的に關する部分のみ之を信せり、此に於て彼等は舊約書を視ること他の歴史の如くなり、唯だ猶太國民を以て一種宗教に徹虔なるの國民とせり、モーゼ、サシエエル、ダビッド、ソロモンを視て聖賢なりとせり、シエブ、イサイヤ、エレミヤ等の著作を以て熱心なる宗教の信仰と思想とに満たされたるの文學なりとせり、然れども是等を以て天啓なりとせざるなり、然れども其耶蘇を視るも亦た同じ、唯だ彼を以て人性の最高最善なる發達を顯はしたるものなりとして神の分身とはせざるあり、

## 統一派

故に統一派は基督教の教理に於ては信仰と懷疑の間に彷徨して完全なる教理を有せざるも、耶蘇が人類としての品性を驚歎して之を以て道德の模範とするに至りては、基督教徒よりも一層熱心なり、更に之を約言すれば、統一派は基督教の福音より獨り耶蘇の品性のみを擇び去りて其他を信せずと云ふも、敢て過言なりとせざるなり、

斯る教派の起りしは、一方に於ては耶蘇の品性の完全なるを證明すると同時に、亦た他の一方に於ては基督教の教理の頗る不完全なるを證明するものなり、然れども統一派にしてその一神主義より凡神主義に進むこと能はざれば、基督教とも一致せざるべく亦た佛教とも一致すること能はざるべし、何となれば統一派は唯だ耶蘇の品性を以て人類最高の模範とするのみにして、其基督教の教理を確信せず、又た儒教、佛教及び其他各宗教の裡に於ても猶ほ砂礫の中より黄金を淘汰するが如く、多少の眞理を認めざるなきにあらずと雖ども、彼等にして一神主義を固持する以上は多神主義たる儒教にも反對すべく、凡神主義たる佛教にも反對すべければなり、然れども



耶蘇の品性を頌賛すると同時に、基督教の妄想を排斥する統一派の功業も亦た偉大なりと稱すべき哉。

然り而して基督教既に統一派あり、佛教も亦た豈に之に類する自由思想の徒なからんや、然れども佛教自由思想の徒が基督の徒一派に異なる所のもの、は、その全く教理を排斥せざるの點に存するのみ、蓋し佛教も大乘最上の法門に至りては收て超性的の教理を説かざるにあらず、收て普通の論理を以て推理す可らざるの教理を説かざるにあらず、收て自然的の法則に反對するの教理を説かざるにあらず、收て人間の思想に超絶するの教理を説かざるにあらず、然れども無常の説、因果の法、眞如の理の如きは經驗に徴し、論理に照らして疑ふ可らざるものあり、故に佛教全體の教理を信せざるものと雖ども、是等根本的の教理は之を信じ、更に釋迦の品性を以て人類最高の模範とするにあり、今や此の如きの一派は陸續として世に興り、漸次勢力を得んとするの傾向あれば、夫の基督教の統一派の如く、終に亦た一派を成すに至るべきは吾人が信じて疑はざる所なり。

### 教理達發の二代時

今や此の如く釋迦耶蘇の二大教祖を人性的に歴史的に研究するの各派漸く起りて勢力を得んとす、此後二大宗教之が爲めに信仰上に於て教理上に於て多少變動を生ずるを免れざるべし、之を要するに、世界宗教の發達は蓋し分ちて二代時代とす、第一時代に於ては身近より高尚に向ふて上り、第二時代に於ては高尚より身近に向ふて下る是れなり、例へば基督教の如き耶蘇世人に誨へたる福音の如き、極めて身近にして何人にも了解せらるべし、然れども羅馬帝國の亡滅後に及んで、始めてアウガスチン、クレメント、ゼロームの諸大神學者踵を接して世に出で、高尚深奥なる教理を唱へ、更に降りて中世の中頃に至り、高尚なる神學を講ずるもの益々多く、耶蘇の如きも世人唯だ神聖の一方を觀て人性の他方を觀ず、その教理愈々吾人日常の經驗と道德に違ふに至れり、然るに新教の改革一たび行はれ、人々始めて經典に就て眞理を研究するの自由を得たるが爲めに、基督教の感化は愈々吾人日常の經驗と道德とに親くなり、特に現世紀に至り夫の統一派が耶蘇の神性を措ひて人性を取るに至りては、高尚なる基督教は愈々身近となるに至れ



り、然れども所謂高尙なるものが其實果して高尙なるか、所謂卑近なるものが其實果して卑近なるか、是れ未だ判断し易らざるなり、然れども豈に獨り基督教のみならんや、佛教も亦た然るなり、釋迦滅後印度に於て先づ行はれたるものは、佛教に於て最も卑近と稱せられたる小乗教にして、その後に及んで所謂大乘の高尙なる法門愈々顯はれ、又其信仰の如きも印度に於ては厭世主義を高尙としたりしかば、其後東漸支那より我邦に入るに及んで、法門は益々高尙の點に達するにも係らず、戒律の如きは繁雜を去りて單純となり、厭世主義は一變して樂世主義となり、出世間道亦た漸く世間道として應用せられ、今日に在りては亦た此の如き一派發生したるを見るに至る、此れ豈に佛教の發達も亦た卑近より高尙に向ふて上り、既に一たび極點に達するときは復た高尙より卑近に向ふて下るものにあらずや、而して所謂高尙なるものが果して高尙なるか、所謂卑近なるものが其實果して近卑なるか、亦た未だ容易に判断し易らざるなり、吾人既に三教の中心たる三大觀念を比較し、亦た釋迦、耶穌が各其教理に於

儒教未來  
の世界を  
説かず

けるの位置を説きたれば、今又未來世界に就て三教の説を比較するの勞を執らん、

先づ儒教は未來世界に就ひては有なりと確言せず、無なりと確言せず、擧げて之を不問に附するものゝ如し、是れ孔子の本意とする所なり、然れども孔子以前支那國民が之に關するの思想を求むるに、人間の靈魂は死後に至りても全く消滅するものにあらずとの思想をば髣髴の間に認むるものあり、唯だ靈魂の生活する未來世界は果して實存するものか、又た果して何如なる光景なるかに至りては毫も示さざるなり、孔子嘗て門人の間に對へて未だ生を知らず、焉んぞ死を知らんやと云ふて解答を與へざりき、是れ孔子苟も一時の遁詞を設けて門人の問を拒むものにあらざるなり、蓋し儒教の精神とする處は現世にありて未來にあらず、苟も現在にありて自然に稟けたる明德を明かにし、本分を盡すときは既に以て人道の至れるものとす、未だ現世に於て明德を明かにし、本分を盡すこと能はずして、妄りに未來世界の問題に心を勞するが如きは、智者の爲す所にあらずとは蓋し儒教の精神な



らん、是れ亦た一種の識見なりと謂つべし、然るに宋儒に至りては未知生焉知死と云ふ一語の内に既に死生の關鍵を釋き破りたるものゝ如くに見解を下して、死生の理は猶ほ晝夜寒暑の往來するが如しと云へり、是れ誠に淺薄の說豈に以て死生の問題を解くに足らんや、亦た豈に孔子の本意に合ふものなりとせんや、

蓋し此死生の理は晝夜寒暑の相往來するが如しと云ふの意義は、即ち生あれば必ず死あるは是晝過ぎて夜來り、寒往ひて暑來るの理と異なること無しと云ふに外ならざるべし、是れ毫も靈魂の性質、未來の問題を解釋したるものあらざる也、抑も晝より夜に移り、夜より晝に移り、寒より暑に移り、暑より寒に移るものは、即ち是れ晝夜寒暑の往來するものにして、生死の理も亦た之に外ならずと云ふときは、是れ生の後には死あり、死の後には復た生ありとするにあらずや、斯の如く展轉生死すと説くものは、是れ豈に佛教の説く所に類せざらんや、るれ生あれば死ありと云ふものは、是れ明白實驗の事實にして、若し此事實のみなれば何ぞ他の類推を俟ちて然る後に之を知ら

基督教の  
靈魂不滅  
説

んや、亦た何ぞ晝夜寒暑の比喻を俟ちて然る後に之を知らんや、唯孔子の門人が孔子に問ふ所のものは、死後の状態是れのみ、人類世界の一大問題は人間の靈魂は形體と共に消滅するや否やの問題是れのみ、されば儒教は唯だ是れ現世教にして、未來世界の問題に就ひては解答を與ふるものにあらざるなり、然れども佛教と基督教に至りては、之を以て一大教理とせり

蓋し未來世界に就ひて佛教と基督教との異なる所は、佛教は生死流轉の理を説き、基督教は靈魂復活の理を説くにあるのみ、而して靈魂復活の理は舊約に説かず、唯だ耶蘇始めて之を説けり、何となれば、サドカイ<sup>1</sup>派の人嘗て耶蘇に若し死して復活ありとせば、モーセの律法に兄弟妻あり、子の一人死して子なければ妻なきもの寡婦を娶ることを得るとあり、然るに若し復活ありとせば、七人の兄弟あり、相繼いで死し、此七人に配せられたる一人の婦は復活の後誰れかに歸すべきやと質問したり、是れ復活の理はモーセの未だ説かざる所にして、耶蘇の始めて説たる所なればなり、又ニコデモは當時猶太



の祭司にして「パリサイ」派の最も學識に長じたるものなり、然れども彼れ復た復活の理を怪みて耶蘇に問ひたることあり、是等の事實を以て之を觀れば靈魂復活の理は耶蘇の始めて説きたること、益々以て證明すべきなり、然り而して耶蘇は靈魂復活の理由をば説明せずと雖も、蓋し基督教に於て靈魂復活を説くものは靈魂不滅の教理を立つるものなり、苟の靈魂不滅の教理を立つるものは靈魂の性肉體と同らず、肉體は有形にして複雑なり、靈魂は無形にして純一なり、有形の者は生滅あるも、無形の者は生滅あるにあらず、複雑の體は集散あるも、純一の體は集散あるにあらずと云ふに外ならず、而して死者の靈魂地下に永眠して審判の時到るを待ちて忽ち復活して悪人の靈魂は地獄の苦に投せられ善人の靈魂天國の樂に登る是れを未來世界の狀態なりとす、基督教が靈活の理を説くも亦た明白なりと云ふべき也。

唯だ基督教が審判の理を説くに至りては、世の識者をして頗る首肯せしめざるものあり、何なれば基督教は善惡を賞罰するに天國と地獄とを以てす

### 佛教の生死流轉説

と雖も、是れ唯だ善惡の極端にあるものを賞罰するに適當なるものにして、此兩極端にある無量の等差、無量の階級を賞罰するに適當ならずと云へるの説是れなり、上帝の賞罰をして斯の如くならしめば、或は人をして公平ならずと疑はしむるものあり、此に於て地獄の苦も亦た永苦ならず、罪人の魂も亦た時を俟ちて救はるゝことあるべしと主張するものあり、

夫れ佛教の教理たる生死流轉の説に至りては、基督教靈魂不滅の教理とは甚だ同じからず、蓋し佛教は生死流轉の理を説くに因果の説と無常の説とを以てす、無常の説によるが故に物界にあれ心界にあれ生住異滅の四相に移されて遷流無常を免れず、唯だ吾人は我見を執するの甚きを以て、吾人の心識は念々生滅して現象を變ずるも自我と云ふ實體に至りては、生より死に至る迄變せざるものとす、然れども是れ變せざるにあらず、唯だその前後接續の迅速なるを以て我體ありとするも、其實我體は現象接續の間に生じたる惰力に外ならず、是れ心界も物界と同じく無常を免かれざる所以なり、此點よりして觀るときは、佛教の心識生滅説は基督教の靈魂不滅説と全



く反對なりと謂はざるを得ざるなり、然れども佛教は斯の如く一方に於ては無常説を以て靈魂不滅を説くと同時に、他の一方に於ては因果説を以て心識の相續を説く、是れ生死流轉の教理由りて起る所以なり、其説以爲らく無明一たびろの眞性に迷ふてより我見を生じ、我見集めて五蘊を合し、五蘊和合して種々善惡の動作を起し、善惡の動作は因果の法に連鎖せられて苦樂の報を生ず、然らば知らん佛教の教理に於ては眞如を以て不生滅躰とし、萬法を以て生滅象となし不生滅躰には生滅なきを以て因果あることなきも、生滅躰に生滅あるを以て因果あり、而して生滅は即ち無常なるを以て無常は生、住、異、滅に移されて遷流すと雖ども、獨り此因果法は前象後象を連鎖するの勢力あり、果して然らば生死流轉なるものは無常と因果との合果にして、此合果の外に別に不滅の躰あるにあらず、是れ佛教に於て一異説ある所以なり、

### 無常と因果

抑も一異説とは何んぞや、此無常と因果との合果によりて彼界より此界に彼の身より此の身に生死流轉するの前身と後身とは果して同躰なるや、將

た別體なるやの問題是れなり、吾人の心識念々生滅すると同時に自我も亦た刻々變化するを以て之を觀れば、過去の我は現在の我にあらず、現在の我は未來の我にあらず、故に同躰として存すべきものは一も之れあらざるなり、然れども因果の法は善惡の作業、苦樂の果報を連鎖して之を貫くを以て之を觀れば、吾人が未來に於て受る所の果は即ち吾人が現在に於て作る所の因なり、同因は必ず同果を生じ、異因は必ず異果を生ず、故に無常の見を以て之を觀るときは、前身と後身とは全く異なり、因果の法を以て之を觀るときは、前身と後身とは全く一なり、而して此無常と因果とによりて生ずるの合果なれば、之を異なりと言はんも可なり、之を一なりと言はんも亦可なり、畢竟するに生死流轉の教理は一異説を以て其要を説明すべき也、

然るに世の佛教に昧きもの、動もすれば此一異説を以て獨り小乗の説く所とし、大乘に至りては眞如を以て心識の躰とするが故に、心識は即ち不生不滅なりと説くものなきにあらず、然れども是れ眞如と萬法との差別を明にせざるものなり、眞如を以て其躰とするものは獨り心界のみにあらず、物界



## 本説の約

も亦た眞如を以てその躰となすものなり、之を要するに、物界心界皆な眞如の現象たるに外ならず、而して現象は皆生滅あるを免れず、是れを安んず心識の躰は眞如なるが故に不生滅なりと云ふを得んや、

以上第三章の論ずる所の全体を總括して之を約説すれば、先づ基督教の教理は宇宙的思想に基き、佛教の教理は心理的思想に基きたるを論じて兩教の起源を論じ、是に由りて兩教の勢力を占むるや、各々其時代あることを論じ、(宗教革命論参照)遂に進みて佛教と基督教とはその形貌上に於て類似する所あるも精神上に於て一致す可らざる所あるを明にし、又た之に加ふるに儒教の二教との性質を異にするの點を以てし、基督教は歴史的宗教なり、佛教は理想的宗教なり、儒教は制度的宗教なりとの斷案を結びたり、是れ専ら反對の點よりして三大宗教を評論したるものなり、次に三大宗教は是等反對の點あるにも係らず、その發達に於ては一致する所あるを明にし、その觀念に於ては調和すべきものあるを明にしたり、是れ一致の點よりして三教を評論したるものなり、

然るに進みて三大宗教はその觀念に於ては一致する所あるに係らず、その凡神一神多神の三主義に至りては、或は反對し、或は一致する所を明にして、三教の互に相關係する所以を明にしたり、而して佛耶兩教の最大教理は佛教に於ては眞如、基督教に於ては上帝、佛教に於ては佛陀、基督教に於ては神子、佛教に於ては生死の流轉、基督教に於ては靈魂の復活に攝約せらるゝを以て是等の問題に就ひて最も簡明に説き去り、之に加ふるに儒教の教理も亦た比較せられ得べき限りは務めて之を比較して、以て三大宗教の根本教理を説明したり、故に讀者若し論緒を釋ねて本章の歸趣を得るときは、吾人が三大宗教に關する一種の思想を知るも亦敢て難しとせざるなり、

## 第四章 教會

佛教、儒教、基督教の三大宗教之を人物に約すれば教祖となり、之を眞理に約すれば教理となり、之を組織に約すれば教會となる、前の二個は一因に約すべく、後の一個は果に約すべし、而して此三個を總括したるものを以て宗教



三大宗教  
感化の勢  
力及び其  
性質

と稱する也、

抑も教理を研究するは思想の歴史に屬し、人物と組織とを研究するは事實の歴史に屬す、然れども此思想の歴史と事實の歴史とを併せて研究するにあらざれば、三大宗教の全体を盡すこと能はざるなり、吾人は既に三大宗教の教祖と教理とを論じて其因を説きたるを以て、是より進みて、三大宗教の教會を論じてその果を説くべし、是れ自然の順序なれば也、

教會と云ふの語を以て之を儒教に適用するは、世人或は以て適當ならずとせん、然れども吾人が此に用ふる教會なる語は唯だ宗教の眞理を維持し、若くは之を實行する爲めの機軸なりと云ふの意義に過ぎざるのみ、

抑も儒教の行はれたる世界は、第一儒教の祖國即ち支那、第二朝鮮、第三日本、是れなり、而して儒教の此三國に行はるゝや、各其感化に就て強弱廣狹の差別なきこと能はず、吾人先づ支那に於ける儒教勢力の廣大なるを説くべし、彼れ儒教の教祖孔子は當時に於て殆んど支那全國を歴遊し、七十二君に説き其説遂に行はれざりしに係らず、又た孔子三千の門人、七十の達者、十人の

賢哲は孔子の死後に於て諸國に分散せしも、遂に一人のアラトウを出さず、一人のアルシヒアデスを出さるに係らず、孔子の教が隠然社會に勢力を得て人心を支配するに至りたることは疑ふ可らず、孟軻は業を孔子の孫、子思の門人に受けたるを以て孔子の時を去ること百餘年の久きに出でず、而して孟軻の時に至りて天下愈々戰國の形勢を現はし、國家の制度文物既に蕩然地を掃ひ、社會人心漸く一變して其勢益々急危に趨くを以て、當時列國の諸侯にして苟も才智あるものは争ふて兼併の策を講じて以て覇業を立てざるはなし、此に於て孫武、吳起の如き兵法を以て、蘇秦、張儀の如きは番策を以て、孟嘗、平原の如きは死士を養ふて時君を要し、功名を立つるの術を施せり、孟軻此際にありて獨り儒教主義を主張し、口を開けば必ず堯舜を稱すと雖ども亦た後車數十乘、從者數百人、以て諸侯に傳食すと稱すれば、車馬侈麗を極め趨從雲の如く復た孔子諸侯に周遊したるの比に非ず、抑も又た孔子の時にありては上下の名分未だ全く亂れず、文武の澤猶ほ未だ全く亡びざるを以て、孔子は春秋を刪りて上下の名分を正し、禮樂を説きて風化を興さ



んと試みたるも、孟軻の時に至りては文武の澤既に全く亡び、上下の名分既に全く亂れたるを以て、復た禮樂を説かずして仁義を説き、尊王を勧めずして王道を興せよと勧めたり、故に當時の局外者よりして之を觀るときは、孟軻の蘇秦、張儀に異ならざりしは、猶ほ雅典市民の眼にソクラテスが其の反對なるソフリストに異ならざるが如くなりしに相違なきなり、

孔子の時に其道の行はれざる彼が如く、孟軻の時に儒教の勢力なき彼が如し、降りて始皇六國を合し封建の制を廢して郡縣となし、詩書を焚き儒生を坑にするに至りては、儒教愈々衰頽の極に達したるが如くなれども、是れ唯だ表面の觀のみ、更に其裡面を窺ふときは、儒教の勢力は實に驚くべきものあり、何となれば古來支那に於て始皇の如く大英斷を行ふたるの君はあらざるべく、始皇の如く大勢力を有したるの君主はあらざるべく、亦た始皇の如く大事業を成したるの君主はあらざるべし、彼が王翦、白起、蒙恬等の猛將を指麾すること恰も臂の指を使ふが如く、彼等を驅役して六國を滅したるの勢力は果して何如すや、彼が咸陽に阿房宮を建て、長城を築き、富賈を移し、

儒教感化  
の勢力を  
觀るべき  
二大時期

劍戟を鑄り、李斯、趙高等を用ひて峻法を布き、封建の制度を一變し、周公の井田を破壊したるの英斷と事業とは何如すや、然り而して當時始皇をして懼れしめたる大勢力あり、此勢力は北胡にあらず、六國にあらずして、輿論にありしなり、此輿論は他にあらず、彼れ詩書を習ひ法を孔子を誦するの書生是れなり、此に於て詩書を焚き、儒生を坑にして一時輿論の口を箝制するに至れり、然らば當時儒教が隱然勝利を占めて社會を動かすの勢力を有したることとは是れ豈に彰明較著なる一大事實にあらずや、然るに始皇既に死して柩棺未だ冷ならざるに、山東の蒙傑峰の如くに起り儒生も亦た頭を草莽の中より現はし、漢孝惠、孝文の世に至りては儒教全く凱歌を奏するに至れり、是を支那に於ける儒教勢力の廣大なるを觀るべき第一時機なりとするなり、

又其第二時機と云ふべきものは元清の二朝が一は漠北より起り、一は滿洲より起り、共に皆な支那本部の國民と言語を異にし、生活を異にし、宗教を異にする異種の族を以て支那に侵入し、兵力を以て帝國を建て新朝を開き、之



が爲めに衣服を一變し、習慣を一變し、法制を一變したるにも係らず、その儒教を尊崇し孔廟を敬祀するに至りては實に前朝にも優さるものありしこと是れなり、蓋し彼等は孔廟を祀ること自家祖先の廟を祀るが如くせり、彼等は眞實より儒教の徒となれり、時に今代清朝の如きに至りては康熙帝以來外敵を伐つて勝利を得る毎に、必ず孔廟に捷を奏すと云ふ前代未聞の新例を開きたるが如き、尤も以てその儒教を尊崇するの精神を見るに足れり、蒙古の如き滿洲の如きは、支那國民が嘗て夷狄として賤みし所なり、此夷狄は兵力を以て所謂中國に勝てり、然れども中國は亦た文力を以て之に勝てり、文力とは即ち儒教なり、而して明朝以來儒教の經典即ち經義を以て士を取らざるの法を實施してより、清朝亦た之に沿ふてその制を改めず、此に於て文官たらんと欲するものは、何人にも儒典を學ばざるを得ず、是れ猶ほ基督教國に於て宣教師たらんと欲するものは必ず「バイブル」を學ばざる可らざると一般なり、若し専門として「バイブル」を學ぶものを以て基督教の僧侶と稱すべくんば、現時支那數十萬の官吏は皆な盡く儒教の僧侶と稱すべきも

のなり、故に一大帝國を興せしも遂に儒教の勢力に抗する能はずして之に屈したるは亦た以て支那に於ける儒教勢力の廣大なるを觀るべき第二時機なりと謂ふべき也、

儒教がその祖國たる支那に於けるの勢力は此の如し、而して此勢力の性質は何如なるものなるや、是れ亦た研究せざる可らず、即ち此勢力の性質は前章にも論せしが如く社會に於けるの一大勢力なる也、一方に於て歴代の帝王は儒教によりて君主專制の主義を唱へて、以てその位を保つことを得たると同時に、他の一方に於て、億萬の臣民は無限服従の義務を知り、又激烈なる革命主義を懷きしは儒教の勢力なり、而して此主權者と一般人民との間に立つ一種に階級あり、彼等は文學を以てその職業とせり、彼等は朝廷を環りて立てり、彼等は人民の頂上に立てり、彼等は清議を持して朝廷の非政を監視せり、故に彼等は朝廷に對し、人民に對して甚だ勢力あるものなり、而して儒教の勢力は全く此の階級に存せり、例へば彼の東漢の清流の如き、彼の宋朝の洛蜀二黨の如き、彼の明朝の東林諸名士の如きは、歴史上に於て此の



階級の最も著きものなり、故に此階級にして朝廷と人民との間にありて清議を維持するの間は、朝廷は之を憚り、人民は之に依頼して、國家の綱紀壞亂するに至らずと雖も、此階級にして一朝々廷と人民との間を去るときは、革命の内亂忽ち之に従ふて、國家の顛覆を見るに至る、是れ支那二十二朝の歴史に徴して甚だ明白なるの事實とす、

然らば支那に於て君民に訓誨を與へ、且つ君民の間を調和し若くは之を維持するの勢力は、全く彼が如き文學社會と云ふ一種の階級によりて代表せられたる儒教の勢力なるや疑ふべからざる也而して儒教はるの教理によりて此君民の關係を定めて以て政治的感化を及ぼしたるの勢力あるが如く、亦た父子の關係を定めて以て社會的感化を及ぼすの勢力あるものなり、試に一看せよ、支那の如く保守主義の勢力に富みたるの國民は、又た那邊に於て發見すべきや、支那の文學、支那の習慣、支那の思想は、數千年間依然として一日の如くなり、而して支那國民が保守主義の勢力は、果して安くより來りたるや、若し保守主義は蒙古人種の特徴なりと云は、我が日本國民の如

きも亦た蒙古人種なり、何故に支那の如く保守主義に乏きや、是れ支那國民が保守主義の勢力は、全く人種より來らずして教育より來りしものなるを知るべし、而して之を教育するものは、即ち儒教の祖先教なり、更に一步を進めて儒教は何故に祖先教を生じたるやと問は、即ち其孝道を説きて父子の關係を定めたるの點よりして發達したるものなり、孔子の教に父在觀其志、父没觀其行、三年勿改、父之道可謂孝矣と云ふもの、是れ即ち保守主義の勢力を産み出だしたるの母胎なりと謂ふ可きなり、

されば支那國民が特色たる政治的の現象と社會的の現象とは、儒教全く之が原因となるものにして、儒教が支那國民に及ぼしたる感化の性質も亦た以て知るべき也、

儒教は支那國民に此政治的の感化の外に、猶ほ精神的の感化を及ぼしたり、儒教は此精神的の感化によりて支那國民をして實際的の國民とならしめたり、蓋し支那に隣する印度國民の如き、西藏國民の如き、蒙古國民の如きは、婆羅門教の如き、佛教の如き、理想的の宗教に感化せられてより、只管高尚な



る眞理を慕ひ、美麗なる理想を描き、之に心酔して漸く現世の事を顧みず既往に對しては其國の歴史を忘却し、現在に對して國家の利害を輕忽にし、將來に對しては進取の氣象を拋棄するの傾向なきにあらず、是れ其邦の衰弱に陥る所以なり、斯る中心に立ちて國家的の觀念を保ち、實際的の才能を見はし、將來世界の最帝國は英、清、露の三大國民ならん、今日識者をして想像せしむるものは、東亞大陸獨り支那あるのみ、而して支那國民に教育を與へて此の如きの國民たらしめたるものは、是れ老教にあらず、佛教にあらずして儒教なり、蓋し儒教の精神は未來にあらずして現世にあり、天國にあらずして國家にあり、理想にあらずして實行にあり、然らば支那國民をして未來的の人民たらしめずして現世的の人民たらしめ、天國的の人民たらしめずして國家的の人民たらしめ、理想的の人民たらしめずして實行的の人民たらしめたるものは、亦た儒教にありと謂はざるを得ず、之を要するに、儒教は人間と云ふの一大觀念を有したるの宗教也、故に支那國民も亦た人間と云ふ一大觀念を有したるの國民也。

斯く論じ來れば讀者或は言はん、儒教が支那に於て組織したりし教會は安くにあるやと、吾人之に答へて曰く、儒教の教會とは支那國家是れなりと、蓋し儒教は國家を以て教會となし、國家の外に教會を有せざればなり、儒教の目的、即ち明德、新民は國家機關によらざれば行れざるなり、是れ儒教が佛敎及び基督教と異なる所以也。

然れども儒教は敢て其の版圖を支那國民に止めず、之を擴張し朝鮮を経て我邦に入れり、朝鮮は周代箕子の封せられたる國土にして、秦漢以來或は支那に内属し、或は獨立すと雖ども、其文物制度盡く支那より輸入する所にして、支那の外に自立すること能はざれば、之を支那の一部と看做して可ならんのみ、獨り我邦に至りては儒教一種の感化を及ぼして、神道、佛敎と相鼎立するものあれば、大に觀るべきあり、抑も儒教の我邦に入るや、之を三期に分つことを得べし、第一期は應仁天皇の朝に百濟國其博士王仁をして論語を齎らしめて來獻せしめたること、是れなり、支那にありては漢の時代に當れり、然れども王仁なるもの天皇に侍して儒教の意を傳へたるや否や、吾人は



未だ之を詳にすること能はず、唯だ之を以て儒教輸入の第一着歩とするに過ぎざるのみ、故に第一期に於ては感化の見るべきものなき也、第二期は天智天皇以還、我邦と隋唐との間に交通の盛に開けたる時代にして、此時我邦の制度文物皆な一に隋唐に模倣し、東亞大陸の文化は一時我邦に輸入し來れり、然れども宗教としては佛教既に先に輸入したるを以て、儒教は唯だ其生命を制度と文學との間に保つに過ぎずして、第二期に於ては其實世人が想像するが如く儒教の精神は行はれざりしなり、既にして王朝漸く衰微し、兵馬の大權武門に歸してより、文教地を掃ひ、支那の交通も亦た絶へ、爾來支那の文學は獨り緇徒の間にのみ傳ふるに至れり、第三期は徳川氏の時代に於て、家康、秀忠、家光相繼ぎて文學を獎勵し、儒教を尊崇し、藤原愷、爲林羅山等の諸儒既に徳川氏の初世に輩出して程朱の學を講じ、その後及んで、伊藤仁齋、東涯父子の如く、荻生徂徠の如きは古學を唱へて宋學に反對し、山崎闇齋の如きは宋學より一轉して神道に入り、中江藤樹、熊澤蕃山の如きは餘姚の學を主張し、皆各々一新機軸を出だして一時の盛を鳴らしたり、故に徳川

三百年間は我邦に於て儒教の行はれたること前後比類なき所にして、忠孝仁義の風化は徧く海内に行れたり、而して徳川氏が三百年間の泰平無治を保ちたるものは、その創業家が種々の政略と制度とによると雖ども、儒教亦た興りて力なしと云ふべからざるなり、

然れども儒教が斯の如く非常の勢力を以て我邦に行はれたると同時に、その一大教理にして排斥せられたるものは孟軻革命の主義是れなり、孟軻は孔子と同じく我儒教徒に尊崇せられたりと雖ども、支那と我邦との國躰を異にするは、彼等も亦た之を知れり、然れどもその彼に心酔するの極、滔々として我を捨て、彼に倣はんことを恐れ、彼れ水滸義公の如きは夙に此に感ずる所あり、國史を修むるの志を發し、遂に儒者を聘し、學校を設けて和漢を折衷したる一種の學風を起すに至れり、此に於て孟軻革命の説が當時に排斥せられたるは、猶ほルウソウの民約説が今日に排斥せられたるが如く、而して水府の學は務めて孔子春秋の遺意を慕ひ、大に尊王攘夷の氣餒を援け、維新中興の大業を開くに於て最も力あり、是れ儒教の我邦に行はるゝ一種



變化して行はれたる所以なり、顧ふに 今上天皇陛下が一昨年煥發し給ふたる教育上の勅諭の如きも、虚心平氣に之を捧讀する時は、是れ亦た我が國體の精神と儒教の感化とに基づきたるものにして、佛教と基督教との如きは、蓋し得て與らず、然らば孔子の感化は今日猶ほ我邦を去らずと謂ふべきなり、

然らば儒教は上帝の性質と未來の世界とに就て、明瞭なる解釋を與へざるが爲めに、或る意氣よりして言ふときは、完全なる宗教とす可らざるにも係らず、人の人間と云ふ一大觀念を明にし、國家を以て教會とするの勢力は殆ど皆て東亞の天地を感化せしこと驚かざる可らず、而して其の感化の性質は佛教的の感化にあらず、基督教的の感化にあらずして、即ち儒教的の感化也、

佛教教會に至りては、その版圖は儒教よりも頗る廣大にして、その感化の性質も亦た種々複雑なりとす、先づ其教會の版圖より説き起さん、釋迦在世の時、佛教は既に印度の東北及び中央に於て無數の歸教者を得たるのみならず、

### 佛教擴張の三大線

らず、釋迦亦た錫蘭島に渡航して教を宣べたりと傳ふれば、當時印度全國を擧げて之を風靡したりと云ふも不可なきなり、然れども釋迦の滅後二百年の頃までは、佛教の大小二乗未だ全く分離せず、且つその教化は印度國內にのみ限りて一歩だも國境を出でざりし也、然るに此二百年の後に及び、大小二乗の分離始めて生じ、其後數百年を経過して、婆羅門教の激烈なる反動の爲めに第一の迫害に遭ひ、其後又た未だ幾くならずして、木連蠻人の爲めに蹂躪せられて第二の迫害に遭ひたり、此に於て佛教徒は難を逃れて四方に散じ、始めて佛教傳播の路を開きたり、而して佛教がその祖國印度を中心として東亞各國に傳播したるや、蓋し東北南三方の擴張線路を取れり、先づ南方の擴張線路は錫蘭島より進みて、緬甸、暹羅及び後印度近傍の諸島に入りしなり、是れを南方佛教即ち所謂小乗の一派とす、北方の擴張線路は印度の北國迦濕彌羅より、西藏に入り、是を中心として蒙古の諸部落に傳播す、又た東方の擴張線路は支那より朝鮮を経て我邦に進入したり、而して東北の擴張線路によりて傳播したるものは之を稱して北方佛教即ち大乘派と稱



するなり、

然るに此三方の擴張線路によりて傳播したる南北兩教の佛教を觀察するに、南方佛教は縱令教理の或點に就て見解を異にしたる二十派の異説を生じたるにせよ、全株よりして之を評すれば、猶ほ是れ一派の小乗教なり、之に反して東北の擴張線路より傳播したる大乘佛教に至りては、支那に於ては禪、天台、華嚴等の各派を生じ、西藏に於ては喇嘛教の一派を生じ、我邦に於ては眞言、淨土、日蓮等の各宗を生じたり、是れ蓋し小乗は嚴格なる戒律を重んずると一定の意義によりて教理を解釋するに職由せずんばあらず、而して支那の如き日本の如き蒙古の如きは種々の事情よりして小乗の道甚だ行はれ難きものあり、是れ亦た小乗獨り南方諸國に限りて東北各國に行はれざるの源因たらずんばあらず、

抑も北方の擴張線路より中央亞細亞に傳播したるの大乘佛教は、西藏を中心として喇嘛教の一派を開きたりと雖も、佛敎の西藏に入りしは既に夙く七八百年の前にあり、西藏は即ち支那唐代の吐蕃にして、其盛時に方りて

や兵を四疆に出だし、武力を以て版圖を拓きたることあり、然るに其後國勢漸く衰へ、元朝の漢北に起りて中央亞細亞統一の業を建つるに方りては、西藏も亦たその併呑する所となり、世祖の時に至りて發思巴なるもの其國に生れ、聰明絶倫年十五にして徧く三藏に通じ、佛敎の眞理を窮めたりと稱す、世祖之を尊信し、立てゝ國師となして天下の敎門を統べしめたり、此の發思巴の建立したる宗派を以て紅教と稱す、紅教は即ち元朝の國教なり、然るに識者の説に據れば、紅教は純粹なる大乘佛敎の教理のみにあらずして、其間或は婆羅門敎の教理と儀式とを雜ふるもの亦た少なからず、且つ其後に至りて種々の弊害を生じたるを以て、支那明朝の初代に方りて喀略巴なるものあり、支那四川省西寧衛に生れ、西藏に赴きて佛敎を學びしが、紅教の弊害を見て坐視するに忍びず、慨然として宗教改革の念を起し、純粹なる佛敎の眞理によりて、自ら一派を開きて紅教の外に獨立したり、之を黃教の祖となす、既にして黃教大ひに振ひ殆んど紅教をも壓倒するの勢力を得るに至れり、抑も宗喀巴二大弟子あり、一を達賴喇嘛と稱し、他を班禪喇嘛と稱す、達賴



喇嘛は西藏國の先王甘普の裔にして、世々王位を襲ぎしも、達賴に至り王位を捨て、出家したるを以て、別に第巴と稱する副王を設けて、兵刑賦税の務を分掌せしむるに至れり、然るに其後西藏は支那に内属したるを以て、支那皇帝は駐藏大臣を派遣せしめて、其國政を監督するにも係らず、達賴喇嘛は猶ほ一方に於ては西藏の政治的主權者たるを表し、一方に於ては宗喀巴の衣鉢を傳へて、黄教の法主となり、彼の基督教に於ける羅馬法王の如きの光景を現出するに至れり、

而して黄教の勢力は蒙古の各種族をしてその教に歸せしめ、遠くは東方滿洲に進み、又た現時露國の屬部たる布哩雅特種民の間に入り、中央亞細亞を風靡するの勢あり、故に支那帝國は之を以て一種の政略に用ひ、その國都北京に喇嘛教の廣大莊嚴なる寺院を建て、喇嘛法主を尊敬優待し、以て西藏及び蒙古の民心を繋ぎ、又達賴喇嘛の撰出ある毎に、政府は種々の手段によりて蒙古西藏の同教侶中より支那政府に忠實なるものを撰舉せしめて、以て外藩を駕馭するの一大妙策とせり、

然るに斯の如き中央亞細亞に勢力を得たる喇嘛教の一派は何如なる感化を及ぼしたりやと言ふに、蒙古西藏殺伐慘酷なる氣象を一變して慈悲寛大なる人民とならしめたることは是れなり、古來蒙古種族の猛悍にして殘忍なることは實に歴史の證明する所にして、彼れ元朝の始祖成吉思汗が嘗て此種族を率ひて四方を征したりし時の如き、鮮血は流れて河となり、白骨は積んで山となり、その兇暴なるは實に言ふに忍びざるものありき、然るに是等の種族一旦喇嘛教の教化に歸せしより、その殺伐殘忍なる氣象は何時しか一變して慈悲寛大の性質とならしめたり、昔は旅客を見れば其人を殺し其貨を劫したるの種族も、今や渴するものを見れば之に水を飲ましめ、餓ふるものを見れば之に食を與ふるの人民となり、病者を憐み、弱者を扶け、老者を勞はり、信義を重んじ、博愛を重んじ、忠順を重んずるが如き、殆んど其舊俗を一變するに至れり、是れ全く喇嘛教の教化によるものなり、蓋し喇嘛教僧の西藏にあるや、獨り僧侶として傳道の職務に服するのみならず、技師ともなり、教師もなり、勞力者ともなり、布教の傍に人民を助けたり、彼の布哩雅特種



民が既に露國に服屬したるの後、西藏より十二名の喇嘛教僧を招聘して布教を乞ひたることありしが、此招聘に應じて來りたる喇嘛教僧は不具及び羸弱なるものを度して徒衆となし之に誦經、醫術、算術等を授けて熟達せしめしかば、布聖雅特種民は大に悦服し、露國政府が竊に嫌忌するにも係らず遂に族を擧げて喇嘛教の信徒となるに至れりと、亦た以て喇嘛教感化の勢力あるを知るに足るべきなり、

抑も亦た喇嘛教が中央亞細亞に傳播したるは、大に中央亞細亞の諸種族を一致結合して交通を開くの勢力あるものなり、西藏蒙古の各種族は古來唯だ戰伐を以て交接するの外、道路開けず、貿易盛んならず、殆んど相隔絶して交通するの機會なかりしが、喇嘛教一たび傳播して彼等其教に歸せしより、彼等は同一の救主を戴き、同一の信仰を抱き、同一の儀式を奉ずるの人民となり、嚮きに馬上長槍を揮つて相接したるの祖先も、地下より今や手を握りて友愛の接吻を交ふるの子孫を見るに至れり、之を要するに、中央亞細亞蒙古種族の裡に精神的感化を吹き込みたるものは、即ち大乘佛教の一派たる喇嘛教の勢力なりと謂ふべき也、

又た南方の擴張線路は錫蘭島を経て、緬甸暹羅及び馬來半島に傳播し、北方の擴張線路に劣らざるの戦功を奏したり、然れども此擴張線路に於て傳播したる教理は小乗なり、且つその傳播日久しきを以て種々の弊害種々の迷信を生ずるを免れず、故に輓近に及んで宗教改革の精神は自ら其間に發生し、今を距ること九十年前緬甸國主は既に宗教改革の端緒を開きたり、暹羅も亦た數十年より迷信の中に沈淪したる佛教を捨て本來の純潔なる面目に回さんとするの運動を始めつゝあり、而して錫蘭島の佛教も亦た既に活氣を喚び起せり、唯だ北方佛教は道德の慈悲を尙ひ、南方佛教は戒律の嚴肅を尙ふ是れ蓋し大小二乗教化の異に原因するものにして南方の強北方の強彼れ是れその性を易ふるに至れり、

獨り東方の擴張線路に至りては、その實際の感化よりも寧ろ教理の發達に就て大に注目すべきありと雖ども、此事は吾人既に之を第三章教理の論に略説したるを以て、是れより一轉して基督教に説き入るべし、



基督教會が先づ歐洲全陸に勢力を得て、今日世界に傳播したるの一大事實は既に萬國歴史を一讀したるものゝ了知する所にして、復た吾人が茲に喋々多言するを要せず、歐洲に於て始めて人權平等の眞理を教へたるものは孰れなるか、一夫一婦の主義を教へたるもの誰れなるか、殺伐の風を一變して文明の俗となしたるものは誰れなるか、真心の生命と輝光とを與へたるものは誰れなるか、歐洲列國を打ちて一國となし、殘忍なる回教徒の蹂躪を免れしめたるものは誰れなるか、暗世時代に於て文學技術を保存したるものは誰れなるか、苟も是等の問題に就て一考するものは基督教が廣大なる感化を知るに難しとせざるなり、尤も羅馬教會が神聖を離れ俗權を弄するの時代にありては種々の弊害を生じ種々の汚點を見はしたること無きにあらずと雖も、世界各國の基督教各派を總括し、一大教會となして觀るときは、一の時代に於ては萎靡することあるも、他の時代に於ては之を振興し甲の教派腐敗することあれば、この教派之を救正し、基督教はるの裡に於て自ら主長し、自ら發達し、自ら進歩するの生命と勢力とを具へたるものゝ如

### 基督教の 新舊教派

くに想はるゝなり、  
今や事實に就て之を證明せんに、基督教の教祖耶穌はるの身を以て教の中心となして嘗て教會を設けし事、あざりし也、嘗て儀式を制せしことあざりしなり、嘗て未來の審判を唱へたる外に人の信仰を審判せしことあざりしなり、故に耶穌昇天の後にありても、其徒弟と信徒とは一の組合をなし、教會自ら教會の牧師を撰び、教會自ら教會の事務を管理し、唯だ此の如き組織を以て成立したる教會は、恰も曉天の星の如く、當時地中海の海濱に於て處々に見はれ、互に友愛の情を通じ、信仰の力を援け合ふたるに過ぎざりしなり、然るに其後に及んで教會の數漸く増加して、所謂「ビシヨア」なるもの其間に起り、都府にあるの「ビシヨア」等は地方にあるの牧師等を制するの習慣を生じ、教會に於ける中央集權の基礎始めて建設せらるゝに至りたり、而して此時羅馬は全歐政權の一大中心なるを以て、羅馬都府の「ビシヨア」は其勢自ら全教會の首長となり、特に夫の「ヴァイクトル」の如き、「グレゴリー」の如き偉大なる人物挺出し、種々の方策を以て中央教會の基礎を固めたるが爲め



に遂に羅馬法王と云ふ教權と俗權とを両手に握る一種の大權力者を生ずるに至れり、斯の如きの大權力者にして一たび其權力を濫用するに至る、其の腐敗の極に陥りたるものは素より論なき也、此に於て路錫起ちて宗教革命の大義を唱へ、此腐敗を一洗し、教權を俗權より分離して新政と云ふ更に健全にして純潔なる一大基礎を立てたるも、更にカルピンの如きものあり、嚴酷なる訓練と獨斷なる教理とによりて、此の一大革命の精神を破壊したるが爲めに、更に各種の自由教派交々起りて、此弊を救ふに至れり、是れ基督教會は腐敗するにも係らず、亦たその裡に於て自ら復活するの勢力を備へたりと云はざる可らず、

世界三大宗教の勢力と感化とは大略此の如し、吾人今日に方りて之れが感化の強弱大小を比較するは、頗る難事なりと謂はざる可らず、何となれば宗教の感化は獨り社會及び事物の内部に發したるの現象のみを以て之を判断す可らざればあり、若し唯だ其信徒の數を以て之を比較するときは、佛教と基督教とは著き差異あることなし、而して儒教は最少數なりと云はざる

種々の點  
より三大  
宗教の比  
較

を得ず、又た世界の局面に傳播するの廣狹を以て之を論ずるときは、基督教の占めたる幅員は最も廣く、佛教之に次ぎ、而して儒教の版圖亦た最も狹しと云はざる可らず、若し此三大宗教が現に行はれたる國民の文野を以て之を論ずるときは、基督教は最も開明の部分を占め、儒教之に次ぎ、而して佛教の信徒は最も未開の域にありと謂はざる可らず、若し人種を以て之を論ずるときは、基督教は専ら白色人種の間、勢力を占め、儒教と佛教とは黄色人種の間、勢力を占めたりと云はざる可らず、若し現今の進歩に就て之を觀るときは、基督教各派は最も活潑に宣教師を派遣し、傳道事業に熱心し、異教の國民を蠶食してゐるの版圖を拓き、佛教も亦た近頃、及んで活氣を煥起し、來り歐米國民の間に進入して多少の信徒を得、而して儒教獨り依然として自體を守るの光景なりと謂はざるを得ず、若し世界進歩の大勢よりして之を論ずるときは、佛教は此の大勢に先ちて、基督教は此大勢と伴ひ、儒教は少しく此大勢に後れたるの感なきこと能はず、然れどもその感化の永固に就て之を論ずるときは、儒教は、其祖國に永久不變なる感化を及ぼして、數千年



來の勢力を維持したるも、佛教と基督教とに至りてはその故土既に他教の爲めに蹂躪せらるゝを免れず、概して之を論ずるときは、儒教の感化はるの性質固着的也、佛教基督教の感化はるの性質流動的也、

抑も眞理は必ず善良なる結果を生ずと云ふ格言は、殆んど不可抗の勢力ある格言なりと雖ども、此格言の應用には亦た限界を立てざる可らず、何となれば此格言は政治の如き經濟の如き實際の結果を社會の局面に觀るべき眞理に至りては、此格言も亦た應用すべしと雖ども、宗教の如き人類終局の目的を未來に立つるの眞理に至りては、制限なくして此格言を應用する能ざるものあり、故に吾人は是れより三教感化の性質に就て聊か比較する所あらんと欲すと雖ども、直ちに之を以て眞理不眞理を判斷するものに非ず、讀者先づ其意を諒せざる可らず、

佛教と基督教とは  
世界主義にして儒

先づ佛教と基督教とに同じきものは、二教共に世界主義にして國家的にあらざることは是れなり、然れども國家的主義にあらざるが故に即ち國家破壊的主義なりとは云ふ可らず、蓋し佛耶二教共に唯だ人類普通の道德を説

教は國家主義なり

きたるのみにして、國家の必要を認めたるの教理なく、又國家を維持し若くは之を發達するは人類の義務なりと説きたるの教理なし、即ち二教は博愛と慈悲とを以て人類道德の精神なりとし、人類同胞及び一切衆生を救はんが爲めには其身を以て之が犠牲に供すべしと教へたるにも係らず、國家の爲めには生命を棄つべし財産を抛つべしと教へたるの教理はるの經典に於て之を見出すこと能はざるなり、されば佛耶兩教は愛人主義と云ふべきも愛國主義とは云ふ可らざるなり、唯だ佛教の少く耶蘇教に異なる所は、四恩を説き、國王の恩を以て一の數へたることは是れなり、然れども是れ亦た忠君主義と云ふべくして愛國主義とは云ふべからず、故に國王を立てざる民主國には適用す可らず故に概して之を論ずるときは佛耶兩教は個人を以て直ちに人類に結びたるものにして、個人より國家國家より世界と云ふが如きの順序を立てたるものにあらず、されば個人的の道德を發達せしめんが爲めに二教を以て必要なりと云ふは可なるも、國家的の觀念を發達せんが爲め三教を以て必要なりと云ふは不可なり、之に反して儒教の如き



は俗諦主義なるを以て國家の成立を維持し、若くは之を發達するを以て世界國民の最大義務となしたり、孔子が華夏を貴みて夷狄を賤しみたるが如き、其實自國の精神を重んじ、此精神を以て外邦に加ふる一種愛國の精神に外ならざるのみ。

佛耶兩教  
が國家的  
精神を養  
成する源  
因

然らば今日基督教を奉信する英國の如き、佛國の如き、露國の如き、獨逸の如きは何故に彼が如く愛國の精神に富みたるやと云ふに、是れ基督教の教理に基くにあらざりして寧ろ宗派の軋轢に基くものなり、蓋し全軀の上よりして之を言ふときは是等國民は基督教國に係らず、英國人民の多數は、アングリカン教會の立宗を以て獨り基督教の精神を得たりとし、他の宗派を外視するの風あり、此宗派の軋轢によりて内外の別始めて立ち、以て大に愛國の精神を養成することを得たり、故に基督教國に愛國の精神あるものはその本來の教理より來らずして、寧ろ其變態より來りたりと云はざるを得ず、然れども是れ豈に獨り基督教のみならんや、佛敎も亦た然らずんばならず、我邦に於て佛敎各派が最も愛國の精神を顯はしたるものは日蓮宗也、試に彼

吾人の國情を  
考へしに宗派の  
差を認む

れ宗祖日蓮上人の遺書を讀めば一として愛國の精神を以て盜れざるはなし、是れ果して何如なる故乎、蓋し日蓮上人は印度に佛敎なく、支那に佛敎なく、獨り我邦に存すと云へり、是に由りて之れを觀れば日蓮宗は最も宗派の見に強きものにして、その愛國の精神に富むも蓋し亦た偶然にあらざるなり。

然らば吾人は敢て基督教を以て愛國の元氣に乏く佛敎を以て愛國の精神に富みたりと斷言するものにあらず、勿論現今我邦の事情のみを以て之を言ふときは、佛敎は千餘年間我邦に發達して印度にも支那にも異なる新派を開きたるを以て、此宗派の見により大に内を重んじ外を輕んずるの風ありと雖も、基督教の如きはるの輸入日猶ほ淺く未だ我邦一宗の教派を立てざるを以て、却て外を重んじて内を輕んずるの風なきにあらず、然れども今後基督教界に於て、佛敎の空海の如き親鸞の如き日蓮の如き一大偉人現はれ出で、我邦一種の基督教派を建設したらんには、基督教徒も亦た始めて内を重んじて外を輕んずるの精神を養成せんこと敢て佛敎に異なら



ざるべきなり、今や我邦に於ける佛耶二教の徒動もすれば此理に味く、佛教徒は自ら誇りて愛國の精神に富みたりとするも、其實彼等の所謂愛國の精神は此宗派の精神は此宗派の見に出でたるを知らざるなり、基督教徒は自ら稱して基督教徒の主義は唯だ世界主義あるのみと云ふと雖も、其實世界主義を進めて愛國主義となすものは却て基督教徒の一大進歩なることを知らざるなり、之を要するに、佛教徒と基督教徒とを問はず、皆な日本國民たるに相違なければ、日本國民としては一般國民の如く彼等亦た必ず自國を愛するの精神を抱くならん、然れども若し佛教徒若くは基督教徒として自國を愛するの精神を抱くとせば、此の精神は佛教若くは基督教が各其本來の教理に發したるものにあらずして、宗派の見に出でしものなること明白なり、

夫れ然り佛教及び基督教は元來世界主義にして國家主義にあらずれば、その及ばず所の感化も亦た直接には人類に及びて然る後に國家に及ぶものなり、特に佛教の如きは基督教に比較すれば、大小二乘共に多少厭世の趣

味を含むものあるを以て、苟も佛教を奉信するの國民は務めて意を立國の事に注ぐにあらずれば、國民宗教的の勢力は日に進むも國民國家的の勢力は將さに退くに至らんとす、試に看上彼の西藏の如き彼の蒙古各部の如き一旦佛教を奉信してより以來、人民の猛悍殘忍なる氣象は一變して慈悲寛大なる性質となりたるも、その武力と勇氣とに至りては遠く往時に遜る者なきに非ず、是れ亦た佛教感化の然らしむる所なりと云はざるを得ざるなり、斯の如きの理由に依り、佛耶兩教が國家の上に及ばずの感化を論せんとするは其實甚だ難しとす、然らば佛耶兩教が世界文化の上に及ぼしたるの感化は果して何如んや、此一大問題に就ひては新事實を擧げて之を比較せんよりは寧ろ謬思想を破し、世人をして自ら公平なる比較を得せしめんとす、

基督教は  
白色人種  
が優勝勢  
力の源因

抑も此謬思想とは他にあらず、即ち白色人種と黄色人種とが文化進歩の異なるは宗教の異なるに源因すと云ふの思想是也、他語以て之を言へば、白色人種が文化の進歩は全く基督教より生じたる結果なりと云ふの思想是れ



若し武思想にして果して眞理ならしめば、白色人種が現に他の人種を壓倒してゐるの獨り世界進歩の大勢を導くものは全く基督教を信じてゐるの結果と云ふに外ならざるを以て、苟も他の人種にして白色人種と競争せんと欲せば、儒教の如き、佛教の如き回教の如き婆羅門教の如き宗教を抛棄し、各其國をして基督教國たらしめざる可らず、故に此思想をして眞理ならしめば、世界の進歩は獨り基督教の勝利に歸せざる可らず、今日にして此思想の由りて生ずるも亦た偶然にあらざるなり、蓋し歐米文化の國民は一つとして基督教の國民にあらざるはなく、偶々彼れ土耳其帝國の如き白色人種を國民の一部なるにも係らず、既に進歩の大勢に後れざるの國運の危急なること恰も死に逼らんとする人の如し、而して土耳其帝國の白色人種は回教を信ずるもの多くして基督教を信ずるもの少し、然らば白色人種が世界進歩の大勢を導くの勢力を以て基督教に歸するが如きも、亦た無理ならぬ臆測なりと云はざるを得ざるなり、

然れども詳に事實の上に就て之を考ふるときは、是れ亦た一種の謬想に外ならざるなり、吾人此の謬想を破せんが爲めに、先づ左の如き問題を提出すべし、

第一 非白色人種にして基督教を奉信するものは、亦た白色人種と同く世界進歩の大勢を導くことを得るや否や、

第二 基督教を奉信する白色人種の各國民が此世界進歩の大勢を導くの勢力は同一なるや否や、

苟も此二個の問題を解釋するときは、此一大謬想は自らその論理を失すべし、吾人乞ふ先づ第一の問題に向つて解釋を試みん、抑も基督教の各派は前世紀及び現世紀に於て非常なる熱心を以て布教事業を擴張し、世界の局面上に孰れの大陸に於ても、孰れの島嶼に於ても、多少の歸教者を得ざるはなし、特に布哇の如きマダカスカルの如き、其島民過半基督教に歸し、其他南洋諸島の如き亞弗利加濱海の諸種族の如きは馬來人種若くは黒人種にして基督教に歸教するもの甚だ多く、又た印度國民の如



きは少くともその四分の一は既に基督教の信徒となれり、是等の結果に就て之を觀るに、縱令彼等が基督教を奉信する信仰の念は白色人種よりも一層熱心なるあるに係らず、彼等の智力上社會上に於けるの發達は到底白色人種と匹敵するに至らざる而已ならず、基督教を奉信したるが爲めにその固有の自負心と愛國心とを失し、従順と卑屈とを混合したる極めて賤むべき氣風を養成したる爲めに、基督教を奉信せざる以前よりも却て大に發達の精神を消亡するに至れり、蓋し今日白色人種が世界進歩の大勢を導くの勢力なるものは多端なりと雖ども、主として第一國家の成立を維持する政治上の能力、第二、最近日進の學術を解して之を經濟的に適用する智力上の能力、第三、勞働に堪ふべき体力上の能力にあらずんば、あらず而して是等非白色人種にして基督教を奉信するものは果して是等の能力を發達したることを得るや、基督教の宣教師等は亦た果して彼等に是等の能力を與へたるや否や、勿論彼等は是等の能力を發達せざるべし、勿論宣教師等は彼等に此等の能力を與ふること能はざるべし、然らば布哇島民が何如に基督教を

奉信するも、南洋諸島及び亞弗利加濱海の種族が何如に基督教を奉信するも、到底白色人種と同一世界進歩の大勢を導くこと能はざるべし、否な事實に於て彼等は此世界進歩の大勢を導くこと能はざるなり、且つこれ印度國民の如きに至りては却つて之が反證を示めすものあり、何となれば歐米各國の基督教宣教師等は布教の任を帯びて印度に來り、此邦に止ること數年の久き、印度國民の質問に應じて之を説明せんが爲めに、基督教の教理を以て佛教及び婆羅門教を比較し、始めて基督教の教理は彼れ佛教及び婆羅門教の高尙深奥なる教理に及ばざるの點あるを悟りて、其歸國する頃に及んでは、却て印度の宗教思想に感化せらるゝもの甚だ多しと聞けば、是れ彼等は印度に與へんが爲めに往くものにあらずして取らんが爲めに來るものなり、果して然らば非白色人種の宗教は決して白色人種の宗教より劣れりとす可らず、宗教に於て既に劣らざれば、その劣るものは此にあらずして他にあるや、甚だ明瞭なりとする也、

斯の如く論じ來れば、黄色人種及び他の人種が今日猶ほ世界進歩の大勢を



導くに於て白色人種に一步を譲るものは必ずしも基督教を奉信すると否とにあらざるなり、

然らば第二の問題に移りて解釋を試みん、

抑も今日の歐米各國民を以て一大人種となし、更に其上に加ふるに基督教國と云ふ觀念を以てするときは、白色人種の勢力は誠に長るべきが如し、然れども歐米各國民を分拆して之を觀るときは、伊太利、希臘の二國は古代の名邦たるに係らず、他國の爲めに蹂躪せられて獨立を失ふこと甚だ久しく、現世紀に至りて始めて獨立の業をなすことを得たりと雖も、その國力は英、佛、澳に譲ること數歩なるを免れず、又た西班牙、葡萄牙の二國の如きは第十六世紀の頃より航海と殖民とを以て富強を圖り、世界の全局に縱横して勢威を振ひ列國を畏れしめたるは、今日の英佛にも譲らざるものありき、然れども今日を以て之を觀れば、その國力の漸く衰耗して光芒を失するは、恰も夕陽の海内に没するが如し、故に非白色人種の最も進歩したる國民即ち我邦と支那とを以て是等四國に對するときは、世界進歩の大勢と導くの

勢力は正さに對等の間にありと云はざるを得ず、然らば西班牙の如き葡萄牙の如きは宗教崇拜の念他の歐洲列國よりも一層薄弱なりと云ふに決して然らず、彼等が今日に於て此の如く退歩したるものは宗教信仰の薄弱なるも寧ろその信仰の過度なるに歸せずんばあらざる也、

斯の如く論じ來れば、白色人種の各國民が世界進歩の大勢を導くの勢力は決して同一なりと云ふことを得ざる也、然らば即ち白色人種が今日世界進歩の大勢を導くの勢力は、亦た決して基督教を奉信するに原因すと云ふことを得ざる也、

然れども或は謂はん、西班牙の如き葡萄牙の如きは、その國力漸く衰微し、その世界進歩の大勢を導くの勢力は、却て非白色人種の國民に及ぼさるに係らず更に彼等に就て更に着眼すべきものあり何となれば、彼等は基督教國に相違なきも、彼等は新教の國民にあらずして舊教の國民なり、故に基督教國にあらずれば世界進歩の大勢を導くこと能はずと云ふ全稱命題は廢棄すべきも、唯だ新教國民にあらずれば世界進歩の大勢を導くこと能はず



と云ふ分稱命題は猶ほ活生すべし、然れども是れ亦た反對の事實を擧げて  
 ろの謬想を破る亦た難からず、例へば彼の佛教の如きは西班牙、葡萄牙の二  
 國と共に舊教國民なり、又露國民が信奉する希臘教會の如きはろの教理を  
 固執するの點よりして之を見るも、ろの儀式を墨守するの點よりして之を  
 見るも、「ローマン、カトリック」と相去ること甚だ遠からず、而して佛國と云ひ  
 露國と云ひ、所謂世界進歩の大勢を導くの國民なり、然らば新教國民は世界  
 進歩の大勢を導くべきも、舊教國民は世界進歩の大勢を導くこと能はずと  
 云ふが如きも、亦た事實に一致するものにあらざるなり、  
 故に宗教の同異を以て文化勢力の優劣を論せんとするが如きは根據なき  
 謬想にして、取るに足らずと雖ども、彼れ白色人種が世界進歩の大勢を導く  
 と云ふものは畢竟事實なれば亦たろの源因とする所なかる可らず、而して  
 吾人は未だ詳に此源因を研究する能はずと雖ども、今日の愚見にては此の  
 源因を以て人種に歸するを至當なりと信ず、然れども白色人種と稱するも  
 のも蓋し亦た一派にあらず、羅馬の建國より近世史の中頃迄は専ら是れ羅

旬民族が勢力を展ばしたるの時代にして、彼れ伊太利、西班牙、葡萄牙の各國  
 は盡く羅旬民族にあらざるはなし、然るに今や羅旬民族の時代は既に漸く  
 過去に屬し、日耳曼の如き英國の如き、アングロサクソン民族の時代は既に  
 全盛の極に達し、ろの感化の勢力は殆んど全世界を掩へり、然るに「アングロ  
 サクソン」民族の後に漸く頭を擡げるものは即ち「スラボニック」民族にして  
 露國及びバルカン半島の如きは尤も將來に於て望みありとす、蓋し世界は  
 人種の競争戯場にして、或るものは起り、或るものは衰ふ、是れ亦た自然氣運  
 の然らしむる所にして、黄色人種の如きも亦た決して失望すべきにあらざ  
 るなり、

唯だ今日に方りて吾人が東洋佛教各國民の爲めに憂ふる所は未來を重ん  
 じて現在を輕んじ、出世間に偏して世間を忘れ、理想に厚くして實行に薄く  
 以て國家進歩の事業に冷淡なるの一事是れのみ、是れ現に東洋の佛教國民  
 に徴してろの然るを見るなり、而して南方小乘を奉信する國民の如きは最  
 も甚しとす、



佛敎に關  
する種々  
批評の辯  
明

或人或は佛敎と基督教との感化を比較して曰く、佛敎は凡神敎なり、基督教は一神敎にして個人の意を主とし上帝の命令に服従せしめんとす、故に一神敎は本心の責任を立て、凡神敎は個人の責任を没す、蓋し凡神敎は唯だ眞如の全軀を見て萬有及び人類の個體をも見ず、一神敎は上帝の存在を見ると同時に亦た萬有及び人類の個體をも見るなり、故に此凡神敎と一神敎とが教理の差別は東西國民の上に於て、亦た著き感化の差別を見るに至ると是れ蓋し吾人の一考に値する一大問題なり、

抑も此説の歸着する所を察するに、蓋し以爲らく東西國民が智力上物質上に於ける進歩の程度は姑く置いて之を論せず、東洋の佛敎國と西洋の基督教國と比較すれば、その精神上に於て著き差別あるものなり、蓋し東洋國民は唯だ君主あるを知りて臣民あるを知らず、君主は無限の權力を主張し、臣民は唯だ無限の服従あることを知るのみ、亦た各人自然の命運と必然の法則とに服従することを知りて自家の自由自家の責任あるを知らず、之に反して西洋國民は民權の伸暢せざる可らざると君權の制限せざる可らざると

を主張し、各人自家の自由と責任との重んずべきを明知せり、更に一言以て之を約すれば、西洋國民は個人の價値を知るも、東洋國民は個人の價値を知らずと云ふに外ならず、而して此一大原因を研究するに全く佛敎は凡神敎にして基督教は一神敎なればなりと、

抑も東洋國民が君主の無限權力に壓せられて自家の無限服従に安んずと云ふは事實なり、亦た東洋國民は西洋國民に比較すれば自家の自由と責任とを重んずることを知らずと云ふは事實なり、然れども此一大事實の原因を以て凡神敎に歸することは吾人未だその是非を知らず、而して况んや之を以て佛敎に歸するに至りては吾人愈々その不可なるを知るなり、乞ふ進みて之を論破せん

凡る東洋各國に古來君主專制の風大ひに行はれ、君主獨り國家を利有し、人民は毫も自由權理の何物たるを知らざるは事實たるに相違なし、然れども此の事實は果して佛敎の生ずる所にあらざるなり、何となれば支那佛敎の未だ入らざる以前より此風既にありしなり、印度は佛敎の未だ起らざる以



前より此風既にありしなり、又た印度以西に邦を建てたる波斯各國の如きもの佛教を奉信せざるにも係らず、亦た此風を免れざるなり、然らば東洋國民が自由を知らざるを以てその罪を佛教に歸せんとするが如きは、尤も事實に合はざるの理論にあらずや、吾人の所見を以てすれば、東洋に於て始めて個人的自由の眞理を顯はしたるものは釋迦を除きて他に其人あるを見ざるなり、釋迦が精神前平等主義を印度に唱へ四姓均く來りて我法を開くことを得べし、四姓均く來りて我法に歸することを得べしと言へり、是れ激烈に婆羅門教の一大鉄制に反對したるものにして、佛教が人類本來の平等自由を説きたることは此點に就て觀察せざる可らず、さればマクス、ムーラの如きは東洋に於て個人的自由を説きたるものは、獨り釋迦あるのみと云へり、是れ豈に事實に基かざるの發言ならんや、

然らば深く佛教の教理を研究せざるものが、佛教を以て自由に反對するの教理を含蓄すと思想するも、亦た其故なきにあらざる也、何となれば佛教は自然因果の法理を主張し之を以て精神界に適用したるの故を以て、以爲ら

く因果の法は即ち必然にして必然は自由と相反對するものなり、試に看よ吾人一切の行爲は盡く自己の意志に發するが故に、吾人一切の行爲は吾人全て之に對するの責任ありと主張するの理論は、豈に之を稱して自由説と云ふにあらずや、又た吾人今日の行爲は都て過去の源因より生ずるものにして、一も吾人の意志の如くならず、故に吾人は吾人の行爲に對して責任あるものにあらずと主張するものは、豈に之を稱して必然説と云ふにあらずや、而して佛教の如きは因果を以て道德の原則とするを以て自由説を取るものにあらずして寧ろ必然説を取るものなりと、吾人當さに此説の是非を研究せざる可らず

抑も佛教は吾人が今日に享けたる果報即ち境遇は、過去の因より現はれたりとするも、吾人が將來に對するの意志は即ち吾人の自由より發するものにして決して過去の因に束縛せらるゝものにあらずと教へたり、然らずんば佛教の一大教理たる轉迷開悟の説は成立す可らず、吾人一切の行爲は都て境遇の爲めに制せられて吾人の意志は自由ならずと云へば、佛教の教も



亦た徒勞に屬せざるを得ず、何となれば必然の法則に縛せられて自然の運命に赴かざるを以て、之を迷界より悟界に轉せしめんとするが如きものは到底徒勞に屬せざるを得ざればなり、されば佛教は因果の法を説かざるにあらずと雖も、必然主義なりとは稱し難きなり既に必然主義にあらず安んず之を意志の自由に反對するものなりと稱することを得んや、

論者或は謂はん佛教は意志の自由には反對せざるべしと雖も、既に心識の外に賞罰の權を司る上帝を立てざれば責任の念は自ら薄弱なるを免れざるべし、然らば東洋國民が責任の念に薄弱なるは豈に佛教の罪にあらずやと、是れ亦た深く佛教の教理を知らざるもの、謬想のみ、佛教は基督教の如く心識の外に上帝を立て上帝の賞罰に對する責任を説かずと雖も、人類善惡の行爲と善惡の行爲に酬ふる果報との間に因果不變の大法ありと教理を立つれば、彼れ唯物論派の如く斷無の見に陷るものにあらず、而して責任の念も亦た決して薄弱なりと云ふ可らず、然らば東洋國民は西洋國民に比較すれば縱令責任の念に薄弱なるにもせよ、此責任の念に薄弱なる

基督教國  
と云ふ一  
大觀念の  
起源

の原因は佛教にありと斷定すべからざる所なり、

斯の如く論じ來れば、國家上及び精神上に於て佛耶兩教が及ぼす所の感化は殆んど著しき差別なきに似たり、然れども二大宗教が既往に於て歴史上に及ぼしたる感化と將來に於て國家上に及ぼすべきの感化とに至りては、輕々看過す可らざるものあり、

蓋し既往に於て歴史上に及ぼしたるの感化とは他にあらず、基督教は歐洲列國を打ちて一團となし、以て基督教國と云ふ一大觀念を形成したるも東洋各邦の佛教を奉信する國民は、終に今日に至るまで佛教國と云ふ一大觀念を形成せざること、是れなり、抑も所謂基督教國と云ふ一大觀念は唯だに抽象的の觀念のみに止らずして、其實極めて勢力ある一種の團體なり、彼れ歐米各國はその國體を異にし、その利害を異にするにも係らず他の人種に對するに至りては、基督教國と云ふ一大旗合の下に相聯合して同感の情を表するものあり、その著明なる一例を舉げて之を言はん、今日各國の間に行はるゝ萬國公法の如きは、基督教國と非基督教國との間に區別を立て、基



基督教の慣例を以て之を非基督教國に強行せんとするものにして、基督教は萬國公法の恩恵に浴するも、非基督教國に至りては不利を感ずるもの少なからず、故に法律にして世界に行はるゝ間は基督教國と云ふ一大觀念は依然として猶ほ存すと謂はざるを得ず、而して此基督教國と云ふ一大觀念を養成したるものは即ち基督教なり、抑も歐洲列國の基督教を奉信する國民は斯の如く基督教と云ふ一大觀念を形成したるも、東洋各國の佛教を奉信する國民は何の故に佛教國と云ふ一大觀念を養成せざりしや、是れ豈に基督教の感化は佛教よりも強大なるが爲めか、反語以て之を言へば佛教の感化は基督教よりも薄弱なるが爲め歟、

然れども吾人は之を以て二教感化の性質よりも察る歴史、上偶然の出來事に歸せんと欲する也、蓋し基督教は其始猶太より起りて羅馬帝國に進入し大に迫害を被りたるも、耶蘇昇天の後未だ三百年の久きを出でずして、大に勢力を得、コンスタンチン帝の時に至りては茲に之を以て國教を立つるに至れり、而して當時羅馬が南征北伐、東討西誅の結果として歐亞の三大陸に

跨りたるの一大帝國は、道路四達し政令徧く行はれ、極めて布教に便なるを以て、基督教は此の一大時機を利用して大に傳播の路を開くことを得たり、此に於て基督教は羅馬帝國の下に發達したるも、その勢力は羅馬帝國よりも強大を極め、羅馬帝國は空前絶後の一大繁華を一場の夢に附し去りて衰亡したるも、基督教會は依然として獨り存し、俗皇倒れて法皇興り、政權去りて教權來り、羅馬法皇は歐洲全土の至尊と仰がれ、宗教の權力を以て各國を統一するに至れり、

然り而して彼が十字軍の役は更に一層羅馬法皇の權力を添へたるものにして、此一大出來事は種々の原因より起り、亦た種々の結果を生じたるにも係らず、概して之を論ずるときは、全く宗教上の熱心より起りたるものにして、その元帥は即ち本營を羅馬に置きたるの羅馬法皇あり、その將校は即ち各國の王侯なり、その兵卒は即ち基督教の信徒なり、斯る宗教上の信仰よりして前後數回數十年の久き、歐洲列國の王侯及び人民は異教徒に對して戦を開き、基督教の爲めに鮮血を流して、基督教會を擁護し、其間患難を共に



し甘苦を共にして死生を同ふす、而して羅馬教會は此役によりて益々その教權を擴張することを得たり、凡そ此の如く千有餘年の間同一の信仰を抱き、同一の法皇を戴き、同一の教會に屬したる歐洲各國民にして、豈に基督教國と云ふ一大觀念を養成せざるを得んや、若し果して東西地を易へ佛教各國をして千數百年間斯の如きの事變と境遇とを經過せしめたりと假定せよ、今日佛教を奉信するの各國亦た豈に致佛國と云ふ一大觀念の下にあらざるなきを保せんや、予れ羅馬法皇と云ひ十字軍と云ひ、皆な基督教が嘗て遭遇したりし偶然の出來事に發生したるの結果にして、基督教の教理より發生したる必然の結果にあらざる事炯然として火を觀るが如し、故に吾人は此基督教國と云ふ一大觀念の發生を以て之を基督教一種特色の感化に歸することを欲せざるなり、

以上は吾人が基督教既往の歴史に就て一大事實を説明して或る一種の論者が惑を解きしものなり、然れども今日基督教の將來に就て一大疑問吾人の胸裡に横るたるものは、基督教が我邦と支那とに於けるの關係是れなり、

基督教にして他日我邦及び支那に勢力を得て國民多數の信仰を支配したるの日には、果して社會上政治上に一大根本的革命を生せざるや否や、此點に就て吾人は大に疑を起さざるを得ず、蓋し今日の如く歐洲各國は、その建國の始めに關係ある宗教と傳説とは種々一ならずと雖ども、彼等は皆羅馬帝國の統一に遡るるの宗教と傳説とを失ふたり、且つ其時彼等は野蠻未開の境遇に在りしなり、故に彼等は容易に基督教に感化さるゝことを得たりと雖ども、我邦と支那とに至りては然らず、所謂我邦に於て我邦の國史を抹殺し支那に於て儒教の感化を一掃したるの後、我邦と支那とは果して能く社會上と國家上とに於ける一大根本的革命を免るゝことを得るや否や、然れども基督教の精神をして是非貫徹せしめんと欲するときは、其勢我邦の國史をも抹殺せざるを得ず、儒教の感化をも一掃せざるを得ず、然らば東洋各國に於ける基督教の命運は果して如何なるべきや、顧ふに基督教の新派たる統一派の如きは、前にも論じたるが如く唯だ基督教道徳の精神を取りてその歴史を棄つるものなれば、他日東洋に於て勢力を得るの基督教派



は統一派にあらんか、又た現時歐米の國民は佛教と云へば唯だ小乗あることを知りて大乘あることを知らざるも他日彼等の間に於て勢力を得るものは大乘派にあらんか、蓋し基督教の統一派と佛教の大乘派とは最も人心に入り易く亦た行はれ易きの性質を有するを以てなり、吾人が既に世界の三大宗教が感化の勢力及び性質に就て説く所は斯の如し、是れより一步を進めて三大宗教が其教理を維持し若くは之を實施するが爲めの教會を論ずべし、

第一儒教の教會は即ち國家是れなり、蓋し儒教は元來政府一致の主義を執るものにして孔子は完全なる理想的の國家を建設せんことを切望したり故に支那儒教が理想とする所の國家は古代希臘の理想とする所の國家と頗る相似たり、希臘の哲學者プラトウは嘗て國家の機關は宜く人心精神の機關に則るべきを論じたり、その説に以爲らく立法者は智力なり、兵士は意力なり、農工技藝は情力なり、人心に於て此三大能力の調和したるものを完全なる精神とするが如く、國家に於ても此三大機關の善く分業し善く調和

### 儒教々會 の組織

するものを以て完全なる國家とするなりと、此説を推して之を研究するに蓋し國家を以て宇宙最高の機軸とするものにして國家の外に宗教あるを認めず教會あるを認めざるものゝ如し、此の點よりして之を觀るときはプラトウの國家と儒教の國家とは相似たるものなきにあらざるなり、然れども儒教は獨り分業機關の調和したるものを認めて完全なる國家となすに止まらず、進んで國家を組織する元素、即ち個人を以て完全なる元素とならしめ、此完全なる元素を以て整理したる家族となし、整理したる家族を集めて完全なる國家を組織するにあり、故に國家の外に宗教あるを認めず、教會あるを認めずと雖もプラトウの如く結婚家族の制度に反對するものにあらざるなり、

故にこれ儒教の理想としたるが如き完全なる國家は、終に古今支那に於て實行せられたるを見ずと雖も、支那歴代の國家は儒教的國家の外に出る能はず、而して儒教の教理を維持し若くは之を實施するを以て自任する學生は歴代の官吏となり、以て朝政に參務することを得、歷朝の君主亦た毎に



儒教の教祖孔子を尊崇せざるものなきを見るときは支那歷朝の國家は大抵儒教の精神と一致することを得たりと云つべし、試に看よ儒教の大家たる董仲舒の如き鄭康成馬融の如き韓愈の如き程顥程頤朱熹の如き至守仁の如き、誰れか朝廷に仕官せざるものあるや、志を得るときは朝に進みて其道を行ひ、志を得ざるときは野に退きて其學を講ず、是れ歷朝儒者の本意とする所なり、然らば儒教の精神は政教一致の主義にして豈に國家の外に教會を立つるの必要あらんや、

儒教は斯の如く支那國家を以て教會となしたるを以て、儒教は即ち支那の國教となり、彼れ南北隋唐の如きは佛教最も勢力を得、その帝王をして歸教せしめたるに係らず、遂に世外教たるに止りて我邦に於ける王朝時代の如く佛教の高僧等が政務に與るを得ざりしは、儒教の勢力に遮ぎられたるに原因せずんばならず、

### 基督教々 會の組織

第二基督教會はコンスタンチン帝以來羅馬帝國の保護に依りて勢力ある教會を組織し、帝國滅亡の後に及んで教會の勢力は益々進歩し、羅馬法皇は

全教會を統理するの大權を操りて自ら基督の代理と稱し、政教二權を両手に握り、歐洲列國の君主をして泥塵の中に拜跪せしむるの勢力を有せしも、彼れ路錫一たび宗教革命の旗を靡かしてより、政教分離の端全く茲に開き、羅馬法皇は教會版圖の過半を失ひ、俗權干涉も亦た漸く各國の排撃する所となり、今や僅に一派の教會を成すに過ぎざるのみ、故に基督教新舊各派の組織は大略左の如し、

蓋し基督教會の組織は大別して監督教會、長老教會、組合教會エписコプス、キプロテア、アンコングレゲーションナルの三種となす、第一は俗界の君主政體に比すべく、第二は貴族政體に比すべく、第三は共和政體に比すべし、羅馬教會の如く英國教會の如く希臘教會の如きは監督教會の組織なり、又た米國に發達したる新教各派の如きは、大抵長老教會、組合教會の組織なり、而して基督教國が教會に對するの關係如何を研究するに、佛教の如きは嘗て舊教を以て國教となせしが、今や政府は教部省を設けて宗教に關する一切の事務を總轄し、苟もその國內に行はるゝ宗教にして十萬以上の信徒を有するものには、その信徒の多寡に比例して毎歲定額の保



護金を與ふるの制度を立つるに至れり、故に此保護金を受るの教會を稱して公認教と云ふ、英國は今日猶ほ英國教會を以て國教となし、國皇自ら教會の主長となり、獨り國教にのみ限りて毎歲鉅額の保護金を與へ、大僧正は國皇の名を以て之を任免す、故に英國教會の制度は之を稱して國立教と云ふ、露國は希臘教を以て國教となし、政府の内に大教院を置き、全國の宗教に關する一切の事務を總轄し、又た神聖會議なるものを設けて宗教に關するの問題を議決す、而して之の議決せしものは必ず露帝の裁可を経ざる可らず、又た國教僧侶の俸給、布教の費用に至りては國庫より毎歲鉅額の金を以て之を保護す、故に露國が希臘教に於けるの關係之を稱して政教一致の制度と云ふ、此他歐洲大陸に於ては普、澳兩國より西班牙、葡萄牙、和蘭、暹馬等の各國に至る迄、政府多少之を保護せざるはなし、故に或點よりして之を言ふときは、歐洲大陸の各國は未だ全く政務分離の主義を實施したる者に非ず、唯た米國の新教各派は敢て政府の保護を仰がず、敢て政府の干渉を受けずして自立自活を精神とすれば、之を全然たる政務分離の制度と稱すべき也。

### 佛教々會の組織

抑も是等基督教會の全体を總括して之を論ずるに、歐洲各國に於て新舊各派が或は國家と一致し、或は政府の保護を被るが如きは、今日に於て大に表面盛大の觀を呈するの一大原因たるに相違なし、雖ども更に深く之を察するに、此宗教に干渉し教會を保護するの制度たるや、漸く進歩したる輿論と背馳するの勢力なきにあらず、故に若し一朝にして此輿論勝利を制するが如きことあらば、基督教會の爲めには幸なるか、或は不幸なるか、是れ亦た心を潜めて研究せざる可らざるの問題なり。

第三然らば今日に於て佛教々會の組織は如何なるや、蓋し南方小乗の行はるゝ暹羅の如き緬甸の如きは、王室首として之に歸依するを以て多少政府の保護を受くる所あるべし、然れども錫蘭の佛教の如きは、蓋し基督教の長老教會に類するものあるべし、我邦佛教各宗に至りては、今や漸く政府の保護を離れて自立教會となり、之を大別するときには、本山教會、信徒教會の大組織たるに外ならず、而して本山教會は漸く衰へ、信徒教會は未だ起らず、是れ實に教會一新の時機なり、唯だ西藏に在る喇嘛教に至りては、即ち是れ全然



たる國教制度にして獨り至大なる勢力を有す、支那本部の佛教の如きに至りては、既に衰頹の極に達せりと謂つべし、故に精神的の感化を以て之を言ふときは、佛教の力は甚だ大なりと雖も、教會的の勢力に至りては、基督教に及ばざること甚だ遠きなり、

されば佛教と云ひ基督教と云ひ、各其固有の精神を以て世界國民及び個人に感化を及ぼすにも係らず、更に轉じて他の一方より之を觀察するときは、此二大宗教も亦た政治界及び學術界より影響を被ること少からず、即ちその政治界より被る影響とは各國々民の多數が國家に關するの思想一變すると同時に宗教も亦た漸く國家の保護を離れて自立自活せざる可らざるに至ること、是れなり、又た其學術界より被る影響とは國民の智識進歩すると同時に宗教に關するの思想と信仰と動搖せざる可らざるに至ること、是れなり、ドレバー氏嘗て學術進歩の結果を論じて、以爲らく學術の進歩は二重の影響を發生したり、即ち一は思想上に於けるの影響にして、一は經濟上に於けるの影響、是れなり、故に學術界より基督教に及ぼしたるの影響は其

力至大にして抗すべからず、深く之を熟考するときは、彼の路錫をして唱へしめたる宗教革命の如きも、其實學術進歩の結果に外ならず、而して今や羅馬舊教は大膽にも此大勢に敵せんとす、實に思はざるの甚きなりと、此れ唯だ豈に獨り羅馬舊教のみならず、佛敎に於ても喇嘛敎の如きは、此文化の大勢に向つて抵抗するの感情を懷くを免れざるなり、然れども學術の進歩より來る大勢は到底抵抗す可らず、今や喇嘛敎の如きは中央亞細亞の中心にありて東北は戈壁の漠々たる曠野に遮ぎられ、西南はヒマラヤの巖々たる峻嶺に隔てられるを以て、其間自ら別乾坤をなし、此の大勢の外に立つことを得たりと雖も、若し一朝にして彼の露國が西比亞鐵道の工事にして竣工するに至たりては、完轉たる數千哩の鐵道は忽ち中央亞細亞の中腹を貫き、滾々たる黒烟を吐きて東西往來するに及んでは、清國も亦た國防上の必要よりして之に對するの鐵道線路を敷設せざるを得ず、果して此の如くなれば、東洋佛教の羅馬たる拉薩も亦た終に學術進歩の影響を被るを免れざるに至るべし、而して猶ほ何の恃む所ありて此大勢に抵抗せんと欲する